

大原第二三遺跡

～緊急発掘調査報告書～

1978

箕輪町教育委員会

大原第二・三遺跡

1978

箕輪町教育委員会

序　　言

福与地区土地改良事業に伴なう、埋蔵文化財緊急発掘はその第一次として昭和52年夏大原北地籍包蔵地の発掘を行い、その成果を報告書として刊行したところであるが、本年は前年に引き続き大原南地籍包蔵地の発掘を耕地課の協力を得て敢行した。

本包蔵地は、福与地区的南端の南に傾斜した日当りの良い場所であって、水の便にも近く、先人の住居設定には好適の地のように思われる場所である。

果せるかな、祭祀に關係ありと類推される集石群があり、時を同じうして諏訪郡原村阿久遺跡の集石群が発掘されたこともあり、その解明は今後の研究に俟つとしても興味深いものを見るのである。

発掘が真夏のことであり、調査団員及び作業に携わった方々のご労苦も一々あったことを思い、本調査書刊行にあたって心からなる感謝の意を表して序言とします。

昭和53年10月

箕輪町教育長　河手貞則

大原第二遺跡

1978

箕輪町教育委員会

凡　　例

1. この調査は、箕輪町福寺地籍の土地改良事業に伴うものであるため、事業着手前に調査を完了する必要上緊急の記録保存事業とした。
2. 報告書は図版を主体とし、文章記述は簡略とした。
3. 遺構の縮尺は特別のものを除いて $\frac{1}{2}$ にしてある。
4. 石器類は $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ の2種類の縮尺にしてある。
5. 土器は $\frac{1}{2}$ 縮尺であるが特別の場合はスケールをつけてある。
6. 土器拓影は $\frac{1}{2}$ 縮尺である。
7. 本報告書の執筆者および図版作製者は次のとおりである。担当した項目の末尾に執筆者を明記した。
 - ・本文執筆者 友野良一・柴 登巳夫
 - ・図版製作者 土器、石器の実測、土器拓影。
小池幸夫・三沢 恵・上田恵子・柴 登巳夫
竹入洋子・大槻たつ子
 - ・写真撮影 柴 登巳夫・荻原 茂・小池幸夫
8. 本報告書の編集は主として箕輪町教育委員会があたった。

目 次

| | |
|-----------------------|--------|
| 序 | |
| 凡 例 | |
| 目 次 | |
| 挿図目次 | |
| 図版目次 | |
| 表 目 次 | |
| 第 I 章 遺跡の立地 | 1 |
| 第 1 節 位 置..... | 1 |
| 第 2 節 地形と地質..... | 2 |
| 第 II 章 発掘調査の経過 | 3 |
| 第 1 節 発掘調査に至るまで..... | 3 ~ 4 |
| 第 2 節 周辺の遺跡..... | 5 ~ 6 |
| 第 III 章 発掘調査の結果 | 7 |
| 第 1 節 調査結果の概要..... | 7 ~ 8 |
| 第 2 節 遺 構..... | 9 ~ 17 |
| 第 3 節 遺 物..... | 22~44 |
| 第 IV 章 ま と め | 46 |

挿図目次

| | |
|---------------------|----|
| 第1図 位 置 図 | 1 |
| 第2図 遺跡周辺の地形 | 2 |
| 第3図 発掘調査風景 | 4 |
| 第4図 周辺遺跡分布図 | 6 |
| 第5図 地形及び発掘区域図 | 7 |
| 第6図 遺構全測図 | 8 |
| 第7図 第1号住居址実測図 | 9 |
| 第8図 第1号住居址地層断面図 | 10 |
| 第9図 第1号住居址カマド実測図 | 10 |
| 第10図 第1号住居址カマド基部実測図 | 11 |
| 第11図 第2号住居址カマド実測図 | 11 |
| 第12図 第3号住居址実測図 | 12 |
| 第13図 第3号住居址カマド尖測図 | 13 |
| 第14図 第3号住居址カマド断面図 | 13 |
| 第15図 第3号住居址カマド基部実測図 | 14 |
| 第16図 第4号住居址実測図 | 14 |
| 第17図 第4号住居址地層断面図 | 14 |
| 第18図 第4号住居址カマド実測図 | 15 |
| 第19図 第4号住居址カマド基部実測図 | 16 |
| 第20図 第1号集石尖測図 | 17 |
| 第21図 第1号集石完損実測図 | 17 |
| 第22図 石器実測図(1) | 18 |
| 第23図 石器実測図(2) | 19 |
| 第24図 石器実測図(3) | 20 |
| 第25図 石器実測図(4) | 21 |
| 第26図 石器実測図(5) | 22 |
| 第27図 石器実測図(6) | 23 |
| 第28図 石器実測図(7) | 24 |
| 第29図 石器実測図(8) | 25 |
| 第30図 石器実測図(9) | 26 |
| 第31図 石器実測図(10) | 27 |
| 第32図 石器実測図(11) | 28 |
| 第33図 石器実測図(12) | 29 |
| 第34図 刀子実測図 | 36 |
| 第35図 八稜鏡実測図 | 37 |
| 第36図 塚 実測図 | 37 |
| 第37図 繩文土器拓影 | 38 |
| 第38図 土器・陶器実測図(1) | 39 |
| 第39図 土器・陶器実測図(2) | 40 |
| 第40図 土器・陶器実測図(3) | 41 |
| 第41図 土器実測図(4) | 42 |

図 版 目 次

- 第1図版 発掘区全景
- 第2図版 遺構
- 第3図版 遺構
- 第4図版 遺構調査状況
- 第5図版 遺物出土状況
- 第6図版 調査スナップ
- 第7図版 出土石器（1）
- 第8図版 出土石器（2）
- 第9図版 出土石器
- 第10図版 出土石器

表 目 次

- 第1表 出土石器要目一覧表.....31～36
- 第2表 出土土器・陶器要目一覧表.....45

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位 置

大原第二遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字福与433,1番地に所在する。西南にゆるやかな傾斜面を呈した扇状地上に位置している。国鉄飯田線木下駅の東南約1.5kmほどにあり、標高は715mで眼下を流れる天竜川との比高50mを計る。

(柴 登巳夫)

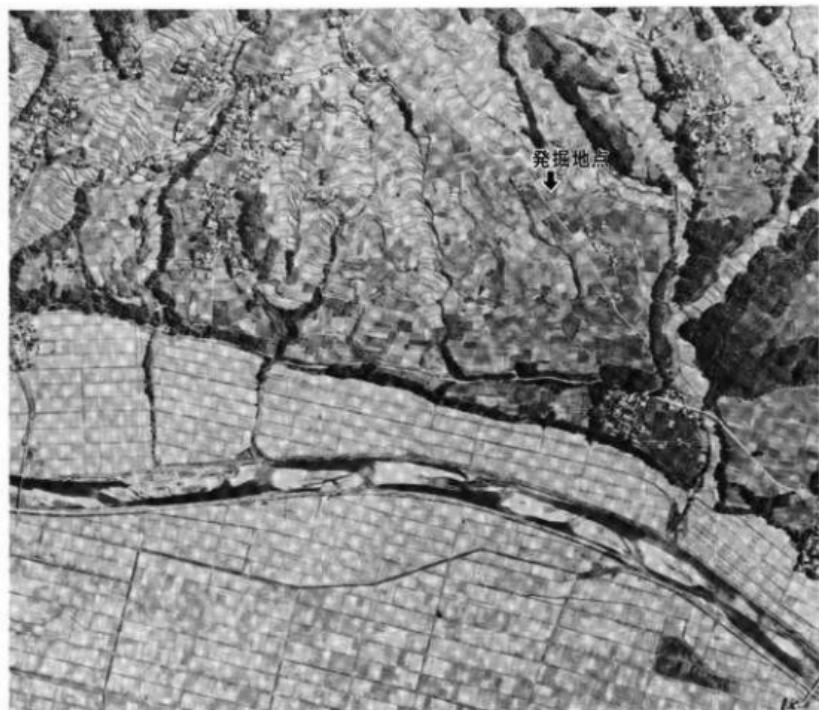


第1図 位 置 図

第2節 地形と地質

諏訪湖に源をもつ天竜川は、箕輪町を東西に二分するように流れ竜東、竜西の二つの呼び方をしている。竜西地区は経ヶ岳山麓から東方に流下する小河川、即ち、大泉川、帶無川、深沢川等によって複合扇状地形が形成されている。河川の運搬堆積によってでき上った複合扇状地は東方に向かって緩かな傾斜をしている。天竜川の左岸（竜東）は背後にすぐ山を控え、その山地を侵蝕し西方に流下する数多くの小河川により運搬堆積した土砂で竜西と同じく複合扇状地が形成されている。竜東の扇状地形は竜西に比べてはるかに急傾斜であり狭い山地は花崗岩が基盤をなし、比較的腐蝕度も進んでおり、堆積土中には花崗岩砂粒が含まれている。大原第二遺跡の立地する周辺は福寺地区の中では平らな地域で、遺跡は扇尖部に位置している。遺跡は標高715m地帯広がり、天竜川氾濫原との差がかなりある。このようにして形成された小扇状地上、あるいは段丘上には古代人の生活の場が密集しており、箕輪町における大遺跡地帯の一つに数えられている。

（柴 登巳夫）



第2図 遺跡周辺の地形

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

本地区は箕輪町福寺地籍の天竜川左岸台地の水田および畑作地帯で、地区一帯は水田と畑が点在し、排水の悪い湿田が多く、区画も不整形で小区画であり、農業機械の導入にも支障をきたしている現状であった。このような現状を打開するため、箕輪町が事業主体となって、団体営土地改良工事が計画され、昭和51年度から3ヶ年計画で進められているのである。昭和52年度における確認調査段階において、53年度土地改良工事予定地区内にも埋蔵文化財の包蔵が確認されていたため、工事前に発掘調査の必要ありとの判断で、県教育委員会文化課の指導のもとに発掘調査の計画を進めた。昭和53年4月に入り調査團を組織し、以後数回にわたり調査予定地区を踏査し、調査地区の決定を行なう。日本考古学协会会员友野良一氏を調査團長とする調査團を組織し、7月中旬から記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなつたのである。

イ) 調 査 団

| | | |
|------|---------|----------------|
| 団 長 | 友 野 良 一 | 日本考古学协会会员 |
| 調査主任 | 柴 登 己 夫 | 箕輪町郷土博物館主任学芸員 |
| 調査員 | 荻 原 茂 | 東京薬科大学学生 |
| | 小 池 幸 夫 | 静岡大学学生 |
| | 三 沢 恵 | 立正大学学生 |
| | 丸 山 弥 生 | 長野県考古学会員 |
| 参 与 | 馬 場 瞳 一 | 箕輪町教育委員会教育委員長 |
| " | 原 茂 人 | " 委員長職務代理 |
| " | 戸 田 宗 十 | " 教育委員 |
| " | 桑 沢 良 平 | " |
| " | 春 日 球 爾 | 箕輪町文化財調査委員会委員長 |
| " | 樋 口 彦 雄 | 箕輪町文化財調査委員 |
| " | 荻 原 貞 利 | " |
| " | 星 野 和 美 | " |
| " | 矢 沢 寛 治 | " |
| " | 市 川 修 三 | " |
| " | 小 川 守 人 | " |
| " | 堀 口 貞 幸 | " |
| " | 伊 藤 一 郎 | " |
| " | 上 田 一 江 | " |

| | | |
|-----|------|---------------|
| 事務局 | 河手貞則 | 箕輪町教育委員会教育長 |
| " | 唐沢保美 | 教育課長 |
| " | 唐沢千洋 | 社会教育係長 |
| " | 中村文好 | 社会教育係主事 |
| " | 田中正子 | " |
| " | 柴登巳夫 | 箕輪町郷土博物館主任学芸員 |
| " | 竹入洋子 | " |

四) 発掘調査の経過

調査地区が決定した5月中旬から3回にわたり事務局を中心に博物館郷土史クラブ員の協力で表面採集と地層調査を行なう。それにより調査地区内の埋蔵物の時代の予想とローム層までの深さ等、調査前における基本的な内容を知ることができた。調査面積が広いため表土30cmをブルトーザーにより耕土する。

調査は、発掘予定地区全体を2m方眼のグリッドの設定から開始する。東南の角を基点に西へA・B・C・D・列とし、北へ20~49列とする。結果的にはA列はカットし、18・19列は拡張列となる。

東南の角から1グリッドずつ「チドリ」に発掘を開始する。調査は晴天に恵まれ厳しい暑さの中で続けられた。調査開始数日後、住居址中より、青銅製八稜鏡の出土があり、調査員、作業員一同発見におどろき、以後の調査に大きな期待を持った。出土遺物は縄文時代早期のものから中世にまで及ぶ複合遺跡で、調査は約2ヶ月間続けられた。遺物は総数3000点に及び石鐵の数が多いことに注目した。以下に記した様に多くの成果をあげることができた。

(柴登巳夫)



第3図 発掘調査風景

第2節 周辺の遺跡

天竜川に流れ込む小河川によってできた扇状地上は古代の人々にとっては絶好の居住性をもつていたのであろう。本調査の行なわれたこの一帯は遺跡分布の密な地域である。箕輪町内は先史より近世に至るまでの歴史上の遺跡に富み、その総数は170ヶ所を越し、上伊那郡内でも屈指の遺跡地帯を形成している。町内の遺跡を立地する条件により分類すると次の4つに分けることができる。

第1類 経ヶ岳山塊の山麓付近に立地する遺跡群。

第2類 天竜川西岸の段丘上に列状に並ぶ遺跡群。

第3類 天竜川東岸の段丘、扇状地上に立地する遺跡群。

第4類 低位段丘（沖積段丘）の遺跡（注）1)

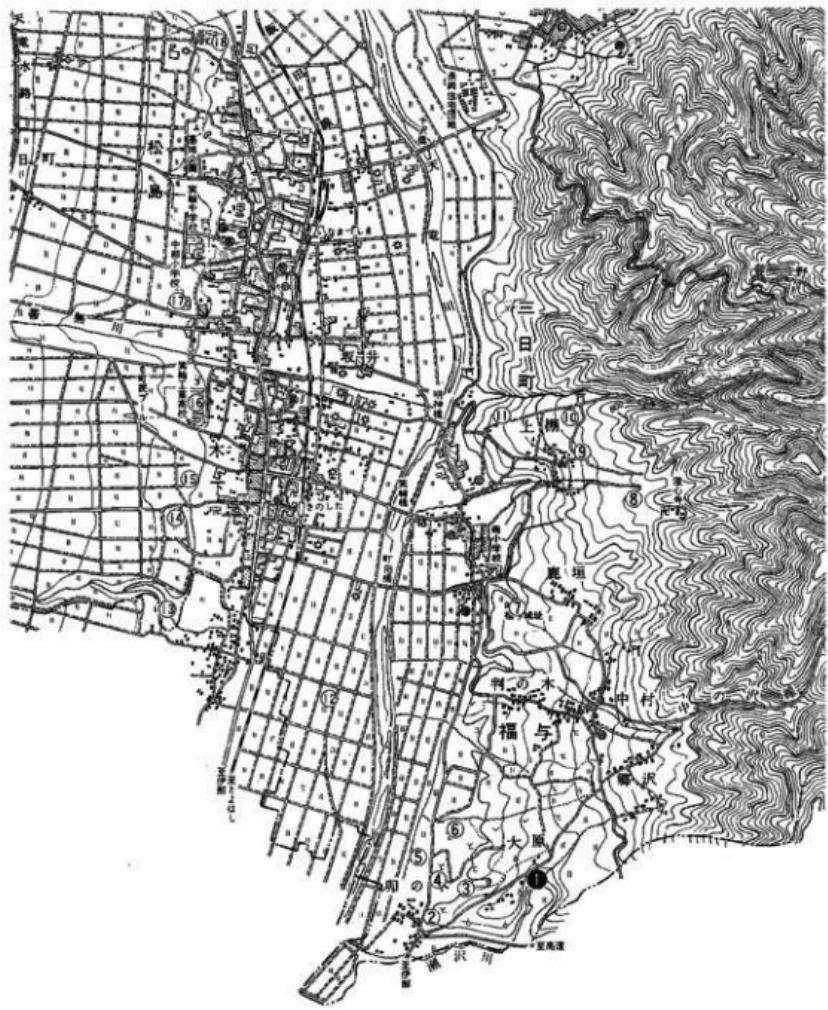
大原第2遺跡は第3類の遺跡群の一つである。第3類遺跡群も旧箕輪地区と東箕輪地区に分けて考えたい。大原第2遺跡は旧箕輪地区中でも大きな遺跡である。（注）2)

大原第2遺跡に近接する遺跡としては、矢田、矢田尻、上の山、上金、黒津原、北垣外等、過去の出土遺物も内容的にすぐれたものが多く出土している遺跡ばかりである。なかでも縄文時代前期の遺物を多量に出土している黒津原遺跡は、今後の研究対象として十分注意していかねばならないと考える。

（注）

1)箕輪遺跡に代表され、木製品資料を多量に出土することで有名な遺跡である。木製資料の中には田舟、田下駄、人形、鋤、などがあり水田構築のために使用されたといわれる木柵の数は数万本になるといわれ、それ等のことからも大規模な古代水田址として注目されている。なお今までに出土した多数の資料は箕輪町郷土博物館に展示されている。

2)本調査地区から500mほど西より「土笛」が出土している。土笛は上伊那地方では初めての発見であり、完形品であるため、吹くとすばらしい音色を出す。縄文人の精神生活面における貴重な資料である。

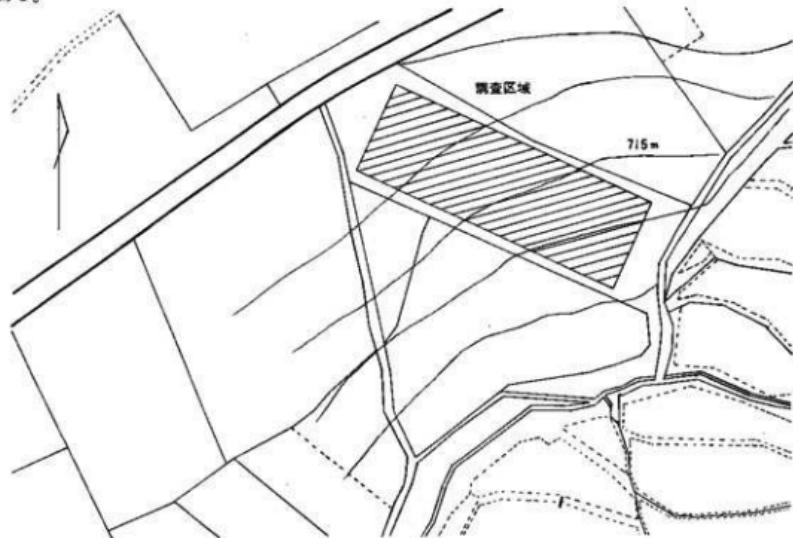


第4図 馬辺遺跡分布図

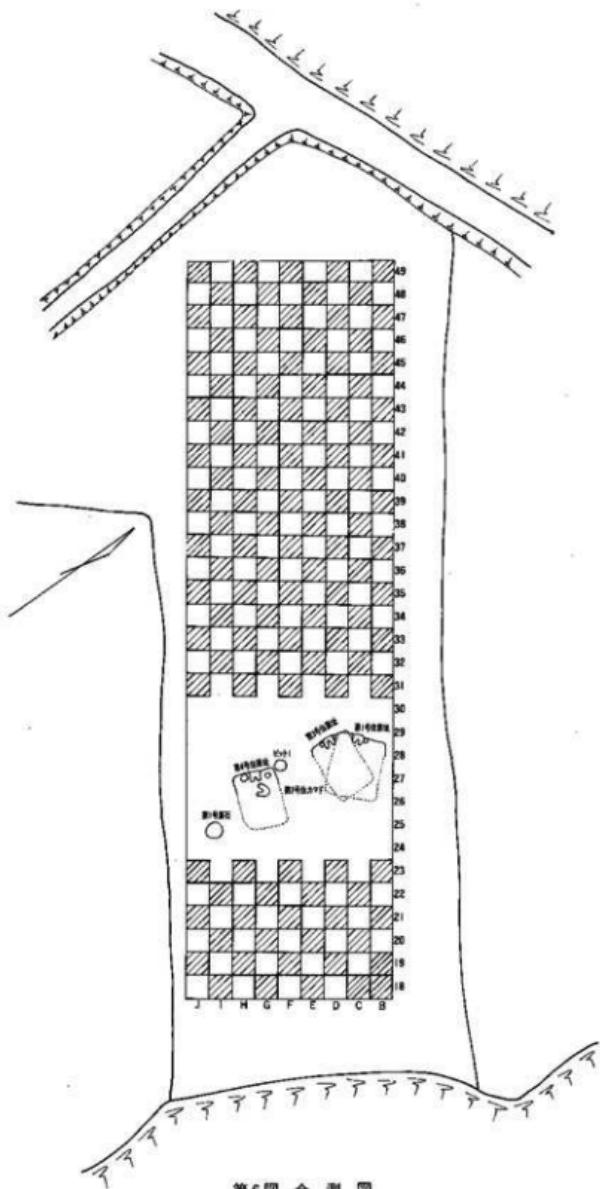
第III章 発掘調査の結果

第1節 調査結果の概要

調査の結果、縄文時代早期から中世にかけての遺構・遺物が出土した。縄文時代早期では、押型文土器とそれに伴うと思われる石器が数点づつ出土している。この時代の遺構と思われるものは発見できなかった。押型文土器はすべて格子目文である。平安時代の竪穴住居址が4ヶ所確認されたが、第1号住居址と第3号住居址は少し時代を異にしてはば重なるように切り合っている。第2号住居址はカマドのみ発見され、それに伴うはずの住居址プランがどうしても確認することができなかつた。第1号住居址と第3号住居址は、火災にあっており住居址のプラン内に焼土と炭化物が多量に検出されている。又、第3号住居址のカマドの天井石に「レンガ」状の焼きものを使用しており、大変めずらしいことである。第4号住居址の南に直径1m30cm、深さ40cmほどの集石ピットが検出されたが、これに伴う土器はほとんどなく、時代決定は難しい。4ヶ所の住居址のうち第3号住居址のカマドの遺存状態が最も良く袖部に柱状のしっかりした大きな石を立ててカマドを補強している。遺構が集中したあたりは全面にわたり果樹に肥料を施すために列状に深耕してあり、又、遺構が黒土中に掘り込まれていたため、土層観察やプランの検出に苦労した。遺物は総数3000点ほどで、石器が270点余である。このうち黒曜石製のものが7割近くあり、その多いのも特徴の一つである。



第5図 地形及び発掘区域図



第6図 全測図

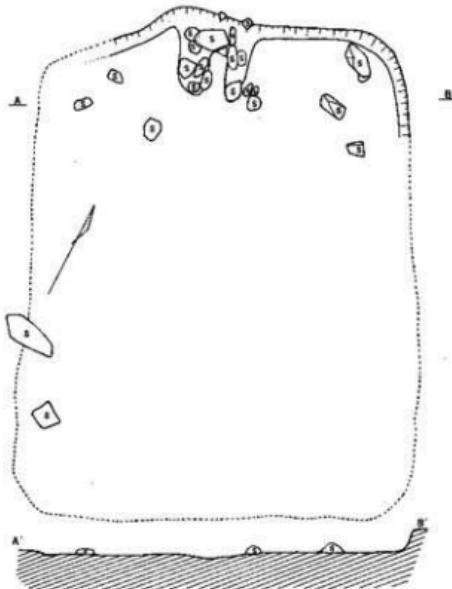
第2節 造構

1. 住居址

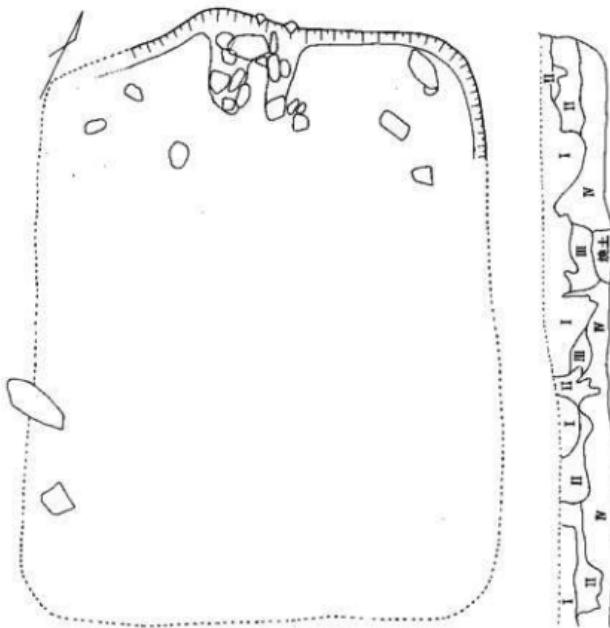
イ) 第1号住居址(第7図)

本住居址は調査地区の中央よりやや南寄りC-27・D-27グリット付近に位置する。表土約30~40cmの排土作業中にカマドに使用された石の一部が検出され、それに伴ない土器の出土もあり、その時点において遺構の存在が知られた。調査地区全体に北から南に傾斜しているため、北半分はローム層まで20~40cmと非常に浅いが、南側のやや平らな部分は、自然營力による土の移動で90cm以上と深くなっている。そのため第1号住居址は北寄りのカマド部分の壁はローム層に掘り込んでいたのではっきり確認されたが、他の部分は確認は困難であった。又、本住居址は第3号住居址と複合しており黒土を叩いて作った床のためプランの確認は不確実なものとなった。住居址の堅穴部分は推定、東西約4.2m、南北5.6mの長方形で、北壁の部分で落込確認面からの壁高は25cm前後である。調査が進行するにつれて覆土中に多量の焼土と炭化物が見られた。これは生活の途中か、又は住居の廃絶後かはわからないが、いずれにしても火を受けたものと考えられる。遺物はカマドの周囲に集中し、土師器甕・須恵器・灰釉壺等が出土している。又、床面やや上の覆土中より青銅製の八棱鏡が出土している。カマドは北壁の中央部にあり、その軸線とほぼ平行している。カマドは全体的に遺存状態は不良で煙道部も不明であった。火床は赤変し繰返し火を受けたことを物語っている。袖部は芯に河原石の偏平なものを二つに削り床面に掘り込んで立てられ袖を補強している。火床中央やや奥には支脚を立てるのに掘られた穴が確認されたが支脚はぬき去られ見ることはできなかつた。火床の奥には天井石に使用されたと思われる大きな偏平な石が落ちた状態になつてゐる。全体的にカマドの遺存状況は良くないため袖部の構築状況など細部にわたる観察はできにくい状態であった。床面は黒土の床のため柱穴の発見を繰返し試みたが確認することができなかつた。床面はほぼ平らでありカマド寄りはかなり堅くたたいてあるが南側半分は柔かな部分が多い。

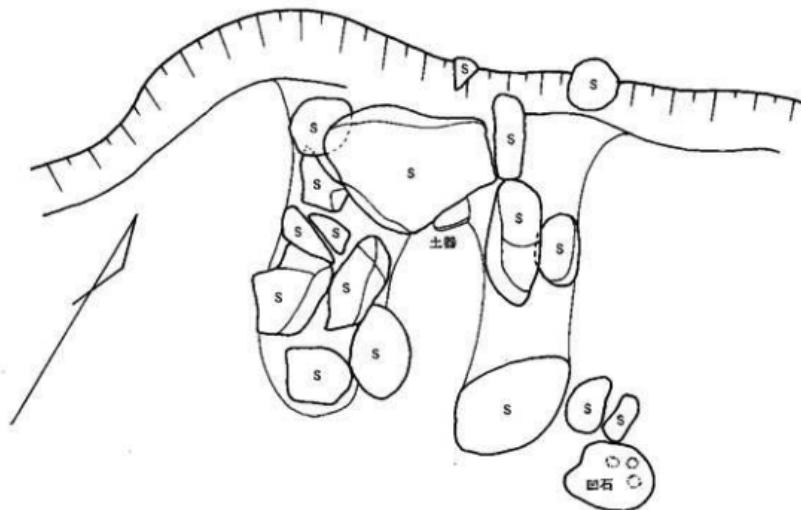
(柴 登巳夫)



第7図 第1号住居址実測図



第8図 第1号住居址地層断面図



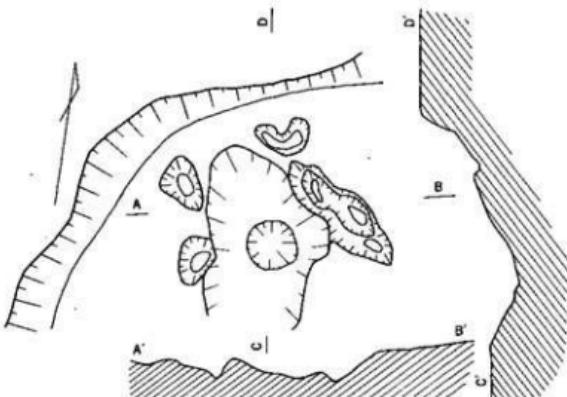
第9図 第1号住居址カマド実測図

第1号住居址層序説明

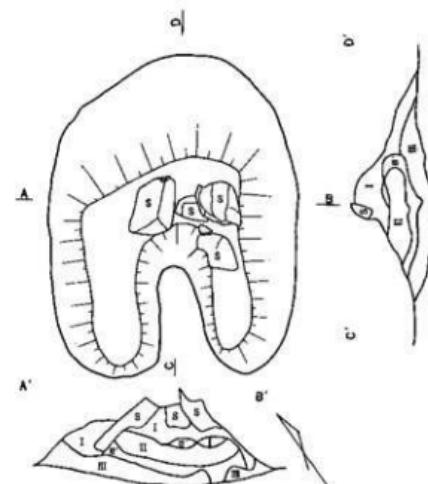
- 第I層 黄褐色土層 かたくてブロック状である。
 第II層 黒色 土層 さらさらした小粒土。
 第III層 黑褐色土層 黄色土粒を多少含み、ややかたい。
 第IV層 黑褐色土層 焼上、炭粉を含み、やわらかい。

口) 第2号住居址カマド 址 (第11図)

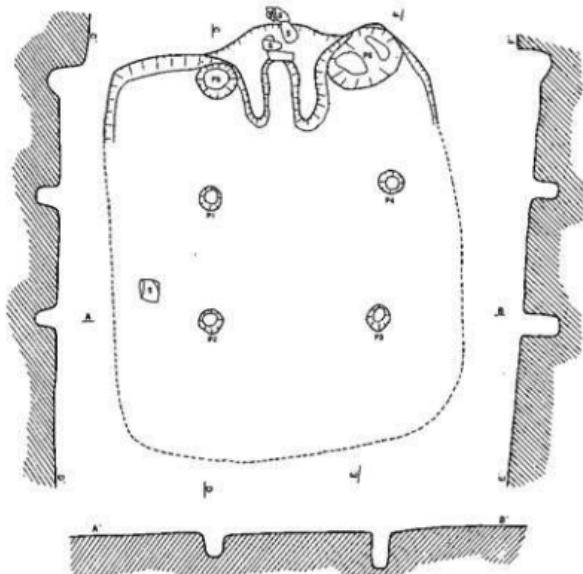
第1号住居址のカマドが発見されるのに続いて確認されたカマドである。このカマドは結果的に第4号住居址の上に位置する形となった。カマド確認に伴ないこれにつくプランを調査したが、床面、壁等全く不明であり、屋外のカマドだけの遺構としか考えられない状態のものであった。カマドは奥壁の部分に石が3つほどあつただけで袖の部分には石もなく簡単な構造であった。遺物はカマド奥壁の石の部分から土師器腰の一部が出土している。又、同じ所から綠釉の小破片2個が出土したが、このカマド址に直接伴なうものかは不明である。



第10図 第1号住居址カマド基部実測図



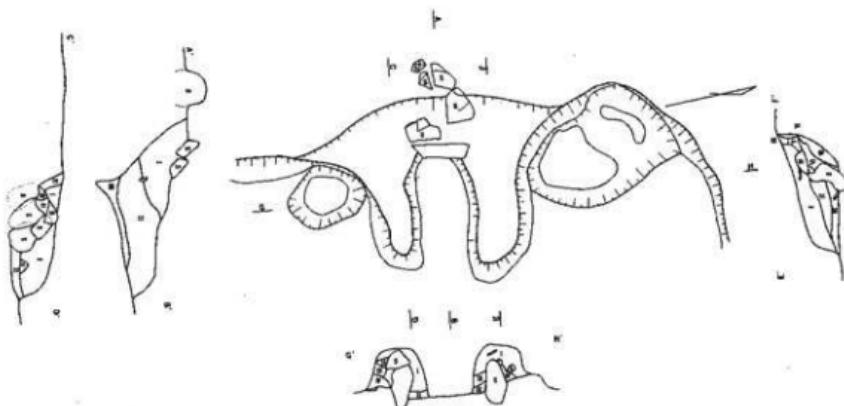
第11図 第2号住居址カマド実測図



第12図 第3号住居址実測図

ハ) 第3号住居址(第12図)

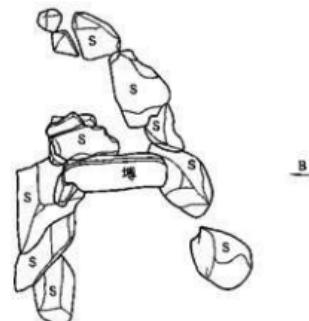
本住居址は第1号住居址と80%くらい重り合って位置している。遺構はカマド煙り出しの部分の発見が発端となった。第1号住居址と同じくカマドの位置する壁はローム層を掘り込んで構築されているため確認が容易であったが残りの部分は正確なプランを確認することはできなかった。しかし第1号住居址と同じく火を受けた痕跡が顕著であったため、焼上及び炭化物の分布範囲によりそのプランを想像設定した。それによる住居址プランは東西5.5m、南北4.4mの隅丸長方形で、西壁のほぼ中央にカマドを設けている。カマドの左右には不整円形の土括、P-5、P-6が確認され、共にピットの中には数点の遺物が入っていた。床面はカマド寄りの約半分は堅い叩きになっているが東側はやや不安定であった。やはりカマドの前が生活のために一番利用率が高いことを物語っているのであろうか。主柱穴と思われるピットが4ヶ所確認された。床面上の掘り込み部分においては、4つ共に30cm前後の直徑であり、深さはP₁が30cmと一番浅く、P₃が50cmと深くなっている。柱穴の間隔はP₁とP₂、P₃とP₄間が1.6m、P₂とP₃、P₁とP₄間が2.2mになっており、住居址の全体的配置から見て、四本共に少し中央に寄っているように思える。床面は前述のごとくカマド前面は非常に堅くなっているが、東に寄るに従い軟弱な部分が多い。全体的には平坦であるが、P₁の左側には直徑10cm余長さ90cmほどの丸太状の木が炭化して出土している。この炭化した丸太は位置からみてP₁の主柱が南側に倒れたのではないかと考えられる。又、他の炭化材を見ても本住居址は火を受け倒壊する時南側へくずれたものと思える。



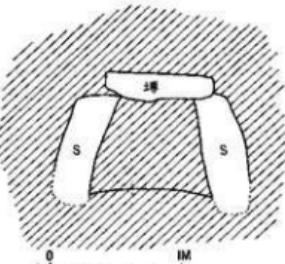
第13図 第3号住居址カマド実測図

壁は西壁と南北壁の一部しか確認することができなかった。落込み確認面からの壁高は32cmを測り、比較的緩やかに立上がりっている。カマドは西壁ほぼ中央に位置し、その軸線は堅穴の軸線と同じである。カマドは支脚こそぬき去っており確認できなかったが、全体的には良好な遺存状態であった。住居址外の煙出しの石組も残っており、一部煙道と考えられる施設も確認できた。本住居址のカマドにおいて最も特徴的なことは天井石の代りをしているレンガ状の焼き物「埠」の出土していることである。これは両袖中心石の上に平らに置かれ、市の広い平らな面を前にして30度くらい傾いて置かれている。両袖の中には偏平な河原石を3個づつ使用している。そのうちの真中の石は床面を掘り下げて「ハ」の字状に構築して（第14図参照）非常に堅固なものである。奥壁は緩やかな傾斜で立上り、その前に支脚の立てられた穴が確認された。（第15図）遺物はカマド内、火床部や焚口の両側から大形破片がまとまって出土している。又、床面上には灰袖の环が完形のまま出土しており全体的には遺物の多い住居址である。

（柴 登巳夫）



A B 断面



第14図 第3号住居址カマド断面図

2号住居址カマド層序説明

A-Bセクション

第Ⅰ層〔茶褐色土層〕やや明るい。やわらかく、ややきめが細かい。

第Ⅱ層〔焼土〕明るく赤味をおびている。やわらかい粘土のようである。

第Ⅲ層〔茶褐色土層〕焼土を多く含む。

第Ⅳ層〔茶褐色土層〕第Ⅰ層よりややかたい。

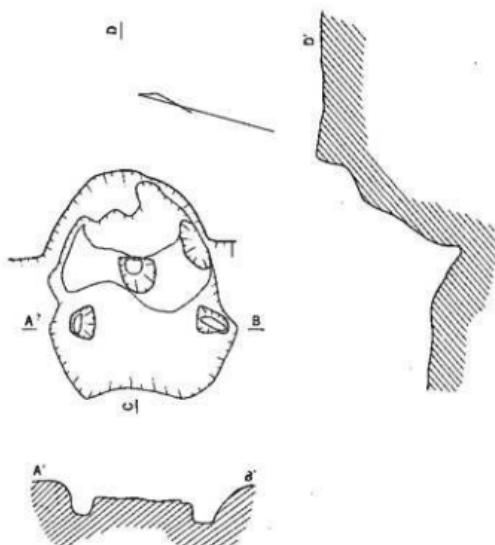
C-Dセクション

第Ⅰ層〔茶褐色土層〕やや明るい。やわらかく、ややきめが細かい。

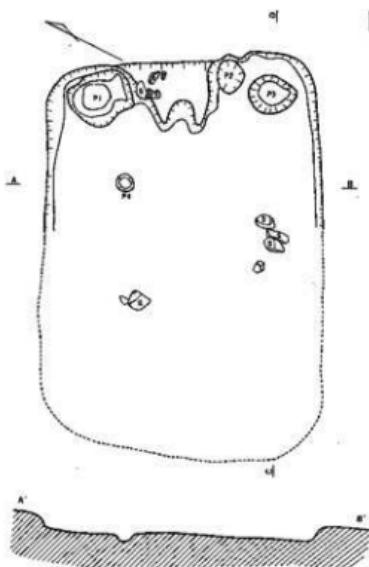
第Ⅱ層〔焼土〕明るく赤味をおびている。やわらかい粘土のようである。

第Ⅲ層〔茶褐色土層〕焼土を多く含む。

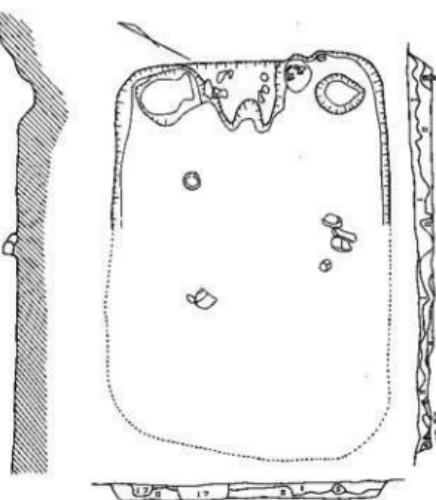
第Ⅳ層〔茶褐色土層〕第Ⅰ層よりややかたい。



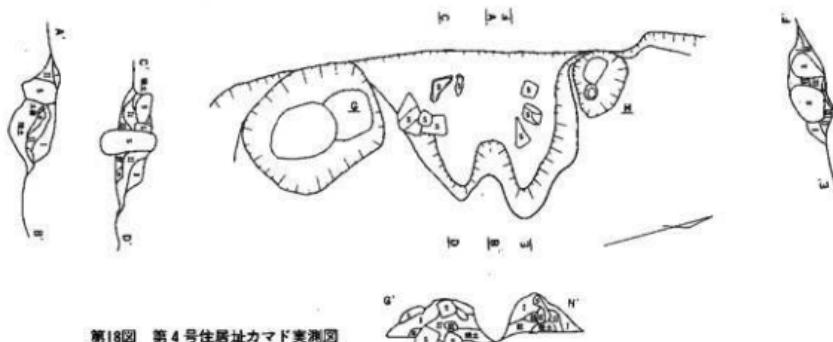
第15図 第3号住居址カマド基部実測図



第16図 第4号住居址実測図



第17図 第4号住居址地層断面図



第18図 第4号住居址カマド実測図

二) 第4号住居址(第16図)

本住居址はG-25、26グリットを中心位置している。造構は基本層序II~III層付近において落込みが確認された。本住居址も第1、3号住居址と同じくカマドの構築されている西壁と南北壁の一部分が確認されたが、他の部分は黒褐色土層中に掘り込まれているため判然としない。遺物は住居址の覆土を振り下げる過程ではあまり出土せず、大半はカマドの周辺に集中した。又、北壁中より刀子が出土している。住居址のプランは南北3.6m、東西推定5.7mの隅丸長方形で、カマドの左右に不整円形のピット、P₁、P₂、P₃が見つかった。P₂からは土師器の大破片が多量に発見された。

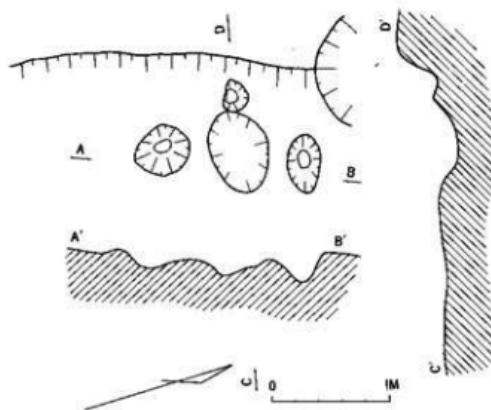
床面はカマドの前約1mの範囲は堅いたたきになっていたが東壁に近くなるにつれ軟弱な状態であった。主柱穴と思われるピットは確認できなかったが、P₄は浅いが位置から考えて主柱穴の一つとしてもよいのではないか。壁はやや急な斜壁であり、壁高は落込み確認面より平均20cm前後である。

カマドは西壁中央に位置しており、煙道部ははっきりせず、カマドは全体的に遺存状況は良くなかった。しかし両袖部の構築には芯に河原石を用いて補強しておりまわりをロームでかためている。火床中央やや奥には支脚を立てたものと思われるピットも確認されている。

(柴 登巳夫)

3号住居址カマド層序説明

| | | |
|----------|---------------|-------------------------------|
| A-Bセクション | 第I層 [茶褐色土層] | 實味がある。 |
| | 第II層 [茶褐色土層] | 黒色がまじる。炭化物を含む。 |
| | 第III層 [焼土層] | ロームブロックと炭化物を含む。 |
| C-Dセクション | 第I層 [茶褐色土層] | 炭化物を少し含む。 |
| | 第II層 [茶褐色土層] | やや黒味をおびる。 |
| E-Dセクション | 第II層 [茶褐色土層] | 軽土を含む。 |
| | 第III層 [茶褐色土層] | やや黄味をおびる。ロームブロックを含む。バサバサしている。 |
| | 第IV層 [褐色土層] | 黒味が強い。さらさらしている。 |
| G-Hセクション | 第I層 [茶褐色土層] | 炭化物を含む。ややかたい。 |
| | 第II層 | 第1層よりやや黒味をおびている。炭化物と軽土を含む。 |
| | 第III層 [茶褐色土層] | 第2層よりやや明るい。炭化物と軽土を含む。 |
| | 第IV層 [褐色土層] | やや明るい。第1層よりやわらかい。 |
| | 第V層 [茶褐色土層] | 炭化物を多く含む。やわらかい。 |
| | 第VI層 [茶褐色土層] | ロームを含む。 |
| | 第VII層 [褐色土層] | 軽土ブロックを少量含む。 |
| | 第VIII層 [褐色土層] | やわらかい。軽土とロームブロックを含む。 |
| | 第I層 [茶褐色土層] | 炭化物を含む。ややかたい。 |
| | 第II層 | 第1層よりやや黒味をおびている。炭化物と軽土を少し含む。 |
| | 第III層 [茶褐色土層] | 第2層よりやや明るい。炭化物と軽土を含む。 |
| | 第IV層 [茶褐色土層] | ロームブロックと炭化物を少し含む。 |
| | 第V層 [茶褐色土層] | 黒味をおびる。 |
| | 第VI層 [褐色土層] | |



第19図 第4号住居址カマド基部実測図

4号住居址層序説明

- 第1層〔薄茶褐色土層〕 耕作による擾乱層。もろく、きめがあらい。
- 第II層〔茶褐色土層〕 第1層よりややかたい。
- 第III層〔黄褐色土層〕 ロームを含む。
- 第IV層〔黄褐色土層〕 第3層よりロームが少なく、かわりに焼土ブロックを含む。
- 第V層〔黒褐色土層〕 かなりやわらかい。
- 第VI層〔黒褐色土層〕 かなりかたい。
- 第I層〔薄茶褐色土層〕 耕作による擾乱層。もろく、きめがあらい。
- 第I'層〔薄茶褐色土層〕 第1層よりさらにあらい耕作による擾乱層。大変もろい。
- 第II層〔淡茶褐色土層〕 第1層よりややかたい。
- 第III層〔黄褐色土層〕 ロームを含む。

第4号住居址カマド層序説明

中央東西A-Bセクション

- 第I層〔黒褐色土層〕 やわらかい。
- 第II層〔茶褐色土層〕 やわらかい。わずかにロームと焼土入る。
- 第III層〔茶褐色土層〕 第2層よりややかたく焼土が多くまじる。
- 第IV層〔茶褐色土層〕 ロームが多く焼土をわずかに含む。第3層よりややかたい。

東西C-Dセクション

- 第I層〔茶褐色土層〕 ややかたい。焼土を少し含む。
- 第II層〔黒褐色土層〕 焼土とロームブロックを含み、第1層よりやや、やわらかい。
- 第III層〔茶褐色土層〕 第2層よりややかたく焼土が多くまじる。
- 第IV層〔茶褐色土層〕 ロームが多く焼土をわずかに含む。第3層よりややかたい。

南北G-Hセクション

- 第I層〔黄褐色土層〕 焼土とロームブロックを少し含む。やや、やわらかい。
- 第II層〔茶褐色土層〕 ロームと焼土を含む。
- 第III層〔茶褐色土層〕 ロームが多く焼土が少ない。やや、やわらかい。

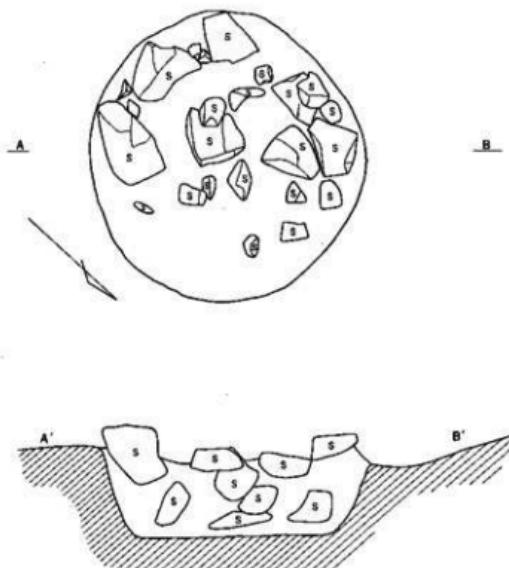
東西E-Fセクション

- 第I層〔茶褐色土層〕 ロームが少しまじる。
- 第II層〔黒褐色土層〕 ロームが少しまじる。
- 第III層〔黄褐色土層〕 ローム、焼土がまじる。
- 第IV層〔褐色土層〕 ローム、焼土が多い。

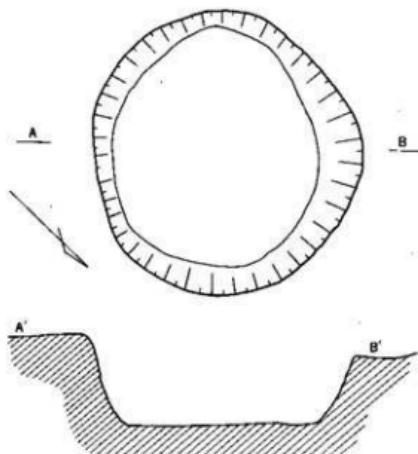
2. その他の遺構

イ) 第1号集石(第20図)

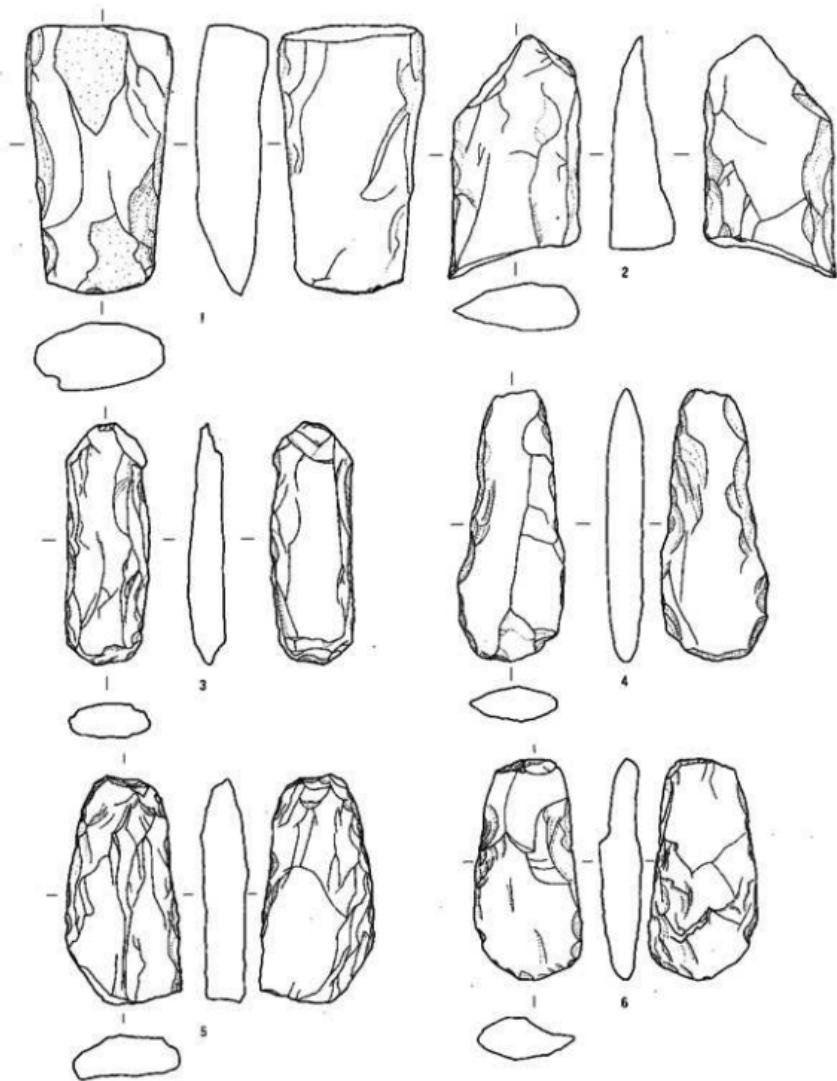
本集石遺構は第4号住居址の南側2mのところI-25グリット付近に位置している。この集石は第2号住居址のプランを確認する作業中に見つかったもので枕大の偏平な河原石が半月形にはば同一レベルより出土した。調査を進める段階において径1.3mほどの円形内に集中していることが判明する。第1面での同一レベルでは30個余の石が出土した。枕大の偏平な石は平面を上に出して並べられており明らかに人為的なものである。集石は直径1.3m深さ50cmの円形土括内に入っている。石は頭大から枕大の一一群と、拳大かやや大き目の一一群とに類別され、ほとんどが河原石の円礫であるが一部削石も含まれている。第一層の石には配列に規則性を見ることができたが、土括内の石は覆土と共に無作意に入れられた状況である。ただ石が立っているような感じで入れられているものが多い。(第21図)に示すように土括は下面がほぼ平らでかなり堅くしてあり、土括を掘って床や壁面を整えた後に土と共に石を入れたと考えたい。この土括内からは遺物が全く出土しておらないため集石の時期及び、遺構の性格を決定することは困難であったがいずれにせよこれは祭壇遺構があるいは埋葬場所の想像したい。(柴 登巳夫)



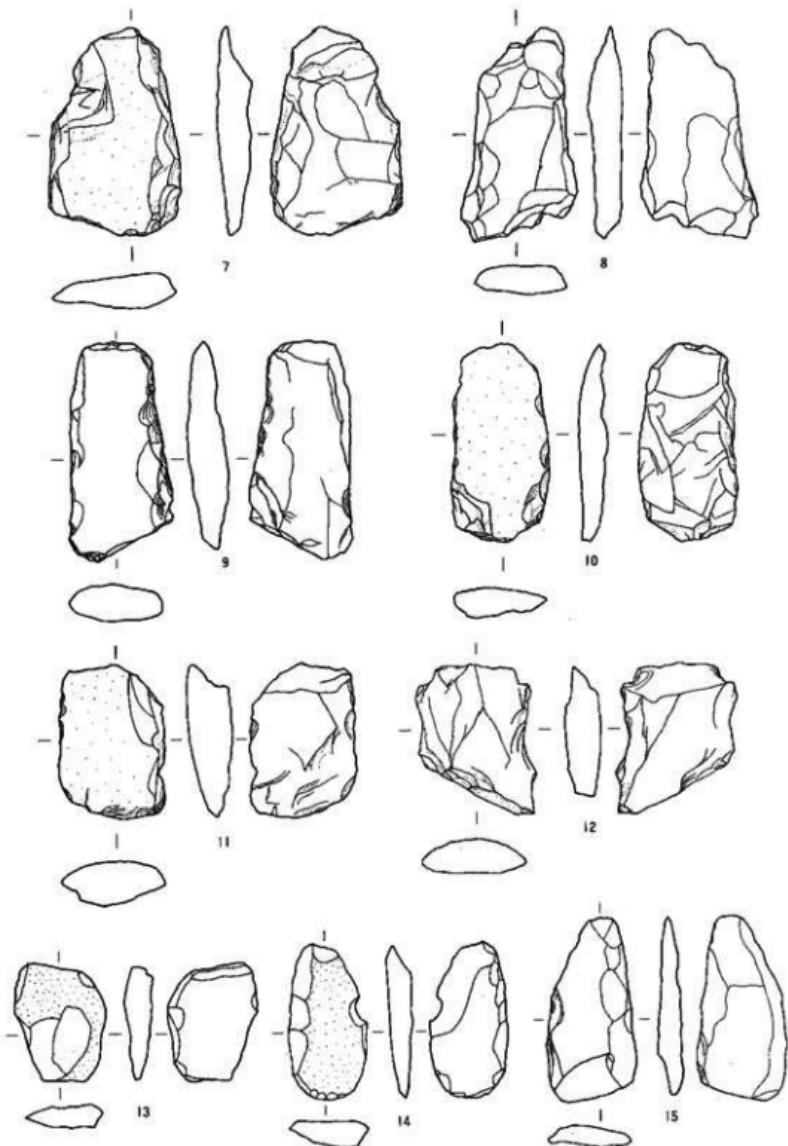
第20図 第1号集石実測図



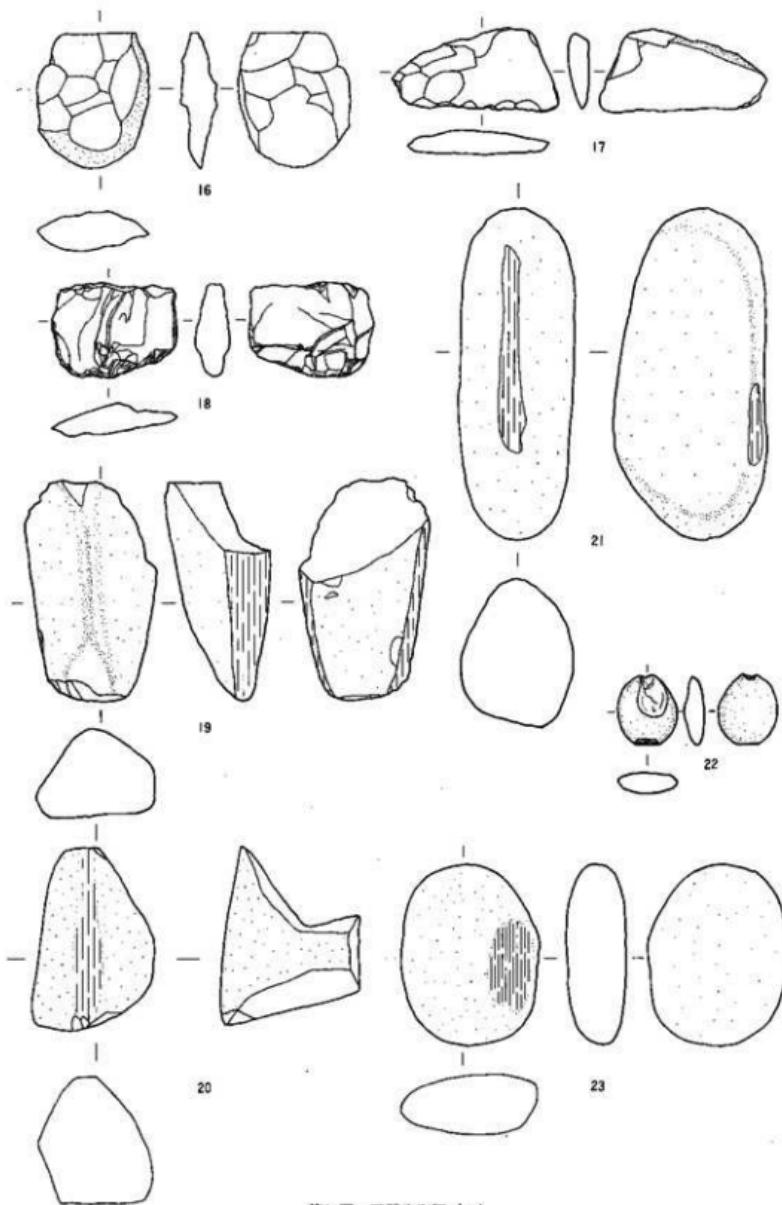
第21図 第1号集石実測図



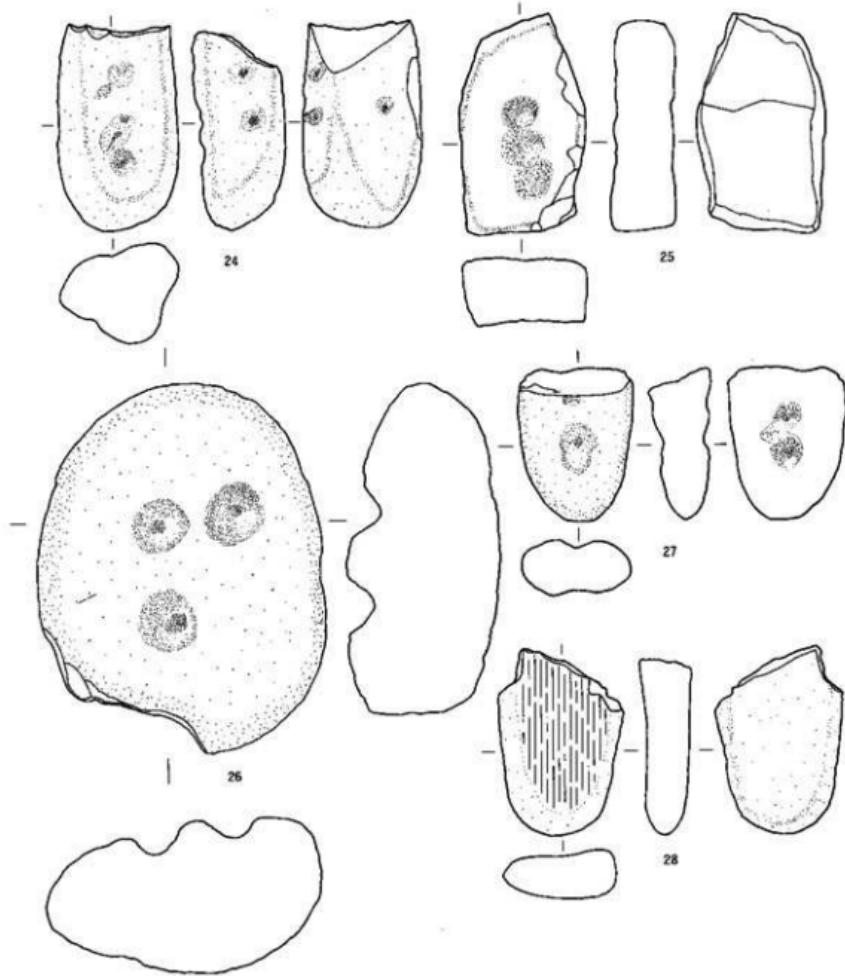
第22図 石器実測図 (1)



第23図 石器実測図（2）



第24図 石器実測図 (3)



第25図 石器実測図(4)

第3節 遺 務

1) 石 器

打製石斧

総数18点を数え、形状・大きさなどから3類に細別した。ほとんどが硬砂岩であり、そのうち6割強が欠損あるいは半分に折れている。

第1類—a (第22図—1・2)

厚手大型のもの2点をこの類とした。硬砂岩であり、石の重みを利用して使ったものであろう。(第22図—1)は母岩の周囲を使った石斧であり、両縁辺に柄を付けた時と思われる摩耗痕が観察できる。(2)は中間で折れ、上部が残ったが、これは母岩の芯を利用して作製している。2点共に調整は比較的よく整った形状をしている。

第1類—b (第22図—3~6・第23図—7~12)

打製石斧で最も多い中型のもの10点をこの類とした。形は短削型と擦型のものが半々の割合で、調整は全面に施されているものが多い。半数が礫面を残しており、母石の周辺を使って製作している。主要作業部位は下部先端であり、使用による摩耗痕が見られる。

第1類—c (第23図—13~15・第24図—16~18)

b類より小さなものをこの類とした。硬砂岩のものがほとんどであるが、(23図—15)のみ粘板岩質である。小型フレイクに刃をつけているものもあり、形態は一定していない。(第25図—17)は、刃部を側縁に施した横刃型石器の部類に入るものであり、打製石包丁的機能をもつ。

第2類 (第25図—19~21)

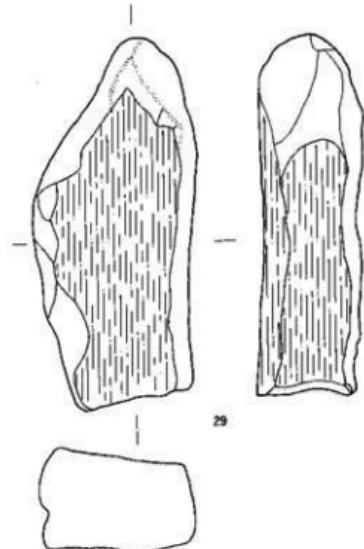
表面なめらかな自然石の主として陵の部分に擦った痕や、わずかに敲いた痕を残すもの(特殊磨石)という呼ばれ方をしている一群である。3点認められたが、石器にある擦痕は明らかに使用痕であり、(第24図—19)などは擦り減った量を見てもかなり長い間使用したものと思える。素材の形態は一定しないが、19・20の2点はやや断面三角形になっている。この2点は硬砂岩質である。

第3類 石 錐 (第24図—22)

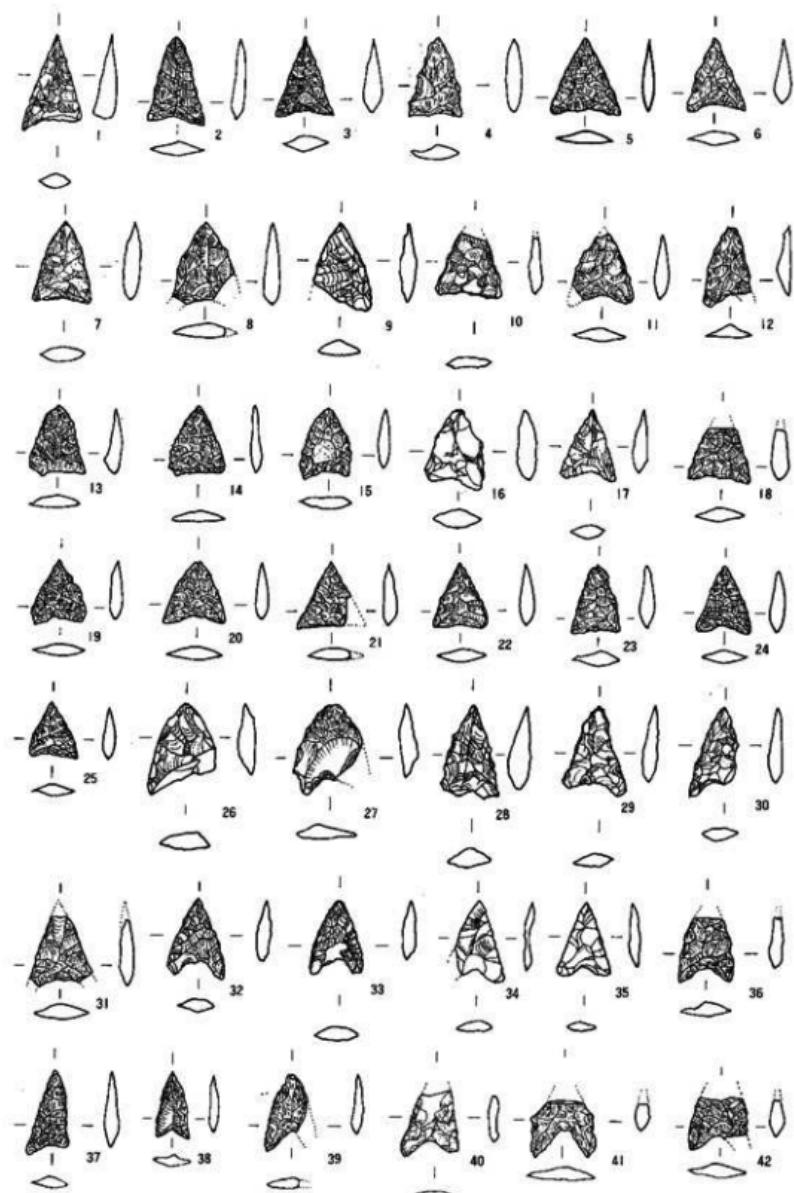
1点のみの出土で、橢円形偏平な小型の自然石を用い、両端を打ち欠いて製作している。石質は粘板岩である。

第4類 (第24図—23)

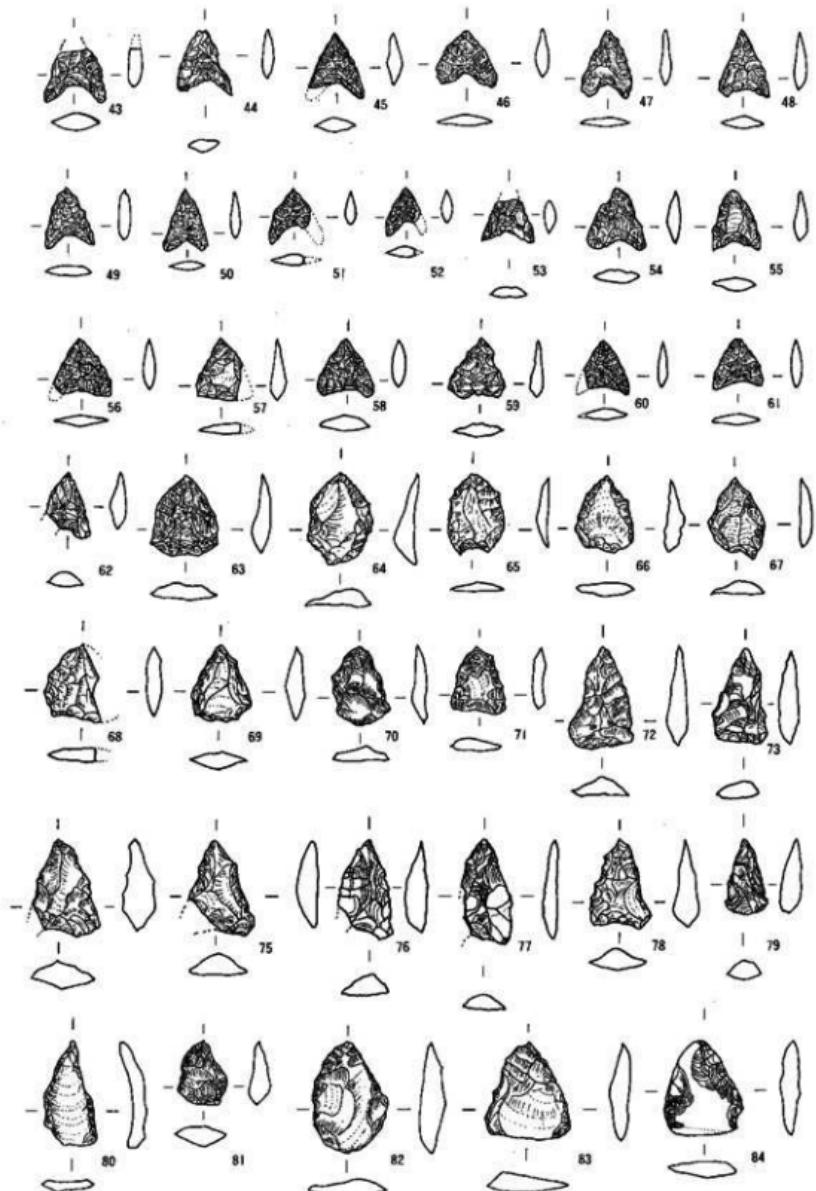
偏平橢円形な硬砂岩の河原石を使っている。平らな面の約半分が擦ってあり、減っているのが観察できる。一般に「磨石」といわれているものである。



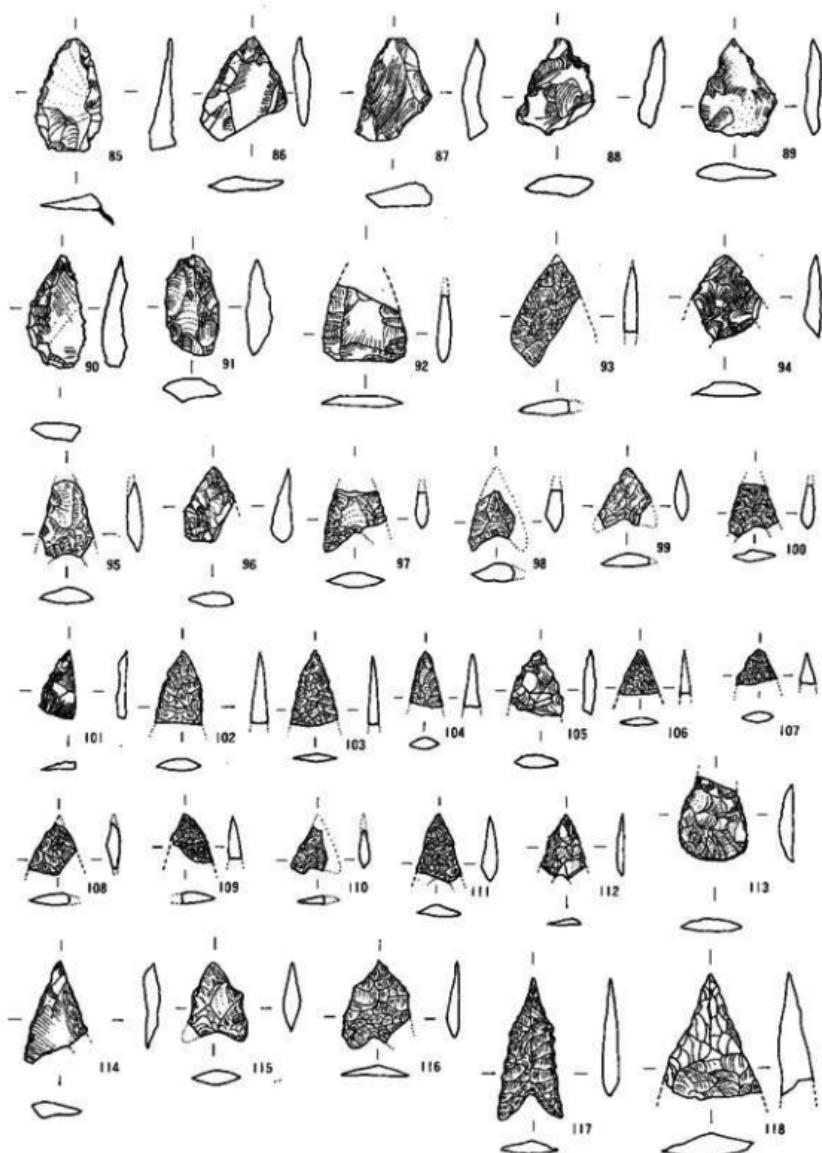
第26図 石器実測図 (5)



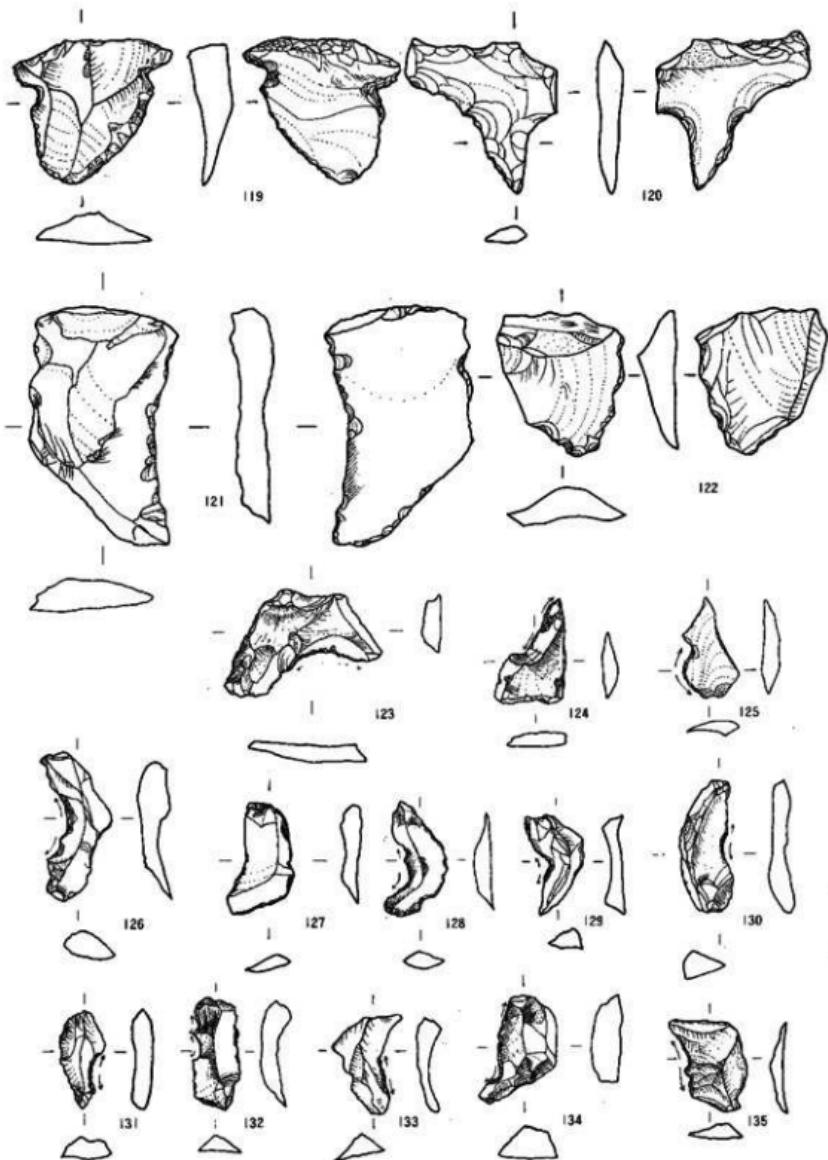
第27図 石器実測図 (6)



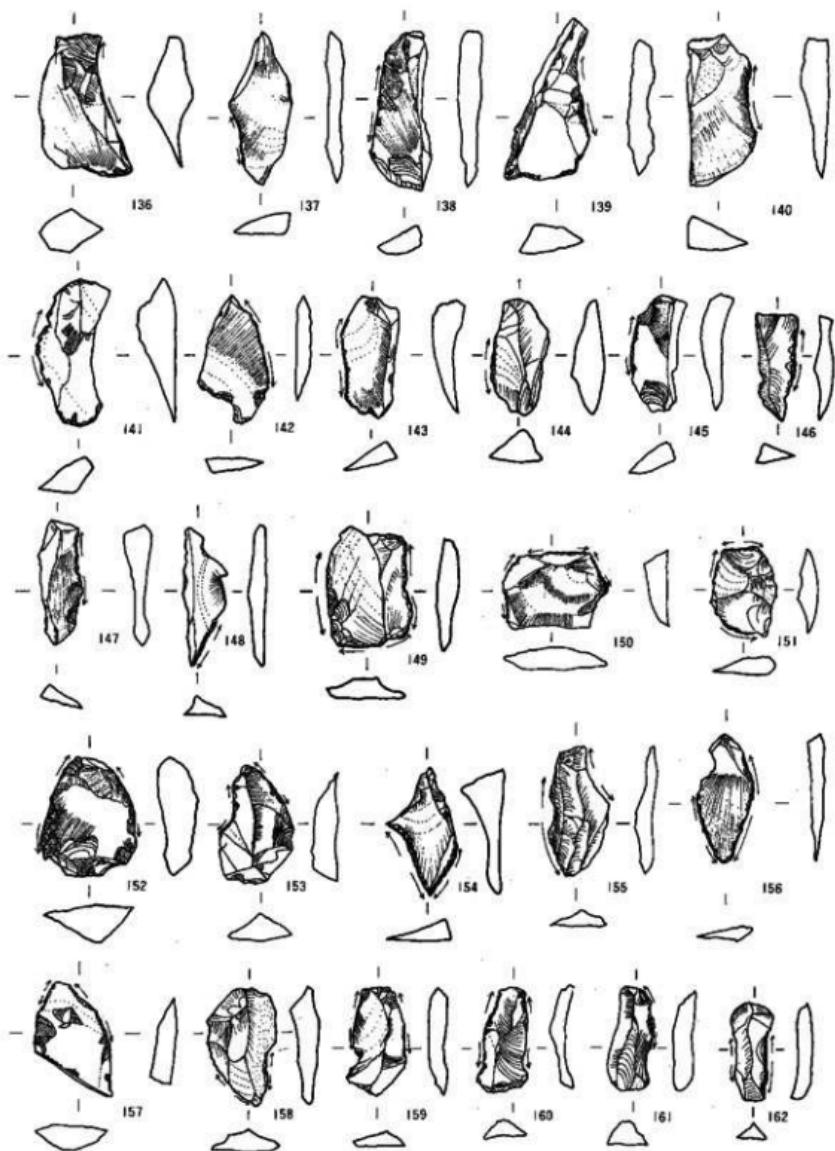
第28図 石器実測図 (7)



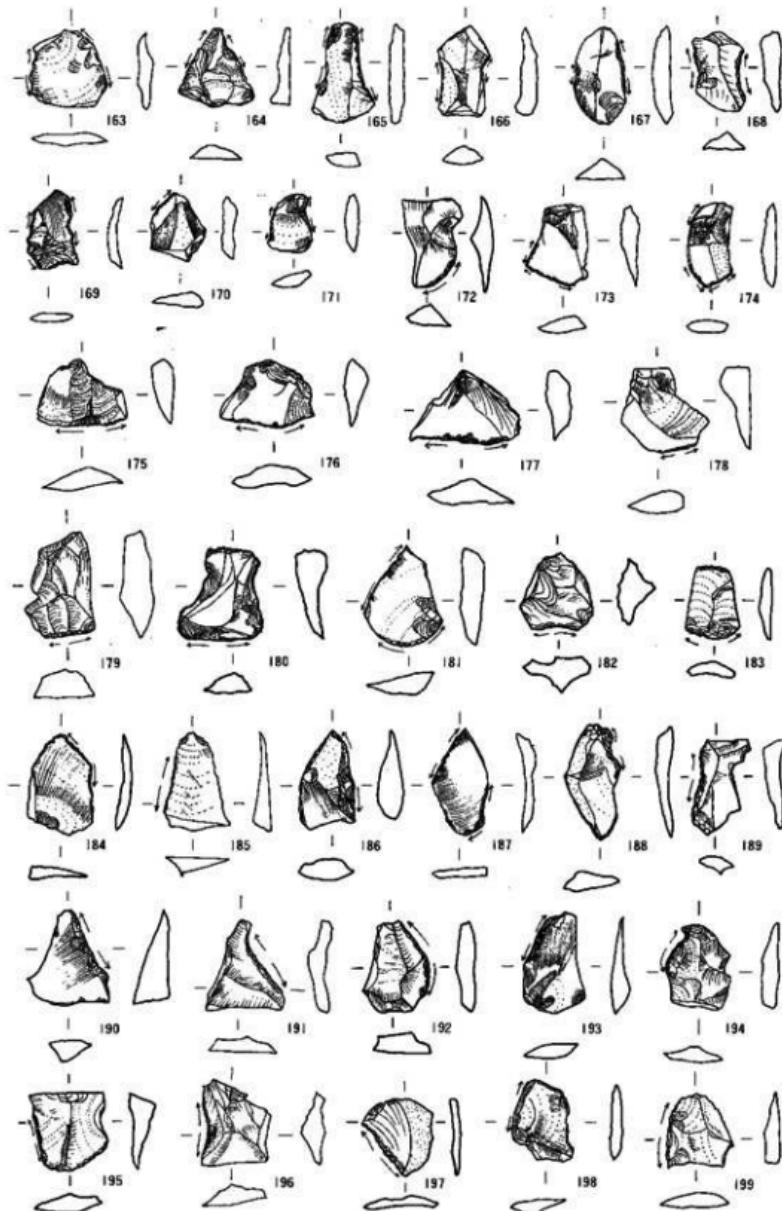
第29圖 石器實測圖 (8)



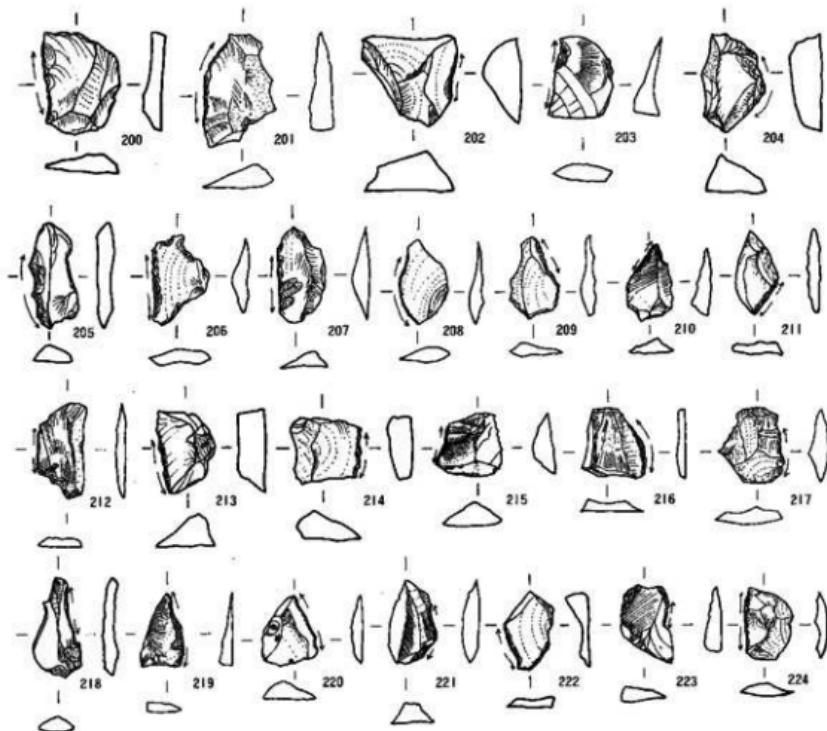
第30図 石器実測図 (9)



第31図 石器実測図 (10)



第32図 石器実測図 (1)



第33図 石器実測図 (12)

第5類 (第25図-24~27)

4点検出されたが2点が住居址内で発見された。砂岩であるが4点共に3つ以上の凹を有している。特に(第25図-26)は第1号住居址のカマド前面の床面にきちんと置いた状態で出土している。

第6類 (第25図-28)

扁平な長楕円形をした砂岩の自然石を利用している。上面の中央部が少し凹んで擦った痕があり小型石皿の要素を有したものと思われる。

第7類 砥 石 (第26図-29)

硬砂岩の河原石の二面を使った砥石である。かなり長く利用したことかがわれるが、中間から折れ半分が検出された。

第8類-a (第27図-1~25)

多数の石鏃の出土があったが、無柄式で三角形の底辺にあたる部分が直線か又はえぐり込みの少ないものをこの一群とした。個数では25を数えたが、ほとんど黒曜石製である。大きさもほぼ一定しており1.8cmから2.2cmの間が半数以上で、最大巾も1.2cmから1.4cmのものが多い。この部類のも

のは他のものに比べ完形で発見される例が多く65%と高い率を示した。調整も丹念で両縁辺はほぼ直線に仕上げられ、鋭い刃部を形成している。

第8類—b (第27図—26~42・第28図—43~53)

脚部が長く、抉りが深いのが特徴で、a類に比べ剥離がやや荒くなっている。脚部が長く抉り込みが深い割合に全長が短いのが目につく。又、50%近くが欠損資料であり、脚部より先端部の欠損が多い。

第8類—c (第28図—54~62)

a類とb類の中間的な形をしているものをこの類とした。全体の形は正三角形に近く、長さは比較的短いのが特徴である。欠損したものが少なく、剥離も丁寧に仕上げている。

第8類—d (第28図—63~71)

主として周囲を調整しただけの石鎌で、作製の途中的な感じさえする類である。それ故剥離は荒く、石鎌の形状も一定していないが、比較的先端が鋭くなっているものが多い。

第8類—e (第28図—72~81)

d類に共通する部分があり、作製途中の感じのするものもある。d類よりも長細く片面加工のものが3点含まれている。長さ・巾に比べ厚さがあり、剥離も荒い。形状は二等辺三角形のものが多い。

第8類—f (第28図—82~84・第29図—85~91)

製作途中の未完成品という見方が適当であろう。d類と共に通するが、それよりも一回り大きく、周囲だけを調整したものが多い。10点全部良質の黒曜石であり、剥離は荒い。二等辺三角形のものと、両縁辺が曲線のもの二種類に分けられる。

第8類—g (第29図—92~114)

先端部や脚部の破損が著しく、形態分類が難しいものを集めた。a~g類の特徴を一部づつ持っている。破損部を見ると先端部が欠損する場合が多いことがわかる。

第8類—h (第29図—115~116)

石鎌の両縁辺に突起が一つづつあり、形態上五角形に近い。それで「五角形鎌」と呼ばれる類に入る。2点共にチャートで、1つは片面加工である。

第8類—i (第29図—117)

長さ3.2cmと石鎌中最も長身であり、形態的に一つだけ異なっている。先端部だけ急に鋭くなり、両縁辺はノコギリ状に小突起を連続させている。脚部は抉りが深く「鍔型鎌」的な要素を見せている。全体的に扁平な感が強く、特殊な鎌である。

第9類 (第29図—118)

10cm余のポイントの先端部と推測したい。剥離はかなり細部にまでわたり、先端部はきわめて鋭くなっている。巾に比べ厚さがあり、かなり大型のものに思える。

第10類 (第30図—119)

この種の石器は1点だけ発見された。石匙あるいは石匕という名で一般的に呼ばれている。形態的には縦形に属するもので、刃部がつまみの軸に対して平行する形態をしている。石器上部両側に

ノッチを入れ、着柄の際ににおける紐がかりとしたものであろうか、調整は片面に集中し、刃部は鋭く整えられている。扇形のチャートの剝片を用いたものである。

第11類（第30図-120）

サヌカイト製の石錐で1点だけ発見されたもので、この石錐は直接握って使用したものと考える。形態的にめずらしい部類に入る。使用による磨滅はあまり見られず、使用度は少なくない。

第12類（第30図-121・122）

図121は全長6cmの頁岩の搔器である。石器の上部と下部に自然面を残し、大きく3~4回の打撃によって石器を形造り、両サイドに刃部を形成している。この調査中に数は少ないが押型文土器が出土したが、この時期に次ぐ古い石器ではないかと考える。サイドスクレイバーの部類に入るものである。図122はチャートでできた搔器でエンドの部分に刃部を作り出して石器を作成している。調

第1表 石器要目一覧表

| 番号 | 種別番号 | 分類 | 器種 | 法量 | | | 材質 | 現存状態 | 出土位置 | 備考 |
|----|------|------|------|--------|-------|--------|-----|------|----------|----|
| | | | | 最大長さ | 最大巾 | 重量 | | | | |
| 1 | 22 | 1類-a | 折板石斧 | 13.5cm | 7.4cm | 490g | 砂岩 | ○ | G-27グリット | |
| 2 | " | " | " | 10.7 | 6.5 | 260 | " | ○ | H-24 " | |
| 3 | " | 1類-b | " | 12.2 | 4.1 | 150 | " | ○ | C-24 " | |
| 4 | " | " | " | 13.8 | 5.4 | 150 | " | ○ | I-44 " | |
| 5 | " | " | " | 11.2 | 5.8 | 200 | " | ○ | H-26 " | |
| 6 | " | " | " | 11.2 | 5.4 | 150 | " | ○ | F-25 " | |
| 7 | 23 | " | " | 10.9 | 6.9 | 150 | " | ○ | I-20 " | |
| 8 | " | " | " | 11.1 | 6.1 | 110 | " | ○ | 1号住居址 | |
| 9 | " | " | " | 10.8 | 5.3 | 130 | 粘板岩 | ○ | C-23グリット | |
| 10 | " | " | " | 10.4 | 5.2 | 100 | 砂岩 | ○ | J-18 " | |
| 11 | " | " | " | 8.0 | 5.5 | 120 | " | ○ | H-23 " | |
| 12 | " | " | " | 7.8 | 6.1 | 100 | " | ○ | 1号住居址 | |
| 13 | " | 1類-c | " | 6.0 | 4.6 | 40 | " | ○ | E-28グリット | |
| 14 | " | " | " | 8.1 | 4.1 | 60 | " | ○ | G-25 " | |
| 15 | " | " | " | 9.6 | 4.6 | 60 | " | ○ | F-26 " | |
| 16 | 24 | " | " | 7.3 | 5.9 | 100 | " | ○ | F-28 " | |
| 17 | " | " | " | 4.4 | 8.7 | 50 | " | ○ | H-21 " | |
| 18 | " | " | " | 4.9 | 6.6 | 70 | 粘板岩 | ○ | H-19 " | |
| 19 | " | 2類 | 特殊燧石 | 11.9 | 6.6 | 440 | 砂岩 | ○ | 2号住居址 | |
| 20 | " | " | " | 9.7 | 6.0 | 420 | " | ○ | E-19グリット | |
| 21 | " | " | " | 17.7 | 6.1 | 1.45kg | " | ○ | H-27 " | |
| 22 | " | 3類 | 石鍤 | 3.7 | 3.1 | 20 | 粘板岩 | ○ | F-22 " | |
| 23 | " | 4類 | 磨石 | 9.6 | 7.5 | 340 | 砂岩 | ○ | E-20 " | |
| 24 | 25 | 5類 | 凹石 | 10.4 | 6.1 | 390 | " | ○ | 1号住居址 | |
| 25 | " | " | " | 11.0 | 6.4 | 380 | 花崗岩 | ○ | G-26グリット | |
| 26 | " | " | " | 18.8 | 14.5 | 2.01kg | 砂岩 | ○ | 1号住居址 | |
| 27 | " | " | " | 7.7 | 6.0 | 180 | " | ○ | 2号住居址 | |
| 28 | " | 6類 | 石墨 | 9.5 | 6.2 | 200 | " | ○ | D-21グリット | |
| 29 | 26 | 7類 | 砥石 | 10.1 | 8.6 | 1.47kg | " | ○ | 1号住居床下 | |

| 番号 | 種別番号 | 分類 | 器種 | 法量 | | | 材質 | 現存状態 | 出土位置 | 備考 |
|----|------|------|----|-------|-------|-------|------|------|----------|----|
| | | | | 最大長さ | 最大巾 | 重量 | | | | |
| 1 | 27 | 8類-a | 石鐵 | 2.3cm | 0.8cm | 1.05g | 黒曜石 | ○ | 1号住居址 | |
| 2 | " | " | " | 2.1 | 1.2 | 0.95 | " | ○ | 表様 | |
| 3 | " | " | " | 2.0 | 1.3 | 0.95 | チャート | ○ | D-21グリット | |

| 番号 | 博物 館番号 | 分類 | 器種 | 法 量 | | | 材質 | 現存状態 完形 欠損 | 出土位 置 | 備考 |
|----|-----------|------|-----|--------|------|------|------|------------------|----------|----|
| | | | | 最大長さ | 最大巾 | 重量 | | | | |
| 4 | 27 | 8類-a | 石 磨 | 2.0 | 1.2 | 1.15 | 黒曜石 | ○ | 1号住居址 | |
| 5 | " | " | " | 1.9 | 1.6 | 1.05 | # | ○ | G-27グリット | |
| 6 | " | " | " | 1.8 | 1.3 | 0.80 | # | ○ | C-29 # | |
| 7 | " | " | " | 2.0 | 1.1 | 1.15 | # | ○ | F-39 # | |
| 8 | " | " | " | 2.1 | 1.3 | 1.60 | # | | F-24 # | |
| 9 | " | " | " | 2.1 | 1.2 | 1.05 | # | ○ | B-28 # | |
| 10 | " | " | " | 1.5 | 1.2 | 0.85 | # | ○ | F-21 # | |
| 11 | " | " | " | 1.6 | 1.5 | 0.95 | # | ○ | 表 摺 | |
| 12 | " | " | " | 1.8 | 1.2 | 0.75 | # | ○ | E-21グリット | |
| 13 | " | " | " | 1.8 | 1.3 | 0.95 | # | ○ | J-23 # | |
| 14 | " | " | " | 1.8 | 1.40 | 0.70 | # | ○ | 1号住居址 | |
| 15 | " | " | " | 1.7 | 1.3 | 0.85 | # | ○ | # | |
| 16 | " | " | " | 1.9 | 1.3 | 1.35 | # | ○ | # | |
| 17 | " | " | " | 1.6 | 1.0 | 0.70 | # | ○ | 4号住居址 | |
| 18 | " | " | " | 1.3 | 1.5 | 0.85 | # | ○ | F-22グリット | |
| 19 | " | " | " | 1.6 | 1.4 | 0.60 | # | ○ | 1号住居址 | |
| 20 | " | " | " | 1.4 | 1.5 | 0.25 | # | ○ | # | |
| 21 | " | " | " | 1.7 | 1.1 | 0.75 | # | ○ | J-19グリット | |
| 22 | " | " | " | 1.6 | 1.3 | 0.70 | # | ○ | C-26 # | |
| 23 | " | " | " | 1.8 | 1.2 | 0.75 | # | ○ | D-23 # | |
| 24 | " | " | " | 1.6 | 1.2 | 0.80 | # | ○ | D-21 # | |
| 25 | " | " | " | 1.4 | 1.1 | 0.50 | # | ○ | D-21 # | |
| 26 | " | 8類-b | " | 2.0 | 1.4 | 1.55 | # | ○ | E-24 # | |
| 27 | " | " | " | 1.9 | 1.6 | 1.75 | # | ○ | C-29 # | |
| 28 | " | " | " | 2.3 | 1.1 | 1.65 | # | ○ | G-25 # | |
| 29 | " | " | " | 2.0 | 1.1 | 0.95 | # | ○ | 1号住居址 | |
| 30 | " | " | " | 2.0 | 0.9 | 0.85 | # | ○ | E-24グリット | |
| 31 | " | " | " | 1.6 | 1.4 | 1.15 | # | ○ | K-16 # | |
| 32 | " | " | " | 1.7 | 1.1 | 0.90 | # | ○ | 1号住居址 | |
| 33 | " | " | " | 1.6 | 1.2 | 0.80 | # | ○ | F-20グリット | |
| 34 | " | " | " | 1.8 | 0.9 | 0.35 | チャート | ○ | G-27 # | |
| 35 | " | " | " | 1.7 | 0.8 | 0.55 | # | ○ | D-23 # | |
| 36 | " | " | " | 1.3 | 1.3 | 1.05 | 黒曜石 | ○ | 3号住居址 | |
| 37 | " | " | " | 2.0 | 0.8 | 0.65 | # | ○ | D-27グリット | |
| 38 | " | " | " | 1.5 | 0.8 | 0.40 | # | ○ | B-28 # | |
| 39 | " | " | " | 1.5 | 0.8 | 0.55 | # | ○ | 3分住居址 | |
| 40 | " | " | " | 1.3 | 1.2 | 0.65 | # | ○ | 表 摺 | |
| 41 | " | " | " | 0.8 | 1.7 | 0.85 | # | ○ | 1分住居址 | |
| 42 | " | " | " | 0.9 | 1.5 | 0.85 | # | ○ | 表 摺 | |
| 43 | 28 | " | " | 0.9 | 1.3 | 1.10 | 黒曜石 | ○ | 1号住居址 | |
| 44 | " | " | " | 1.3 | 0.9 | 0.55 | # | ○ | F-24グリット | |
| 45 | " | " | " | 1.3 | 1.1 | 0.60 | # | ○ | F-28 # | |
| 46 | " | " | " | 1.1 | 1.4 | 0.65 | # | ○ | 1号住居址 | |
| 47 | " | " | " | 1.4 | 1.3 | 0.50 | # | ○ | # | |
| 48 | " | " | " | 1.6 | 1.2 | 0.55 | # | ○ | # | |
| 49 | " | " | " | 1.3 | 1.1 | 0.55 | # | ○ | D-25グリット | |
| 50 | " | " | " | 1.4 | 1.0 | 0.30 | # | ○ | F-19 # | |
| 51 | " | " | " | 1.0 | 1.0 | 0.35 | # | ○ | G-27 # | |
| 52 | " | " | " | 0.9 | 0.8 | 0.25 | # | ○ | 表 摺 | |
| 53 | " | " | " | 0.8 | 1.0 | 0.45 | # | ○ | 4号住居址 | |
| 54 | " | 8類-c | " | 1.4 | 1.3 | 0.85 | # | ○ | # | |
| 55 | " | " | " | 1.4 | 1.2 | 0.60 | # | ○ | 1号住居址 | |
| 56 | " | " | " | 1.4 | 1.5 | 0.60 | # | ○ | C-18グリット | |
| 57 | " | " | " | 1.6 | 1.1 | 0.75 | # | ○ | C-20 # | |

| 番号 | 揮抜番号 | 分類 | 器種 | 法 量 | | | 材質 | 現存状態 完形〇欠損○ | 出土位置 | 備考 |
|-----|------|------|-----|--------|-----|------|-----|----------------|----------|----|
| | | | | 最大長さ | 社大巾 | 重量 | | | | |
| 58 | 28 | 8類-c | 石 磨 | 1.3 | 1.4 | 0.75 | 黒曜石 | 〇 | D-23グリット | |
| 59 | " | " | " | 1.5 | 1.5 | 0.65 | " | 〇 | C-19 " | |
| 60 | " | " | " | 1.2 | 1.1 | 0.45 | " | 〇 | C-25 " | |
| 61 | " | " | " | 1.1 | 1.3 | 0.50 | " | 〇 | F-29 " | |
| 62 | " | " | " | 1.5 | 1.0 | 0.60 | " | 〇 | 4号住居址 | |
| 63 | " | 8類-d | " | 2.1 | 1.7 | 1.85 | " | 〇 | G-16グリット | |
| 64 | " | " | " | 2.4 | 1.6 | 2.55 | " | 〇 | 1号住居址 | |
| 65 | " | " | " | 2.0 | 1.5 | 1.25 | " | 〇 | " | |
| 66 | " | " | " | 2.0 | 1.5 | 1.35 | " | 〇 | I-20グリット | |
| 67 | " | " | " | 2.0 | 1.5 | 1.30 | " | 〇 | D-29 " | |
| 68 | " | " | " | 2.0 | 1.3 | 1.50 | " | 〇 | 3号住居址 | |
| 69 | " | " | " | 2.0 | 1.5 | 1.30 | " | 〇 | 1号住居址 | |
| 70 | " | " | " | 2.1 | 1.3 | 1.35 | " | 〇 | C-27グリット | |
| 71 | " | " | " | 1.7 | 1.4 | 1.15 | " | 〇 | D-28 " | |
| 72 | " | 8類-e | " | 2.6 | 1.6 | 2.25 | " | 〇 | K-24 " | |
| 73 | " | " | " | 2.5 | 1.1 | 1.80 | " | 〇 | H-23 " | |
| 74 | " | " | " | 2.4 | 1.6 | 3.05 | " | 〇 | F-21 " | |
| 75 | " | " | " | 2.3 | 1.5 | 2.05 | " | 〇 | E-28 " | |
| 76 | " | " | " | 2.4 | 1.3 | 1.50 | " | 〇 | 表 採 | |
| 77 | " | " | " | 2.6 | 1.2 | 1.45 | " | 〇 | D-19グリット | |
| 78 | " | " | " | 2.2 | 1.4 | 2.10 | " | 〇 | E-27 " | |
| 79 | " | " | " | 2.0 | 0.9 | 0.95 | " | 〇 | J-28 " | |
| 80 | " | " | " | 2.7 | 1.3 | 1.55 | " | | 1号住居址 | |
| 81 | " | " | " | 1.7 | 1.3 | 1.85 | " | 〇 | I-21グリット | |
| 82 | " | 8類-f | " | 3.0 | 1.9 | 3.20 | " | 〇 | D-27 " | |
| 83 | " | " | " | 2.6 | 2.1 | 3.05 | " | 〇 | 1号住居址 | |
| 84 | " | " | " | 2.5 | 2.1 | 2.60 | " | | " | |
| 85 | 29 | " | " | 2.9 | 1.5 | 1.85 | " | 〇 | 表 採 | |
| 86 | " | " | " | 2.2 | 2.0 | 1.90 | " | 〇 | J-25グリット | |
| 87 | " | " | " | 2.6 | 1.6 | 2.85 | " | | D-25 " | |
| 88 | " | " | " | 2.3 | 1.8 | 1.95 | | | F-16 " | |
| 89 | " | " | " | 2.5 | 1.9 | 2.10 | 黒曜石 | | C-28 " | |
| 90 | " | " | " | 2.9 | 1.3 | 2.40 | " | 〇 | C-24 " | |
| 91 | " | " | " | 2.5 | 1.4 | 3.00 | " | 〇 | D-25 " | |
| 92 | " | 8類-g | " | 1.7 | 2.1 | 1.55 | " | 〇 | 1号住居址 | |
| 93 | " | " | " | 1.7 | 1.3 | 1.50 | " | 〇 | E-28グリット | |
| 94 | " | " | " | 2.1 | 1.7 | 1.25 | " | 〇 | C-22 " | |
| 95 | " | " | " | 1.9 | 1.4 | 1.05 | " | 〇 | C-25 " | |
| 96 | " | " | " | 1.9 | 1.2 | 0.95 | " | 〇 | E-24 " | |
| 97 | " | " | " | 1.1 | 1.5 | 0.75 | " | 〇 | 1号住居址 | |
| 98 | " | " | " | 1.2 | 1.1 | 0.75 | " | 〇 | F-21グリット | |
| 99 | " | " | " | 1.3 | 1.2 | 0.60 | " | 〇 | 表 採 | |
| 100 | " | " | " | 1.1 | 1.1 | 0.50 | " | | F-17グリット | |
| 101 | " | " | " | 1.7 | 0.8 | 0.40 | " | | C-27 " | |
| 102 | " | " | " | 1.9 | 1.2 | 0.80 | " | 〇 | 1号住居址 | |
| 103 | " | " | " | 1.9 | 1.1 | 0.45 | " | 〇 | 表 採 | |
| 104 | " | " | " | 1.4 | 0.8 | 0.35 | " | 〇 | C-25グリット | |
| 105 | " | " | " | 1.6 | 1.2 | 0.75 | " | 〇 | J-19 " | |
| 106 | " | " | " | 1.2 | 1.1 | 0.20 | " | 〇 | D-25 " | |
| 107 | " | " | " | 0.9 | 1.0 | 0.25 | " | 〇 | E-20 " | |
| 108 | " | " | " | 1.3 | 0.9 | 0.45 | " | 〇 | C-22 " | |
| 109 | " | " | " | 1.0 | 0.8 | 0.35 | " | 〇 | C-19 " | |
| 110 | " | " | " | 1.0 | 0.9 | 0.25 | " | 〇 | I-20 " | |
| 111 | " | " | " | 1.6 | 1.1 | 0.60 | " | 〇 | G-28 " | |

| 番号 | 拂國 番号 | 分類 | 器種 | 法 量 | | | 材質 | 現存状態 完形 欠損 | 出土位位置 | 備考 |
|-----|----------|------|--------|--------|-----|-------|-------|------------------|----------|----|
| | | | | 最大長さ | 最大巾 | 重量 | | | | |
| 112 | 29 | 8類-g | 石錐 | 1.6 | 0.9 | 0.25 | 黒曜石 | ○ | 2号住居址 | |
| 113 | " | " | " | 2.0 | 1.6 | 1.45 | " | ○ | " | |
| 114 | " | " | " | 2.2 | 1.3 | 1.20 | " | | J-26グリット | |
| 115 | " | 8類-h | " | 1.8 | 1.3 | | | | F-24 " | |
| 116 | " | " | " | 2.0 | 1.8 | 1.40 | チャート | ○ | E-20 " | |
| 117 | " | 8類-I | " | 3.0 | 1.5 | 1.65 | " | ○ | 3号住居址 | |
| 118 | " | 9類 | ポイント | 3.2 | 2.4 | 5.50 | " | ○ | D-17グリット | |
| 119 | 30 | 10類 | 石塊 | 3.8 | 3.0 | 14.40 | " | ○ | 不明 | |
| 120 | " | 11類 | ドリル | 4.0 | 4.1 | 10.25 | サスカイト | ○ | 不明 | |
| 121 | " | 12類 | スクレイパー | 5.8 | 3.3 | 25.70 | ケイ岩 | | D-19グリット | |
| 122 | " | " | " | 3.5 | 3.2 | 14.20 | チャート | | E-26 " | |
| 123 | " | 13類 | " | 2.2 | 3.2 | 3.65 | 黒曜石 | | I-24 " | |
| 124 | " | " | " | 2.7 | 1.8 | 1.50 | " | | D-26 " | |
| 125 | " | " | " | 2.7 | 1.5 | 1.50 | " | | G-29 " | |
| 126 | " | " | " | 4.0 | 1.2 | 3.20 | | | 表 採 | |
| 127 | " | " | " | 2.9 | 1.6 | 1.70 | " | | F-22グリット | |
| 128 | " | " | " | 2.9 | 1.1 | 1.40 | " | | 表 採 | |
| 129 | " | " | " | 2.5 | 1.4 | 1.25 | " | | C-28グリット | |
| 130 | " | " | " | 3.5 | 1.1 | 4.55 | " | | G-26 " | |
| 131 | " | " | " | 2.6 | 1.2 | 1.45 | " | | G-29 " | |
| 132 | " | " | " | 2.9 | 1.0 | 2.20 | " | | J-19 " | |
| 133 | " | " | " | 2.6 | 1.4 | 1.65 | " | | I-26 " | |
| 134 | " | " | " | 2.5 | 1.6 | 3.45 | " | | E-21 " | |
| 135 | " | " | " | 2.4 | 1.5 | 1.55 | " | | G-25 " | |
| 136 | 31 | 14類 | " | 3.5 | 2.1 | 4.75 | " | | I-24 " | |
| 137 | " | " | " | 3.9 | 1.6 | 2.30 | " | | C-25 " | |
| 138 | " | " | " | 3.9 | 1.1 | 4.20 | " | | F-27 " | |
| 139 | " | " | " | 4.0 | 2.0 | 4.55 | " | | 不明 | |
| 140 | " | " | " | 3.8 | 1.5 | 4.70 | " | | F-28グリット | |
| 141 | " | " | " | 3.8 | 1.4 | 4.55 | チャート | | G-26 " | |
| 142 | " | " | " | 2.8 | 1.8 | 1.85 | 黒曜石 | | D-27 " | |
| 143 | " | " | " | 3.0 | 1.3 | 2.35 | " | | G-25 " | |
| 144 | " | " | " | 2.9 | 1.4 | 3.25 | " | | F-21 " | |
| 145 | " | " | " | 2.9 | 1.2 | 2.25 | " | | H-21 " | |
| 146 | " | " | " | 2.7 | 1.1 | 1.35 | " | | J-20 " | |
| 147 | " | " | " | 3.2 | 1.0 | 1.55 | " | | E-27 " | |
| 148 | " | " | " | 3.5 | 1.1 | 1.30 | " | | E-28 " | |
| 149 | " | 15類 | " | 3.1 | 2.1 | 4.50 | " | | E-26 " | |
| 150 | " | " | " | 1.9 | 2.7 | 3.00 | " | | C-37 " | |
| 151 | " | " | " | 2.2 | 1.6 | 2.30 | " | | F-24 " | |
| 152 | " | " | " | 3.0 | 2.3 | 6.30 | " | | I-20 " | |
| 153 | " | 16類 | " | 3.0 | 1.8 | 3.25 | " | | F-23 " | |
| 154 | " | " | " | 3.3 | 1.7 | 2.75 | " | | C-26 " | |
| 155 | " | " | " | 3.3 | 1.4 | 2.30 | " | | 3号住居址 | |
| 156 | " | " | " | 3.3 | 1.4 | 1.20 | " | | G-25グリット | |
| 157 | " | " | " | 2.2 | 1.8 | 2.65 | " | | 表 採 | |
| 158 | " | " | " | 2.9 | 1.7 | 3.25 | " | | F-23グリット | |
| 159 | " | " | " | 2.8 | 1.3 | 1.40 | " | | H-29 " | |
| 160 | " | " | " | 2.6 | 1.1 | 1.30 | " | | H-25 " | |
| 161 | " | " | " | 2.6 | 1.1 | 1.50 | " | | 表 採 | |
| 162 | " | " | " | 2.5 | 0.8 | 1.05 | " | | E-18グリット | |
| 163 | 32 | " | " | 2.0 | 2.1 | 1.80 | " | | 1号住居址 | |
| 164 | " | " | " | 2.1 | 2.0 | 1.35 | " | | D-22グリット | |
| 165 | " | " | " | 2.7 | 1.6 | 1.40 | " | | C-25 " | |

| 番号 | 博団 番号 | 分類 | 器種 | 法 量 | | | 材質 | 現存状態 完形 欠損 | 出土位置 | 備考 |
|-----|----------|----|----|--------|-----|-----|------|---------------|-------------|----|
| | | | | 最大長さ | 最大巾 | 重量 | | | | |
| 166 | 32 | 16 | 類 | スクレイバー | 2.4 | 1.4 | 1.40 | 黒曜石 | H-28グリット | |
| 167 | " | " | " | " | 2.6 | 1.4 | 1.85 | " | E-23 " | |
| 168 | " | " | " | " | 2.1 | 1.1 | 1.60 | " | E-28 " | |
| 169 | " | " | " | " | 2.1 | 1.3 | 0.60 | " | C-25 " | |
| 170 | " | " | " | " | 1.7 | 1.4 | 0.90 | " | K-25・26グリット | |
| 171 | " | " | " | " | 1.6 | 1.1 | 0.70 | " | F-26グリット | |
| 172 | " | 17 | 類 | " | 2.3 | 1.6 | 1.95 | " | H-23 " | |
| 173 | " | " | " | " | 2.1 | 1.3 | 1.45 | " | D-19 " | |
| 174 | " | " | " | " | 2.3 | 1.1 | 0.90 | " | J-23 " | |
| 175 | " | " | " | " | 1.8 | 2.2 | 1.55 | " | C-26 " | |
| 176 | " | " | " | " | 1.8 | 2.5 | 2.50 | " | E-18 " | |
| 177 | " | " | " | " | 1.9 | 2.9 | 2.90 | " | F-28 " | |
| 178 | " | " | " | " | 2.3 | 2.4 | 2.40 | " | E-24 " | |
| 179 | " | " | " | " | 2.7 | 1.8 | 4.40 | " | 表 拝 | |
| 180 | " | " | " | " | 2.5 | 2.3 | 3.20 | " | C-28グリット | |
| 181 | " | " | " | " | 2.7 | 2.0 | 3.40 | " | H-26 " | |
| 182 | " | " | " | " | 2.0 | 1.9 | 3.10 | " | F-27 " | |
| 183 | " | " | " | " | 1.9 | 1.5 | 1.45 | " | C-19 " | |
| 184 | " | 18 | 類 | " | 2.6 | 1.6 | 1.85 | " | 表 拝 | |
| 185 | " | " | " | " | 2.7 | 1.6 | 1.85 | " | 3号住居址 | |
| 186 | " | " | " | " | 2.5 | 1.5 | 1.95 | " | I-24グリット | |
| 187 | " | " | " | " | 2.9 | 1.5 | 1.15 | " | K-25・26グリット | |
| 188 | " | " | " | " | 3.1 | 1.5 | 1.45 | " | C-27グリット | |
| 189 | " | " | " | " | 2.6 | 1.3 | 1.35 | " | E-28 " | |
| 190 | " | " | " | " | 2.6 | 2.2 | 2.70 | " | G-22 " | |
| 191 | " | " | " | " | 2.4 | 2.1 | 1.80 | " | 1号住居址 | |
| 192 | " | " | " | " | 2.4 | 1.7 | 1.95 | " | D-26グリット | |
| 193 | " | " | " | " | 2.6 | 1.5 | 1.75 | " | D-28 " | |
| 194 | " | " | " | " | 2.2 | 1.6 | 2.00 | " | I-19 " | |
| 195 | " | " | " | " | 2.1 | 2.0 | 2.95 | " | D-23 " | |
| 196 | " | " | " | " | 2.3 | 1.8 | 2.50 | " | D-24 " | |
| 197 | " | " | " | " | 2.1 | 1.9 | 0.90 | " | D-26 " | |
| 198 | " | " | " | " | 2.0 | 1.4 | 1.35 | " | C-18 " | |
| 199 | " | " | " | " | 1.9 | 1.7 | 2.35 | " | C-28 " | |
| 200 | 33 | " | " | " | 2.6 | 1.9 | 3.70 | " | K-16 " | |
| 201 | " | " | " | " | 2.8 | 1.8 | 3.65 | " | 1号住居址 | |
| 202 | " | " | " | " | 2.3 | 2.5 | 4.60 | " | C-16グリット | |
| 203 | " | " | " | " | 2.1 | 1.5 | 1.65 | " | E-18 " | |
| 204 | " | " | " | " | 2.6 | 1.6 | 2.95 | " | F-27 " | |
| 205 | " | " | " | " | 2.7 | 1.0 | 1.35 | " | J-19 " | |
| 206 | " | " | " | " | 2.1 | 1.4 | 1.35 | " | D-27 " | |
| 207 | " | " | " | " | 2.5 | 1.2 | 1.15 | " | J-20 " | |
| 208 | " | " | " | " | 2.2 | 1.2 | 0.85 | " | H-17 " | |
| 209 | " | " | " | " | 2.1 | 1.2 | 0.75 | " | 4号住居址 | |
| 210 | " | " | " | " | 1.9 | 1.1 | 0.65 | " | H-23グリット | |
| 211 | " | " | " | " | 2.1 | 1.1 | 0.75 | " | H-21 " | |
| 212 | " | " | " | " | 2.4 | 1.2 | 0.70 | " | I-19 " | |
| 213 | " | " | " | " | 2.1 | 1.4 | 2.00 | " | E-22 " | |
| 214 | " | " | " | " | 1.7 | 1.8 | 2.55 | " | C-20 " | |
| 215 | " | " | " | " | 1.6 | 1.7 | 1.25 | " | D-27 " | |
| 216 | " | " | " | " | 1.7 | 1.5 | 1.10 | " | 3号住居址 | |
| 217 | " | " | " | " | 1.9 | 1.6 | 1.50 | " | 1号住居址 | |
| 218 | " | " | " | " | 2.5 | 1.2 | 0.90 | " | H-29グリット | |
| 219 | " | " | " | " | 1.8 | 0.9 | 0.60 | " | C-18 " | |

| 番号 | 博物館番号 | 分類 | 器種 | 法量 | | | 材質 | 現存状態 完形欠損 | 出土位置 | 備考 |
|-----|-------|-----|--------|------|-----|------|-----|--------------|----------|----|
| | | | | 最大長さ | 最大巾 | 重量 | | | | |
| 220 | 33 | 18類 | スクレイバー | 1.7 | 1.4 | 0.70 | 黒曜石 | | D-19グリット | |
| 221 | 33 | " | " | 2.2 | 1.3 | 1.10 | " | | F-22 " | |
| 222 | 33 | " | " | 2.0 | 1.2 | 0.80 | " | | J-21 " | |
| 223 | 33 | " | " | 1.9 | 1.2 | 0.95 | " | | C-25 " | |
| 224 | 33 | " | " | 1.7 | 1.1 | 0.80 | " | | C-25 " | |

整は荒く刃部もノコギリの刃状になっている。エンドスクレイバーの部類に入る。

第13類（第30図—123～135）

フレイクの一部にノッチを付けたもので、形状は一定しないが約半数が「く」の字状に曲っており、その内側にノッチを付けている。半径2cmくらいの大きな抉りのものから3mmくらいの小さなものまで各種ある。ノッチドスクレイバーの部類に入るものと考えたい。

第14類（第31図—136～148）

3～4の縦長フレイクの片側辺に調整剝離の施されているものをこの類とした。ほとんどが黒曜石製である。この種の石器は発掘調査の段階で見落さないように注意しなければならない。

第15類（第31図149～152）

剝離を全縁に施したもので、作業部位は全周縁で、作業の種類によって使用する部分を変えたのであろう。調整はかなり細かな部分まで行なわれている。ラウンドスクレイバーの部類に入るものであろう。

第16類（第31図—153～162・第32図—163～171）

フレイクの両側辺を調整して刃部を形成しているものをこの類とした。縦長のものがほとんどで刃部はそれほど鋭い調整はしていない。両側辺についている刃は使い分けをしたのかは不明だが、異った形態をしているものは少ない。

第17類（第32図—172～183）

調整剝離の位置が下部に集中しているもので、エンドスクレイバーの一類に入るものと考える。

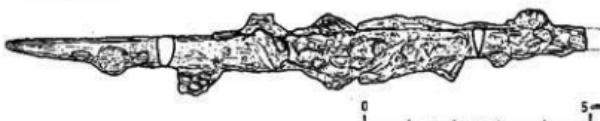
第18類（第32図—184～199・第33図200～224）

フレイクの片側辺に調整剝離をして刃部を形成しているものをこの類とした。形状は一定せず刃部も鋭い状態にまでは調整していない。第14類と同じだが、前類のものは縦長で大きなものだけを別にした。

(柴 登巳夫)

四) 金属器

1. 刀子（第34図）



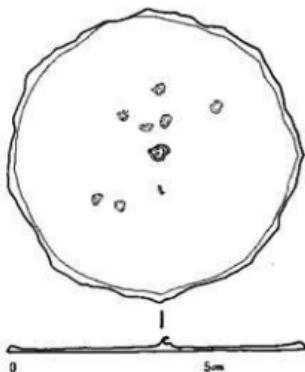
第34図 刀子実測図

第4号住居址北壁中央に寄りかかるような状態（図版5）で出土した。全長12.8cmで、切先の部

分が欠けている。峰はほぼ直線であるが、刃部にはそりをつけている。鍔がひどく形がかなり変わっているが、刀子としての形態は十分感じられる。金屬器の出土は第4号住居址においては刀子のみである。当時の生活において金属そのものの貴重性を想像することができる。

2. 八 種 鏡 (第35図)

第1号住居址東壁きわに位置する所から青銅鏡の出土があった。床面上10cmくらいの覆土中よりの発見であったが、第1号住居址のものと考えたい。鏡は青銅製の八稜鏡で、直径6.8cm、平面の厚さ1.1mmである。裏側の全縁辺に巾1~1.5mm、高さ0.5~1mmくらいの盛り上がりがあり、縁取りをしたようになっている。中央には手懸りの紐を通す為の鉤があるが、上半分は欠けている。又、裏面の文様であるが、全く不明である。鏡の左右に文様の名残と思える凹凸が数ヶ所確認することができるが、これだけからは文様を想像することは不可能である。表面は真平に仕上げられ、姿を映したことがうかがわれる。表裏面共に銅の緑青が出ている。



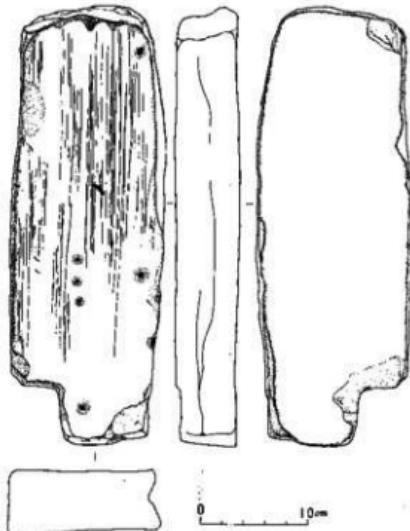
第35図 八稜鏡実測図

ハ) 土 製 品

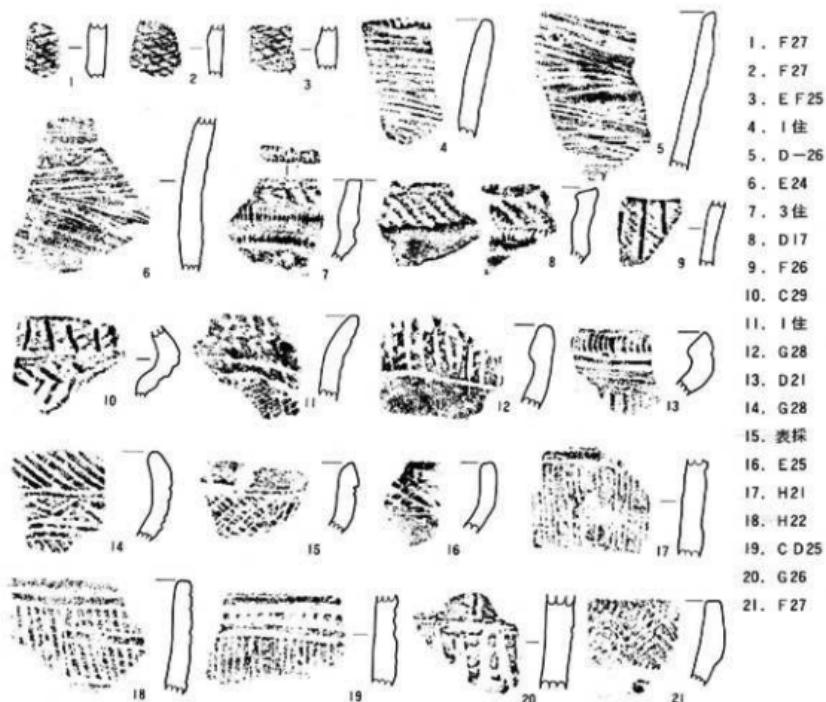
1. 塚 (第36図)

第3号住居址のカマドを形成している一部分に使用され出土した。両袖口の上に平らな面を上にして天井石の状態に置かれている。41×14.5×6cmのレンガの形を呈しており、一角を欠いているが、これは仕上がった後の使用時に組合わせる都合などで打ち欠いた様子である。塚の上下二面はほぼ平らに仕上げられ、明らかに指先で押えた時につけた指痕が6ヶ所ほど確認できる。上下二面は平らに整形しているが、他の面はほとんど手を加えず凹凸が多い。この塚は、住居址のカマドに使用する為に作られたのではなく、第一次の使用は他でなされ、カマドは二次的な使われ方と思う。この種の出土資料は県内においても類例がほとんどなく、今後研究しなければならない。

(柴 登巳夫)



第36図 塚実測図



第37図 繩文土器拓影

二) 繩文式土器 (第37図)

21個の土器片を大きく3類に分けた。

第I類—A (第37図—1・2・3) 繩文時代早期の押型文土器である。3片共に格子目文で、格子目がやや荒い。

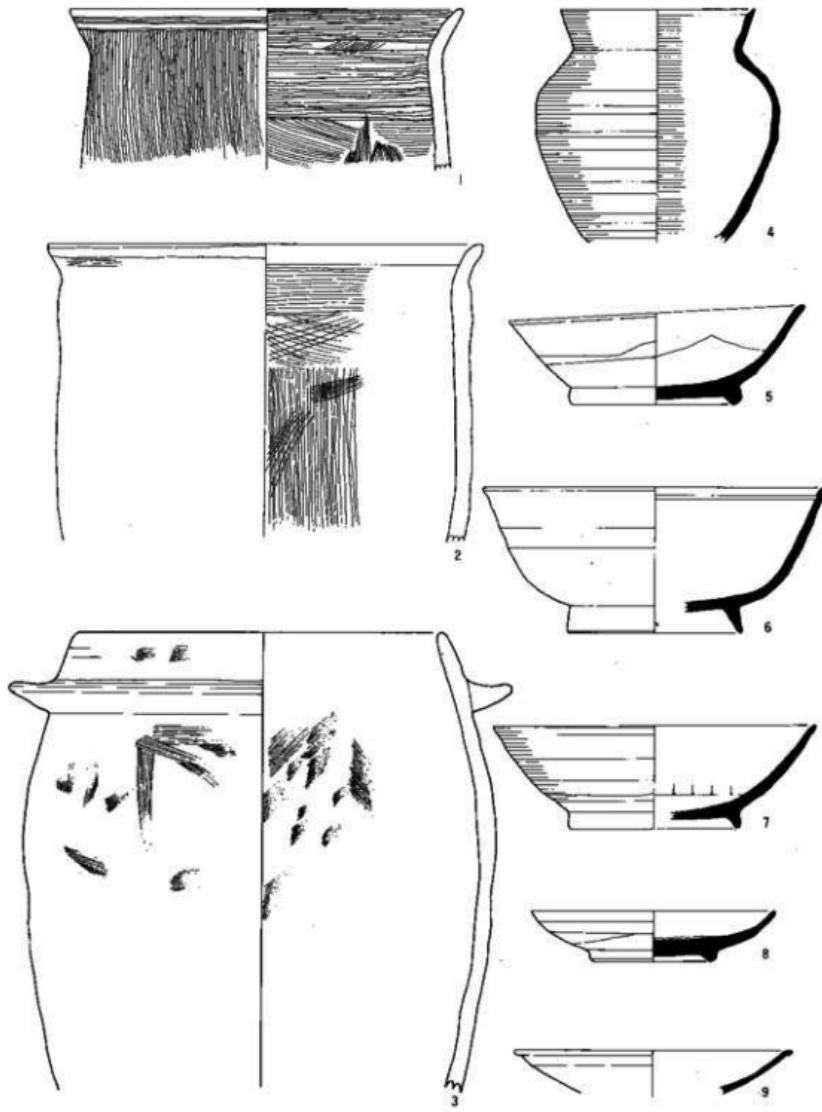
第I類—B (第37図—4・5・6) 胎土中に雜織や長石が入った土器で、器面を横の条痕で調整している。繩文時代後期後葉に位置づけられている。

第II類—A (第37図—7・8・11) 土器全体が非常に堅く、焼成も良く薄くできている。口唇部に刻みをつけ、口縁部には連続刺突した爪形文横帶をつけている。関西系の特徴をもった北白川下層上器に類似する。

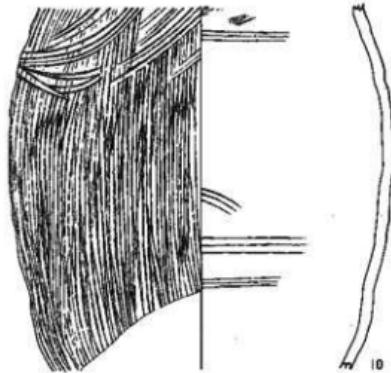
第II類—B (第37図—9・10・12・13) 地文の繩文に細い粘土紐をはりつけている。前期諸磯C式土器である。

第II類—C (第37図—14・15) 半截竹管による文様を中心にしていて。下島式直後形式の土器である。

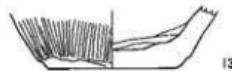
第III類 (第37図—18・19・20・21) 半截竹管による隆起線や沈線で器面に文様付けをした土器である。胎土中に雲母を含み、焼成は良くしっかりした土器で、中期初頭の時期である。(柴 登巳夫)



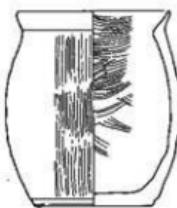
第38図 土器、陶器実測図(1)



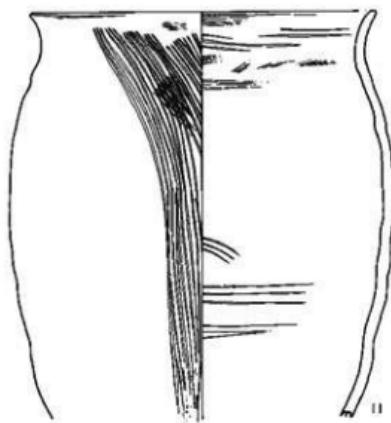
10



13



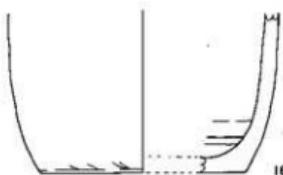
14



11



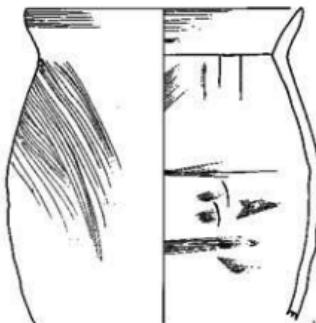
15



16

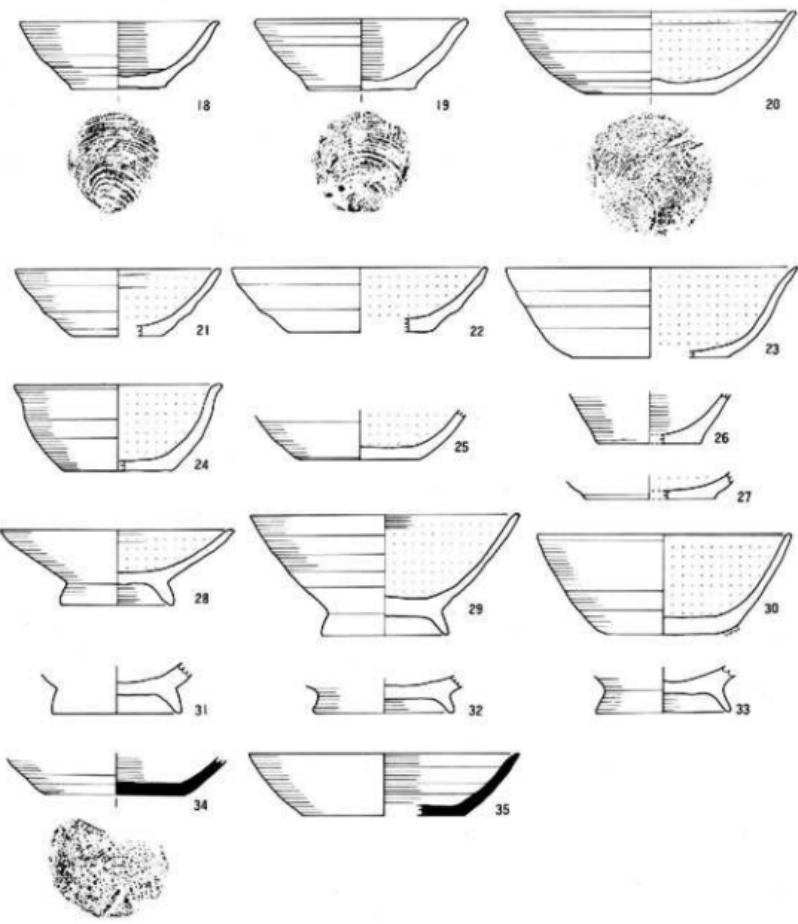


12



17

第39图 土器、陶器实测图（2）



第40図 土器、陶器実測図（3）

ヘ) 平安時代の土器、陶器

1. 土 器

変形土器（第38図-1・2）

胴上部のみをとどめる。おそらく最大口径が口縁にあるような筒形の壺だと思われる。1・2共に口頸部がゆるやかに外反している。1は第1号住居址床面下から出土したもので口縁部外側と内側のほとんどが刷毛目痕を残している。1・2共に胎土中に雲母と小石を多く含み、焼成は比較的良好。

（第39図-11・12）この土器も

口頸部がゆるやかに外反した円筒形に近い変形土器である。胴部に最大径を有している。共に内側には輪積の痕を残し、指で押さえつけて調整している。又、外側は櫛状の工具で、口縁から底部に向かってかき下すように調整している。11における櫛状工具の歯は10~12本である。胎土中には石英の小石粘を多く含み、雲母もかなり含まれている。焼成は良い方である。

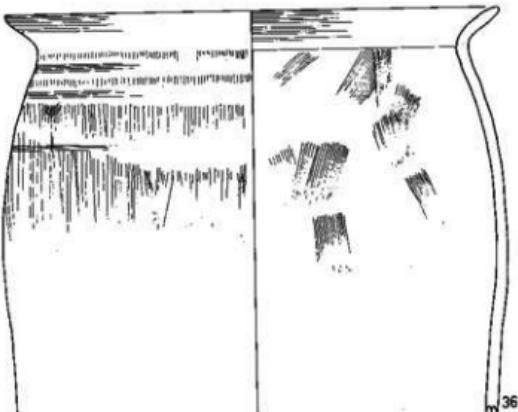
（第39図-14）第4号住居址から出土した小形壺である。口縁から底にかけ左右真二つに削ったよう割れ、半分が残っている。器面は削下から底部にかけては指で押しつけて調整し、上部は櫛状工具で横になでている。工具の歯は5本~6本で小型のものである。外面は二次的に火を受けており、ススが多く付いている。焼成はあまり良くない。

（第39図-17）は第4号住居址出土の変形土器である。胴上部を残している。器面内外共に刷毛目痕を残し、口縁部は横に引いている。胎土中には雲母と石英粒がみられるが、全体的に粘土が細かく感じられる。14をひと通り大きくした感じの土器である。（第41図-1）は前述の17と共通点が多く、刷毛目痕を残している。口縁の外反がやや急になっている。大きさの割りに薄手にできている。

（第39図-12）胴部に最大口径を有する小型壺である。これだけは他の壺型土器と異なり、種々を使用して整形している。器面の外側と内側の口縁部は櫛状工具による簾状の痕を残している。内側口頸部より下は刷毛目痕である。厚さ3mmの薄い土器で焼成は良く淡褐色を呈している。

鉢 盖（第38図-3）

第1号住居址中よりの出土でこの種の器は1点だけである。胴上部に最大径を有し、そのまま口縁までなめらかに内凹している。口脣部から2.6mmのところに巾2.3mmの鉢をつけているが、鉢は本体の土器とは別につけているためはがれやすく、出土した部分においても、鉢はすべて落ちていた。胎土中には雲母と小石粒が非常に多量に含まれている。そのため器面がざらざらした感じである。内外面共に刷毛目痕を残し調整している。厚さは平均0.8mmとやや厚く、焼成は比較的良好である。



第41図 土器実測図（4）

坏形土器

(第40図-18-19) 共に第1号住居址カマド付近からの出土である。軸轆による整形で糸切り底である。回軸は2つ共時計の回軸方向で、内外面には軸轆整形による同心円状の痕を残している。18は黄褐色、19は暗褐色を呈し、焼成は良好である。

内黒の坏 (第40図-20-25)

完形をとどめるのは20だけで、他は破片である。6点共に内黒といわれる坏で、軸轆整形で、糸切り底である。器面内側は丁寧に整えられなめらかになっている。22は内面を底部中心に向かって工具を使用してみがかれた痕を残している。

高台を有する坏・壇 (第40図-28-33)

6点のうち28-30は内黒を呈し、28においては高台の高さと全器高との比が1:3であり高台の高いのが特徴である。29-30は1:7で壇の部類に入るものと思う。軸轆による整形で器を形作り、それを軸轆上に伏せ、高台を付け仕上げている。器の外側は赤褐色を呈し、焼成は良い。31-33も高台付きの壇と思えるが、底部しか残っておらず器形は不明であるが、前述のものと同じ調整法と考える。

さて、以上述べた土師器について簡単にまとめてみる。

イ) 成形

この点において土師器の裏においては、輪積による成形で、内外の器面を指・刷毛・構状工具などで仕上げている。土器1個においてみると底部及び胴下部は指による成形が多く、胴部から頸部にかけ、刷毛・構状工具等によって縱方向の調整を多く行なっている。口縁部は口唇に添って横の調整である。(第39図-12)だけは土師の小型壇であるが軸轆を使用して成形している。

坏においてはすべて軸轆成形で、底はほとんど「糸切り」で軸轆の回軸を利用して一気に切離したものであろう。高台を付けたものは器を形作った後、ロクロ上に伏せて高台を仕上げる方法をとったのである。又、内黒の場合の調整は特に丁寧に行なわれている。

ロ) 色調・胎土

色調は焼成時における火あたりの具合、胎土中に含まれる物質の内容などの諸条件によって相違が生じる。そのため土器個々において、色調という点においては特に重きをおかなかった。

胎土は大型のものになるほど土が荒く、石英粒、細石を含むものが多い。これは土質・焼成技法と関連して、意識的に混入させたと思われる。又、土師器表面のものは雲母の量が非常に多く混入しているのも特徴であろう。坏においては土質が細くなり、軸轆成形に適するきめの良い土が使用されている。

2. 須恵器 (第40図-34-35)

須恵の坏は2点のみ出土している。軸轆を使用して「水挽き技法」による製作を考える。軸轆の回軸方向は時計回り(右回り)である。色調は灰白色を呈し、胎土に小石粒を含み焼成は良い。

須恵器壺 (第38図-4)

第3号住居址の立柱穴P₃の中より出土した。口径10cmの小形の壺で、最大巾を肩部に有し12.6cmを示す。頸部から口縁にかけての立上りが「く」の字状になり、軸轆による成形である。肩部から

頸部にかけ自然釉が付着し、黄色及び青灰色をしている。胎土中に空気を含み焼成時にそれがふくらんで「こぶ」状になっているところがみられる。

3. 灰釉陶器（第38図—5～9）

イ) 灰釉高台付塊（第38図—5～7）

5は第1号住居址の出土で完形品である。輪轆による整形で、回転は右回りをしている。付け高台で低い。付け方が粗雑で高台部分の輪轆調整が十分でない。胎土中に小豆大の石が5個含まれて器面より顔を出しておらず、粘土の精選が不十分であることが伺われる。

6は第1号住居址の床面の一部分を調査終了時に掘った時に偶然に出土したものである。5より一時期古い9世紀の猿投窓の所産と思う。高台は高く底部に対して垂直的で、器面の立上りも急になり、器が深くなっている。

7は前述の5に類似の形をしているが、胎土施釉は6に近い。器全体の40%くらいであるが破片になってからも使用した痕を残している。それは破片の中央に赤色の丹のようなものを塗った痕が残り、こわれ口にも丹が流れてついている。当時の人々にとっては灰釉の器が貴重なものであったことが想像できる。

灰釉高台付皿（第38図—8）

第1号住居址カマド付近の出土で三つに割れていたが、ほぼ完形となった。高さ2.7cmで口径12.6cmを計る。輪轆で整形され、底部は厚く重みのある皿である。胎土は非常に密でしっかりと焼上っている。施釉は3回まわして灰の水に入れたことを伺うことができる。

出土土器一覧表

| 検査番号 | 出土位置 | 器 形 | 時期 | 法 量 | | | 焼 成 | 胎土含有物 | 調 整 | 備 考 |
|--------|--------|-----|----|--------|--------|------|---------|-----------------------|----------------------------------|----------------|
| | | | | 高さcm | 最大巾cm | 厚さcm | | | | |
| 38E-1 | 1 住 下 | 甕 | 土師 | (83) | 口径20.4 | 0.8 | 比較的良い | 紫母・砂粒を含む | 外側タテ方向のハケ目、口縁ヨコ方向、内側ヨコ方向のハケ目 | |
| 38E-2 | 1 住 | # | # | (15.4) | 口径22.6 | 0.8 | # | # | 内側ヨコ方向のハケ目 | |
| 38E-3 | # | 舞 篓 | # | (23.7) | 口径18.9 | 0.8 | # | | 外側タテ方向のハケ目、口縁ヨコ方向、内側ヨコ方向のハケ目 | |
| 38E-4 | 3 住 | 壺 | 須恵 | (12.2) | 口径10.0 | 0.4 | 良 好 | 緻 密 | | |
| 38E-5 | 1 住 | 壺 | 灰陶 | 4.8 | 口径15.3 | 0.4 | 良 好 | 砂粒をわずかに含む （釉の発色不良） | | |
| 38E-6 | 1 住 下 | 甕 | # | 7.6 | 口径17.8 | 0.4 | 良 好 | | 内側・口縁ヨコ方向のクシ目 | |
| 38E-7 | 2 住 | 壺 | # | 5.4 | 口径16.8 | 0.5 | # | | | |
| 38E-8 | 1 住 | # | # | 2.7 | 口径12.7 | 0.4 | # | 緻 密 | | ロクロの回転方向 左方向回り |
| 38E-9 | # | # | # | (2.3) | 口径14.4 | 0.2 | # | # | | 内外両面に輪がかかる |
| 38E-10 | 2 住 | 甕 | 土師 | (8.8) | 口径20.1 | 0.6 | | | 外側タテ方向のクシ目、内側ヨコ方向のクシ目、底部ヨコ方向のクシ目 | |
| 38E-11 | 4 住 | # | # | (21.3) | 口径17.8 | 0.6 | | | 外側タテ方向のクシ目、内側・口縁ヨコ方向のクシ目 | |
| 38E-12 | # | # | # | (7.5) | 口径13.9 | 0.3 | 比較的良い | | 外側ヨコ方向のクシ目 内側ヨコ方向のクシ目 | |
| 38E-13 | 1 住 | | # | (2.9) | | 1.0 | 良 好 | 緻 密 | 外側タテ方向のクシ目 | |
| 38E-14 | 2 住 | 小切底 | # | 10.2 | 口径 7.9 | 0.6 | あまり直くない | 小石を含む | 内側ヨコナダ 外側タテ方向の調整 | |
| 38E-15 | # | | # | (4.6) | | 1.2 | | | | |
| 38E-16 | 4 住 | | # | (8.3) | | 0.7 | | | | |
| 38E-17 | # | 甕 | 土師 | (16.3) | 口径14.4 | 0.6 | | | 外側タテ方向の調整、内側・口縁内ヨコ方向の調整 | |
| 40E-18 | 1 住 | # | # | 3.4 | 口径10.3 | 0.5 | 良 好 | | | 糸切り底 |
| 40E-19 | # | # | # | 3.7 | 口径10.9 | 0.5 | # | 小石を多少含む が比較的良い | 糸切り底、ヨコナダ | |
| 40E-20 | # | # | # | 4.3 | 口径15.1 | 0.5 | # | # | | 内墨、糸切り底 |
| 40E-21 | # | # | # | 3.5 | 口径10.6 | 0.6 | | | | 内墨 |
| 40E-22 | # | # | # | 3.4 | 口径13.3 | 0.6 | | | | # 糸切り底 |
| 40E-23 | # | # | # | 4.7 | 口径15.2 | 0.5 | | | | # |
| 40E-24 | 4 住 | # | # | 4.5 | 口径10.8 | 0.6 | 比較的良い | | | # |
| 40E-25 | 1 住 | # | # | (2.3) | | 0.5 | | | 底ヘラ切り | |
| 40E-26 | D - 27 | # | # | (2.5) | | 0.5 | あまり直くない | 小石まじり | | |
| 40E-27 | D - 29 | # | # | (1.0) | | 0.5 | | | | |
| 40E-28 | E - 28 | # | # | 3.9 | 口径12.1 | 0.4 | 比較的良い | 小石まじり 植根 | | 内墨、高台付 |
| 40E-29 | C - 28 | 甕 | # | 6.3 | 口径14.0 | 0.4 | # | 比較的良い | | 高台付 |
| 40E-30 | G - 28 | # | # | (5.2) | 口径13.2 | 0.4 | # | 小石まじり | | 内墨、高台付 |
| 40E-31 | 1 住 | | # | (2.1) | | 0.9 | | | | # |
| 40E-32 | # | | # | (1.4) | | 0.7 | | | | ヘラ切り |
| 40E-33 | C - 29 | | # | (1.8) | | | | | | |
| 40E-34 | 1 住 | 壺 | 須恵 | (1.8) | | 0.5 | 良 好 | | | 糸切り |
| 40E-35 | C - 27 | # | # | (3.2) | 口径14.1 | 0.5 | | | | |
| 41E-36 | 4 住 | 甕 | 土師 | (20.4) | 口径24.9 | 0.5 | 比較的良い | | 外側タテ方向のハケ目 内側・口縁ヨコ方向のハケ目 | |

第IV章 まとめ

1. 大原第二遺跡は、箕輪町でも重要な遺跡の一つとして知られている遺跡である。ここに昭和53年度福井地籍土地改良事業に伴なって事業着工前に記録保存を行なったものである。
2. 大原第二遺跡は、福井地区の南に位置し割合平坦地域である。現場は南東に傾斜、標高は715m伊那山脈の小肩状地の段丘上に所在する遺跡である。
3. 繩文時代早期の遺構はついに発見できなかつたが（第37図-1～3）で見るよう格子目文の押型文土器と（同図4～6）の条痕を施した船形式に比定される土器である。
4. 繩文時代前期の遺物（第37図-7～8・11）は北白川下層に類似した土器、9・12～13は諸磯Cに比定される土器。14～15は前期末の遺物である。
5. 繩文中期の遺物（第37図-18～21）は中期初頭に位置付けられる土器である。
6. 本遺跡で調査された4軒の住居址は第2・4号住居と、1・3号住居の二時期に区分することができる。

第2号住居址はカマドのみが確認できたにすぎなかつた。従って時期の区分は出土遺物に依らざるを得ない。遺物は（第38-7）灰釉陶器付高台系切底の碗で、口径と高さの比は3:1でK-90～0-53期の中間に位置されるものと考えられる。そのほか（第37-7）の同じ場所から綠釉陶器が発見されたことである。この綠釉陶器は3片で、いずれも皿形の破片である。そのうち、1個体は低温で焼成されているためか釉がはく落しているものと、そうでないものとの2個体分である。釉潤は青緑色を呈している。胎土は濃い灰黒色良質の陶土を用いている。

第4号住居址、本址もカマド附近の一部だけで、他の部分は黒褐色土層中に掘り込まれているためプランは判然としなかつた。今後この種の遺構については調査方法にもっと研究を要することを痛感した。本址は出土遺物から第2号住居址と同時期と考えられる。

1号住居址、本址は第3号住居址によって切られたもので、第4・3号住居址と同様カマドとその附近のみで、他は黒褐色土層中に掘り込まれているため住居址全体を把握するに至らなかつた。遺物はカマド周辺に集中して発見された。遺物は（第40図1～3・5～6・8～9）、（第40図18～20）で窺える様に10～11世紀、猪俣・美濃系のものである。（第38図-3）は土師の鉢蓋で上伊那地方では発見例が少ない貴重な資料である。時期は11世紀と考えられる。そのほか注目されるのは（第35図）（第5図版）の八稜鏡である。この八稜鏡の出土状況からして本址に関係がありと考えておきたい。八稜鏡の発見は当地方としては初見である。時期的に11世紀代のものと考えている。

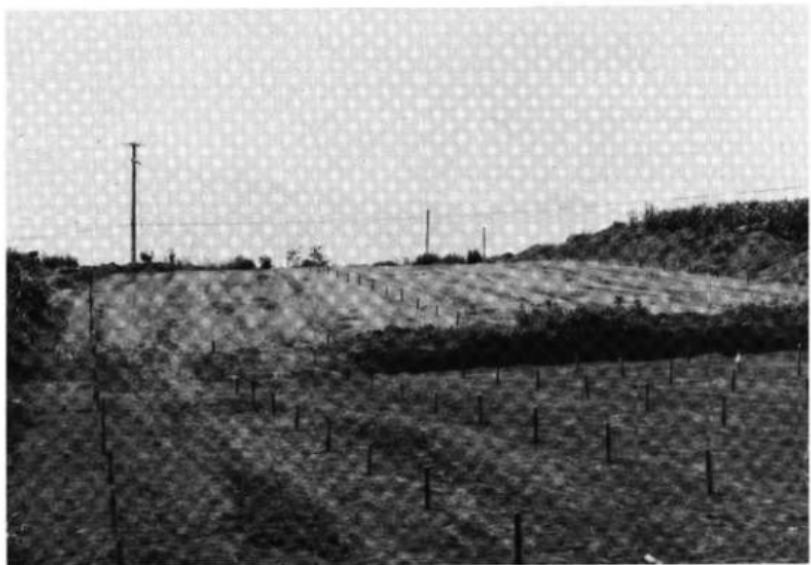
3号住居址、本址は第1号住居址を切って作られた住居址である。第1号住居址と同様カマド附近の壁が確認されたのみで、他は黒褐色土層中に掘り込まれて作られているため住居址の全体を知るに至らなかつた。本址で特に注目されるのは、カマドの天井石の代りに使用されたレンガ状の焼物「甕」の出土である。伊那地方ではこうした例は今迄聞いていない。最近土師期のカマドの調査も念入に行なわれるようになってきてるので、こうした例の発見に期待したいものである。本址の時期は11世紀後半に位置すると考えられる。

その他の遺構、第1号集石であるが、たしか人為的であることは相異ないが、本文にも調査者が述べられている様な見解も考えられるが、これも今後の資料の増をまって考えたい。

本調査の報告を終るにあたり、種々の御配意をいたいた地元の方々県教育委員会の担当官各位、箕輪町教育委員会に対し深い敬意を表するとともに、献身的な御協力をいたいた調査員、事務局各位に篤く御礼を申し上げる次第である。

（調査団長 友野良一）

図 版



第1図版 発振区全景



グリット発振状況



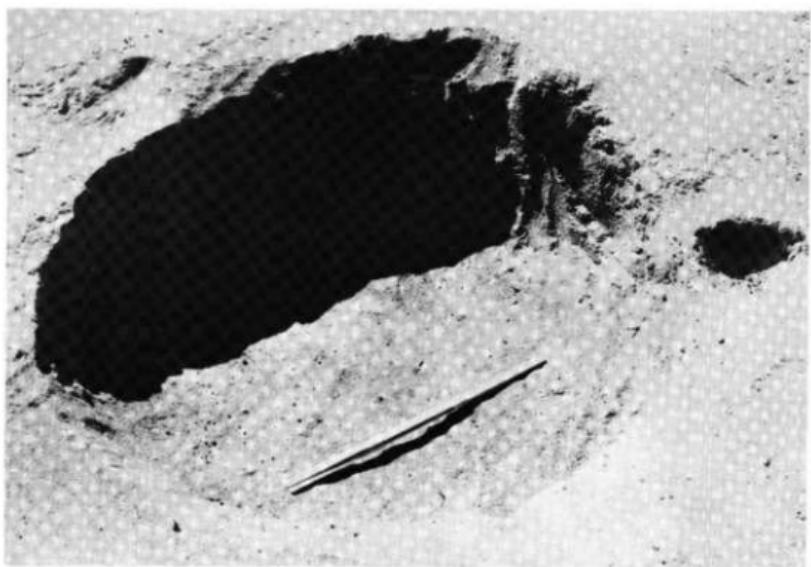
第2図版 第1・3号住居址



第4号住居址



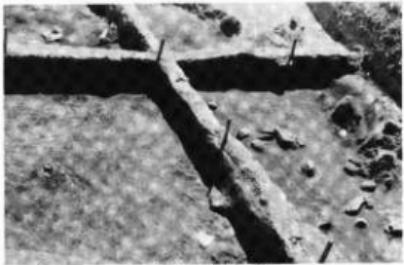
第3図版 第1号集石



第1号集石完掘



第1号住居址カマド



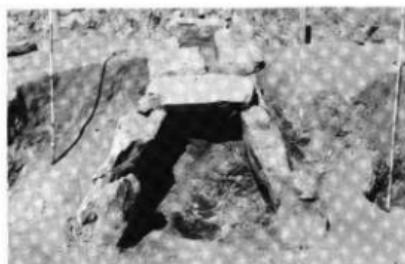
第1号住居址調査状況



第3号址炭化材出土状況



第2号カマド址調査状況



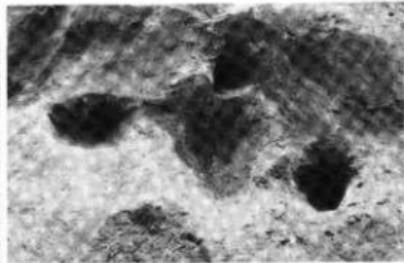
第3号住居址カマド



第3号住居址カマド調査状況



第4号住居址カマド



第4号住居址カマド調査状況

第4回版 遺構状況



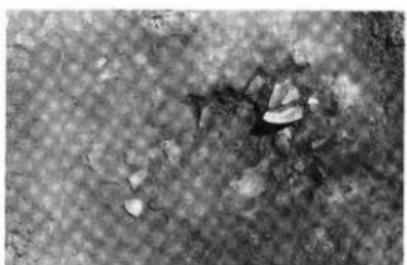
第 1 号住居址内



第 4 号住居址



第 4 号住居址



第 1 号住居址



第 4 号住居址



第 1 号住居址



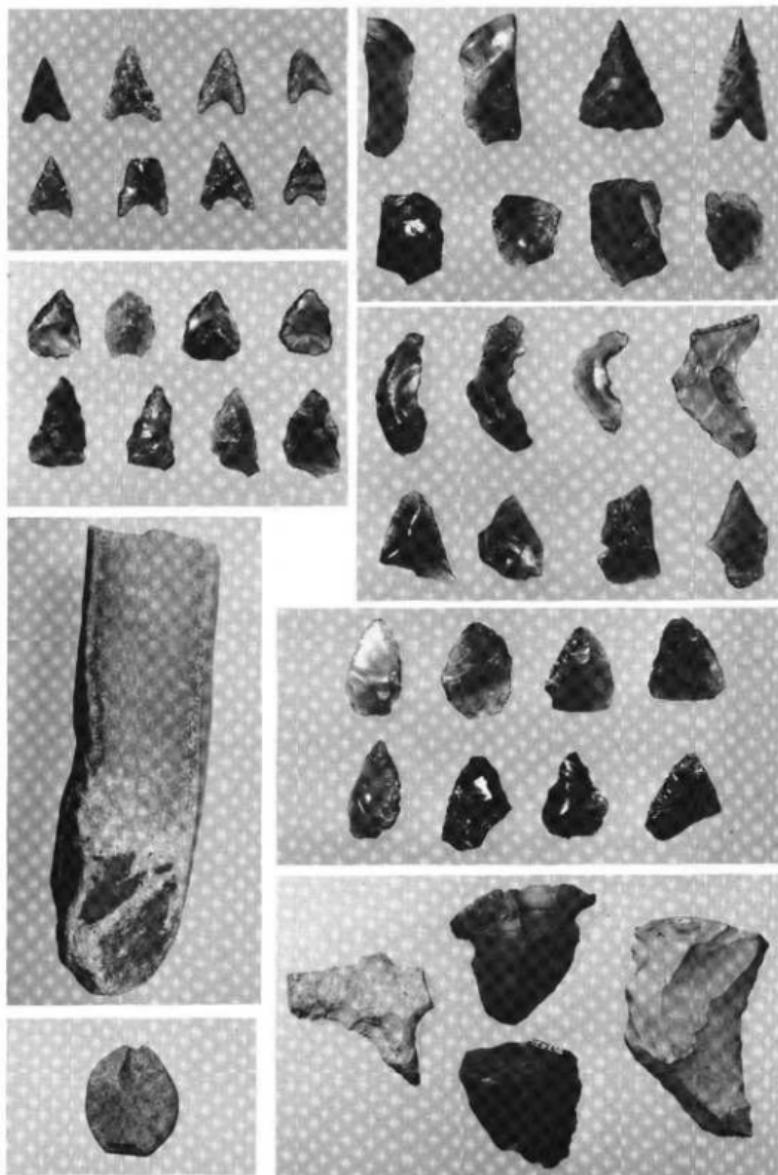
I - 34 グリット



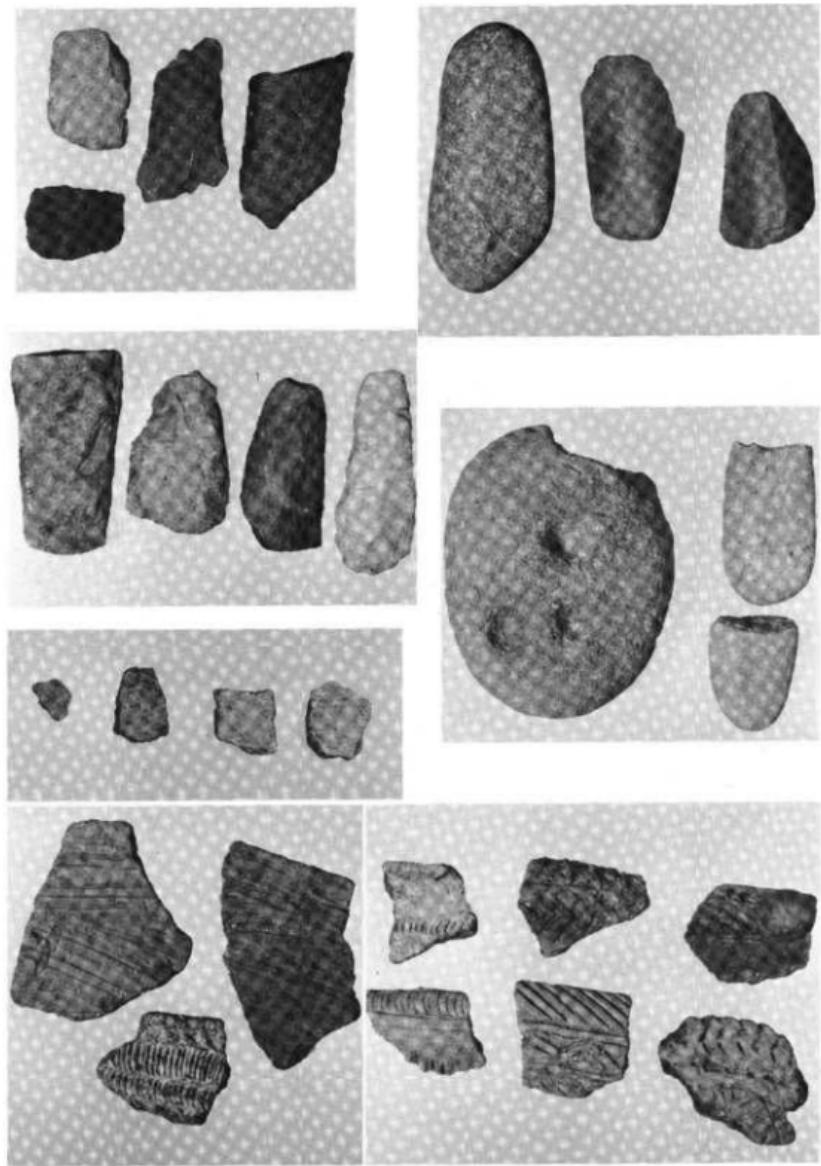
第 1 号住居址



第6回版 調査スナップ



第7回版 出土石器(1)



第8回版 出土石器・土器

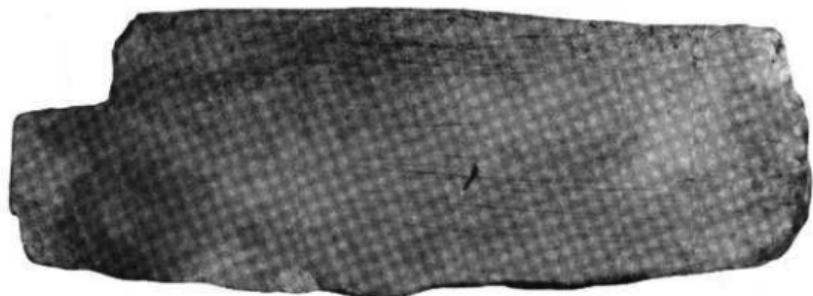


1.2.3.7.8.9第1号住居址出土 4.ビット1出土 5.第4号住居址 6.第2号カマド横

第9回版 出土遺物



1 第4号住居址出土刀子



2 第3号住居址カマド上出土埴

大原第三遺跡

1978

箕輪町教育委員会

凡　　例

1. この調査は、笑輪町福与地籍の土地改良事業に伴うものであるため、事業の着工前に調査を完了する必要上緊急の記録保存事業とした。
2. 報告書は図版を主体とし、文章記述は簡略とした。
3. 造構の縮尺は特別のものを除いて $\frac{1}{20}$ にしてある。
4. 石器類は $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ の2種類の縮尺にしてある。
5. 土器は $\frac{1}{2}$ 縮尺であるが、特別の場合はスケールをつけてある。
6. 土器拓影は $\frac{1}{2}$ 縮尺である。
7. 本報告書の執筆者および図版製作者は次のとおりである。担当した項目の末尾に執筆者を明記した。
 - ・本文執筆者 友野 良一・柴 登巳夫
 - ・図版製作者 小池 幸夫・三沢 恵・上田 恵子・市川 隆
　　柴 登巳夫・竹人 洋子・大槻たつ子
 - ・写真撮影 柴 登巳夫・荻原 茂・小池 幸夫
8. 本報告書の編集は主として笑輪町教育委員会があたった。

目 次

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 遺跡の立地 1

　　第1節 位 置 1

第Ⅱ章 発掘調査の経過 2 ~ 3

　　第1節 発掘調査に至るまで 2

第Ⅲ章 発掘調査の結果 4 ~ 25

　　第1節 調査結果の概要 4

　　第2節 遺 構 5 ~ 14

　　第3節 遺 物 15 ~ 25

第Ⅳ章 ま と め 26

挿 図 目 次

| | |
|-----------------------|----|
| 第1図 位置図..... | 1 |
| 第2図 発掘風景..... | 3 |
| 第3図 地形及び発掘区域図..... | 4 |
| 第4図 遺構全測図..... | 5 |
| 第5図 第1号住居址実測図..... | 6 |
| 第6図 第1号住居址地層断面図..... | 7 |
| 第7図 第1号住居址カマド断面図..... | 8 |
| 第8図 建造物址実測図..... | 9 |
| 第9図 第1号集石実測図..... | 10 |
| 第10図 第1号集石完掘図..... | 10 |
| 第11図 集石群実測図..... | 11 |
| 第12図 集石群調査状況..... | 12 |
| 第13図 石器実測図(1)..... | 13 |
| 第14図 石器実測図(2)..... | 14 |
| 第15図 石器実測図(3)..... | 15 |
| 第16図 石器実測図(4)..... | 17 |
| 第17図 繩文土器実測図..... | 20 |
| 第18図 繩文土器拓影..... | 21 |
| 第19図 土器実測図..... | 22 |
| 第20図 土器実測図..... | 23 |
| 第21図 土鍤実測図..... | 23 |
| 第22図 その他の遺物..... | 23 |

図 版 目 次

- 第1図版 遺跡全景
- 第2図版 遺構
- 第3図版 遺物出土状況
- 第4図版 出土石器
- 第5図版 出土土器
- 第6図版 出土土器

表 目 次

| | | |
|-----|------------|----|
| 第1表 | 石器要目一覧表（1） | 16 |
| 第2表 | 石器要目一覧表（2） | 18 |
| 第3表 | 出土土器・陶器一覧表 | 24 |

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位 地

大原第三遺跡は、長野県上伊那郡笑輪町大字福与433-3番地に所在する。この位置は第二遺跡のすぐ西側であり、西南にゆるやかな傾斜面を呈した扇状地上にある。標高は715mで天竜川との比高50mを計る。

(柴 登巳夫)



第1図 位 置 図

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

本地区は箕輪町福寺地籍の天竜川左岸台地の水田および畑作地帯で、地区一帯は水田と畑が点在し、排水の悪い湿地が多いため、農業機械の導入にも支障をきたしている現状であった。このような現状を開拓するため、箕輪町が事業主体となって、団体営土地改良工事が計画された。これに伴ない埋蔵文化財の確認調査が行なわれ、大原一、二について第三地点における調査が必要となった。調査は第二地点のすぐ西側に設定され、引き続いて友野良一氏を調査団長とする調査団を組織し、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施する運びとなった。

イ) 調査団

| | | |
|------|-------|----------------|
| 団長 | 友野 良一 | 日本考古学协会会员 |
| 調査主任 | 柴 登巳夫 | 箕輪町郷土博物館主任学芸員 |
| 調査員 | 茂原 茂 | 東京薬科大学学生 |
| " | 小池 幸夫 | 静岡大学学生 |
| " | 三沢 恵 | 立正大学学生 |
| " | 丸山 弥生 | 長野県考古学会会員 |
| 参与 | 馬場 喩一 | 箕輪町教育委員会教育委員長 |
| " | 原 茂人 | " 委員長職務代理 |
| " | 戸田 宗十 | 箕輪町教育委員会教育委員 |
| " | 桑沢 良平 | " |
| " | 春日 琢爾 | 箕輪町文化財調査委員会委員長 |
| " | 樋口 彦雄 | 箕輪町文化財調査委員 |
| " | 荻原 貞利 | " |
| " | 星野 和美 | " |
| " | 矢沢 喬治 | " |
| " | 市川 修三 | " |
| " | 小川 守人 | " |
| " | 堀口 貞幸 | " |
| " | 伊藤 一郎 | " |
| " | 上田 一江 | " |
| 事務局 | 河手 貞則 | 箕輪町教育委員会教育長 |
| " | 唐沢 保美 | 箕輪町教育委員会教育課長 |
| " | 唐沢 千洋 | " 社会教育係長 |

事務局 中村文好 箕輪町教育委員会社会教育主事
 ハ 田中正子 ハ
 ハ 柴登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員
 ハ 竹入洋子 ハ 学芸員

口) 発掘調査の経過

調査地区が第二調査地区のすぐ西側なので予備調査等すべて平行して行った。遺構の時代的予想、地層状況は第二地区とはほぼ同じであるという想定で開始した。調査は、発掘区全体を2m方眼のグリット設定から行ない、東北の角を基点に東へ24~41列、南へD~W列とする。第1号住居址の発見された地点は北へB、C列を拡張した。調査は晴天に恵まれ、厳しい暑さの中で続けられた。アルトーザーによる表土の排土作業に始まり、グリットの設定と順序通りの進行により遺構検出を目指した。調査は一般作業員の皆さん約20名、大学生15名、伊那北高校歴史研究部の生徒約15名が主力で、都合の良い人が交代で1日平均30人で行なった。遺跡は縄文時代早期から近世に至る複合遺跡で、遺構は平安時代の住居址と建造物址で、他に数百個よりなる集石群が主たるものである。遺物は約2000点に及び、石器が割合に多かった。又、8月中旬の発操作業は暑さと乾燥で掘った区域がヒビ割れと土ぼこりで非常に困難な状況下での作業の連続であった。調査時期を考えた計画をしなければ反省させられた。以下に記したような成果をあげることができた。

(柴 登巳夫)



第2図 発掘風景

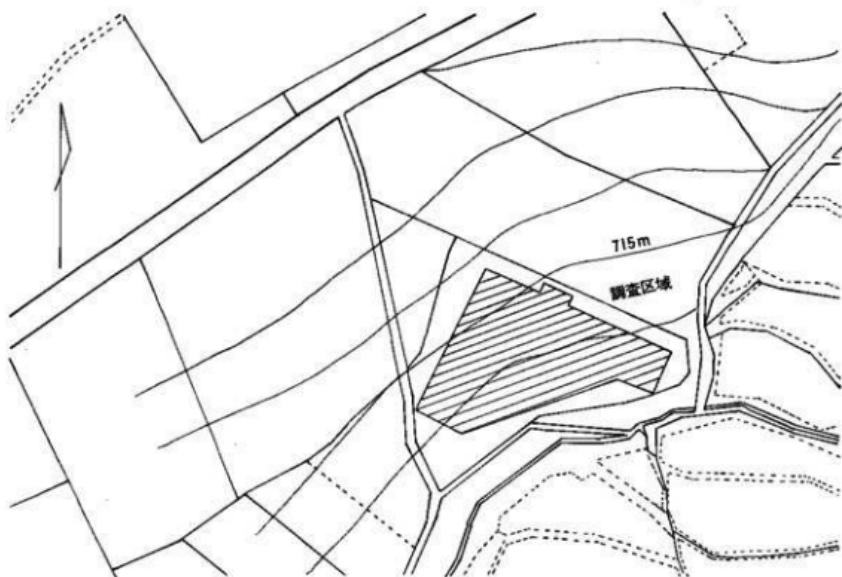
第III章 発掘調査の結果

第1節 調査結果の概要

調査の結果、縄文時代早期から近世にかけての遺構、遺物が出土した。縄文時代早期では、押型文土器が少量ではあるが出土し、前期、中期初頭の土器片も出土している。平安時代の竪穴住居址が1ヶ所、建造物址が1ヶ所確認された。第1号住居址は北壁にカマドを有しているが、遺存状況は悪く、袖石などは少ししか残っていない。建造物址は第1号住居址の西方8mのところに発見され1辺約4mの4柱穴よりなり、倉庫のような地上建造物を想像させる。又、第1号住居址の南約6mのところから様々の大きさをした集石群が検出された。直径70cm程の大きさのものから拳大のものまで数百個以上の数になる。石は12×14mくらいの橢円形に近い形の中に集っており、人為的な状態と考えたい。集石にはほとんど規則性は見られないが、ところどころにやや集中した部分が見られた。

集石の西南の角に1辺1mの方形の集石が検出された。深さは15cmほどと浅いが、掘り下げた穴の面は整地したタタキになっている。

(柴 登巳夫)



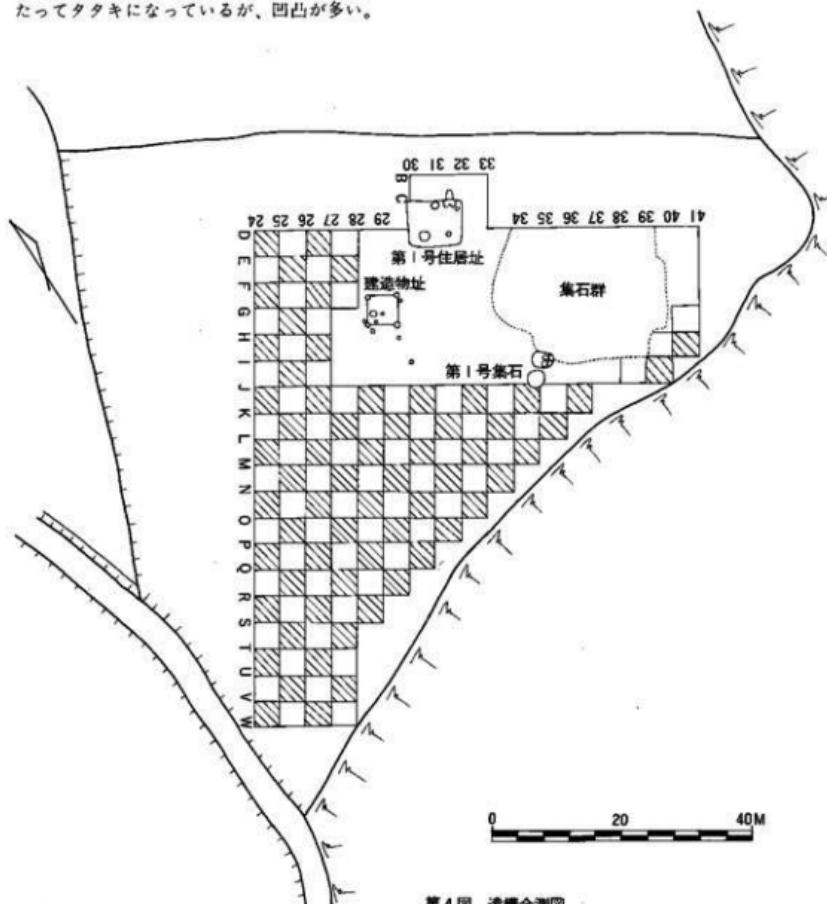
第3図 地形及び発掘区域図

第2節 造 構

1. 住居址

イ) 第1号住居址（第5図）（第2回版）

本住居址はC-30、31グリット付近に位置している。調査予定地区外に住居址の60%が出た結果となり、6グリットの広さを北に拡張して完掘し、第III層下でその存在が一部確認された。住居址の平面プランは、南東の角を除いてほぼ全部確認されたが、ローム層を掘り込んでの構築でないため平面プランの検出に苦労した。住居址は東西4.2m、南北3.6mの角丸長方形である。壁は全体的にゆるやかな斜壁で、落込み確認面からの壁高は、南壁中央部分で20cmを測る。床面は全面にわたってタタキになっているが、凹凸が多い。



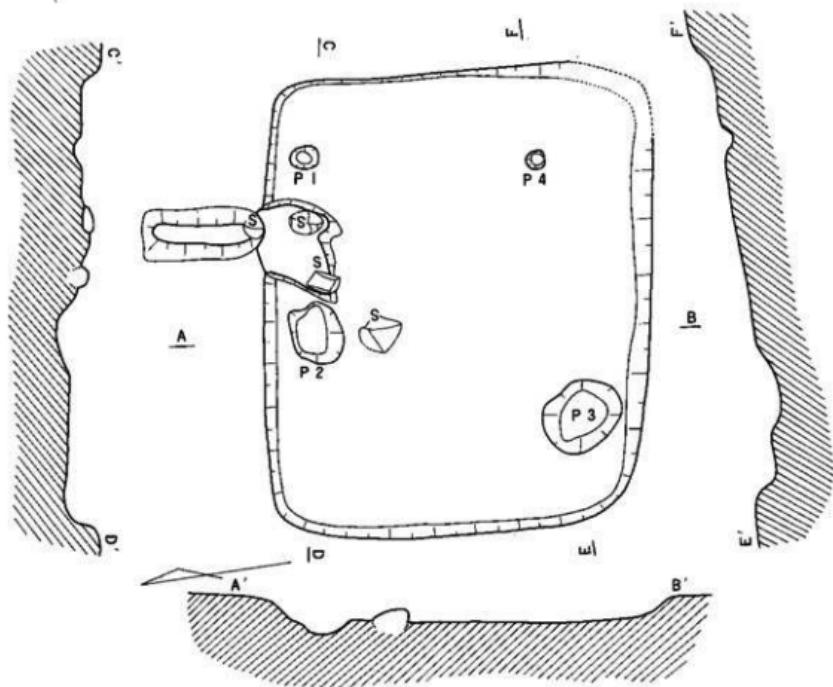
第4図 造構全測図

床面上には大小4つのピットがみつかっているが（第5図）主柱穴と思われるものはP₄だけである。P₁は位置からみて主柱穴とも考えられるがあまりにも浅い。P₂はカマド左側に掘られた直径40cmほどのピットで、カマドを有する遺構にはこの種のピットがたいがい掘られている。カマドを使用しての煮焚の生活時にこのピットが何かの役割りをしていたのであろう。

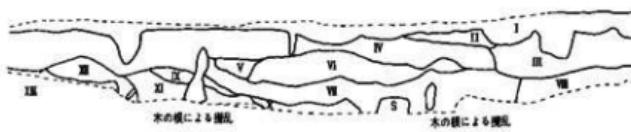
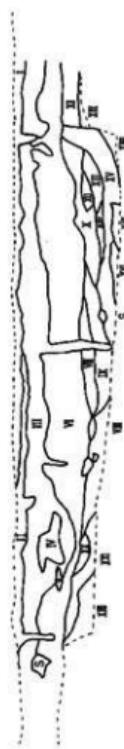
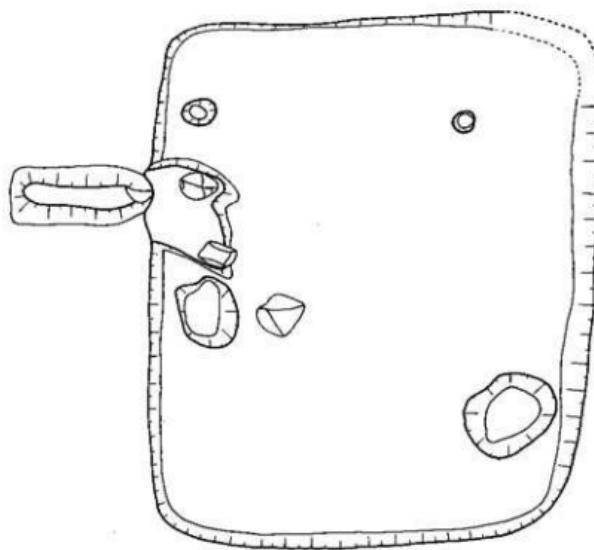
カマドは北壁中央よりやや東寄りに造られているが、きわめて遺存状況は悪くカマドの原形はほとんど留めていない。そのため袖部や火床の状態を観察することはできない。カマドの外に長さ1m、巾45cm、高さ30cmの焼土まじりの盛土が検出されたが、何のための盛土か判明しないが、位置から想像して、煙出のために設けた煙道の一部かと考えた。カマド構築のために使われたであろう河原石は、ぬき取られ何かに使われたと思われる。出土遺物は土師の塊が完形で4個出土（第3図版）し又、灰袖の高台付の碗が半個体、高台付の内黒の塊も出土している。この時期の住居址はほとんど完形の資料が出ないことが多いのに、この住居址は出土遺物が比較的豊富である。又、この住居址内から完形の土錘が1個出土している。形の整った中型の土錘であるが、住居址中より土錘が検出されたことは、この時期の魚法を推測する資料として貴重なものである。

出土遺物から考えこの住居址は平安時代後半のものである。

（柴 登巳夫）



第5図 第1号住居址実測図



第6図 第1号住居址地層断面図

第1号住居址 南北セクション層序説明

- 第Ⅰ層 〔耕作土層〕
- 第Ⅱ層 〔黃色味を帯びた黒褐色土層〕 よくしまっており粒子が細かい。
- 第Ⅲ層 〔黒褐色土層〕
- 第Ⅳ層 〔黒褐色土層〕 Ⅲよりやや明るい。
- 第Ⅴ層 〔褐色土層〕
- 第Ⅵ層 〔暗褐色土層〕
- 第Ⅶ層 〔暗褐色に近い黒褐色土層〕
- 第Ⅷ層 〔褐色土層〕
- 第Ⅸ層 〔黒色土層〕 ローム・ブロックを含む。
- 第Ⅹ層 第Ⅸ層に同じ。
- 第Ⅺ層 〔黄褐色土層〕 ローム・ブロック、焼土ブロックを含む。
- 第Ⅻ層 〔茶褐色土層〕

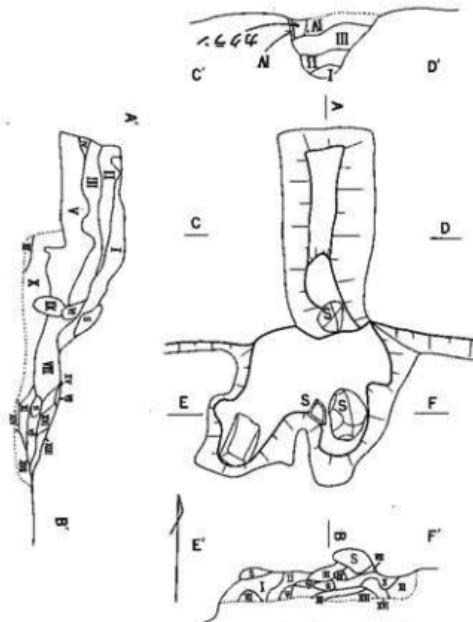
第 XIII 層 [黒褐色土層]

第 I 号住居址 東西セクション層序説明

- 第 I 層 [耕作土層]
 第 II 層 [暗黄褐色土層] 固くしまっている。
 第 III 層 [黒褐色土層] やや固い。
 第 IV 層 [淡灰色土と暗黄褐色土層が混じる] 若干の焼土ブロックを含む。
 第 V 層 [第 IV 層と同様、但し焼土ブロックは含まない。
 第 VI 層 [暗黄褐色土層] 第 II 層よりも黒っぽく、柔かい。
 第 VII 层 [黒褐色土層] 若干のローム粒を含む。
 第 VIII 层 [黒褐色土層] 第 VI 層よりもロームの量が多くかたい。
 第 IX 层 [暗黄褐色土層] かなりの量のローム粒とローム、ブロックを含む。ローム、ブロックは
 かたい。
 第 X 层 [暗黄褐色土層] 多量のローム、ブロックを含むためⅨ層よりも黄色味をおびている。
 第 XI 层 [黄褐色土層]
 第 XII 层 [黒褐色土層] 若干のローム粒を含む。
 第 XIII 层 [暗黄褐色土層] 第 X 層と類似。
 第 XIV 层 [黑色土層] わずかな量のローム粒を含む。
 第 XV 层 [黒褐色土層] 若干のローム、ブロックを含む。
 第 XVI 层 [明黄褐色土層] 多量の焼土ブロックを含む。ロームが主体。
 第 XVII 层 [明黄褐色土層] かたいローム、ブロックが主体。
- 第 XVIII 層 [黒色土層] やわらかい。
 第 XIX 层 [ローム層]
 第 XX 层 [黒褐色土層]
 第 XXI 层 第 XX 層よりも黒っぽい黒褐色土層。
 第 XXII 层 [黒色土層] やわらかい。

第 I 号住居址カマド層序説明

- | | |
|------------|---------------|
| A B 面 | C D 面 |
| I 焼 土 | |
| II 暗黄褐色土 | 焼土粒を含む。 |
| III 黒 褐 土 | |
| IV 黄褐色土 | |
| V 黑 色 土 | |
| VI 黑褐色土 | 焼土ブロックを含む。 |
| VII 淡黄褐色土 | 砂粒を含みかたい。 |
| VIII 暗赤褐色土 | 焼土粒、木炭粒を含む。 |
| IX 黑 色 土 | 土の根による擾乱部分か。 |
| X 暗黄褐色土 | |
| XI 烧 土 | |
| XII 黄褐色土 | |
| XIII 烧 土 | XII 層よりも明るい色。 |
| XIV 烧 土 | 多量の木炭を含む。 |
| XV 赤褐色土 | 黄味をおびている。 |
| XVI 暗褐色土 | 焼土を含む。 |
| XVII 暗黄褐色土 | |



第 7 図 第 I 号住居址カマド断面図

EF面

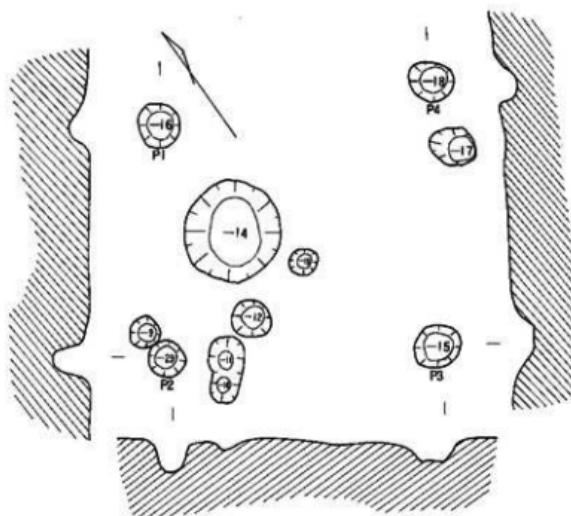
- I 黄褐色土 砂粒を含みかたい。焼土ブロックを含む。
- II 黄褐色土 I層よりも黄味の強い層で、砂粒を含む。
- III 黒褐色土
- IV 暗赤褐色土 III層よりも大きい焼土ブロックを含む。
- V 黄褐色土
- VI 焼 土
- VII 暗黄褐色土
- VIII 黑黄褐色土 焼土ブロック、木炭粒を含む。
- IX 黄褐色土 かたい。
- X 赤褐色土 焼土粒を含む。
- XI 暗黄褐色土
- XII 焼 土
- XIII 黑褐色土
- XIV 暗赤褐色土 砂粒を含む。

2. 建造物址

本址は第一号住居址の西約8mのところG-29グリット付近に位置している。ピットは第II層からIII層にかけ検出され第8図に示すような配置となって現われた。このピット群を検討した結果、

$P_1 \sim P_4$ の4主柱よりなる地上建造物の柱穴址であろうとの推定を行った。 P_1 と P_2 の間隔は2m、 P_2 と P_3 は2m30cm、 P_3 と P_4 は2m30cm。 P_1 と P_4 は2m30cmとほぼ正方形である。深さは15~29cmであるが、これは落込み確認面からのものである。又、この4柱穴の他に数個のピットを同時に確認したが、4主柱の補助的なものという見方もできる。この付近からは第一号住居址出土の遺物と同時期と思われるものが出土している。この建造物址は第一号住居址と同時期のものと考えたい。

(柴 登巳夫)



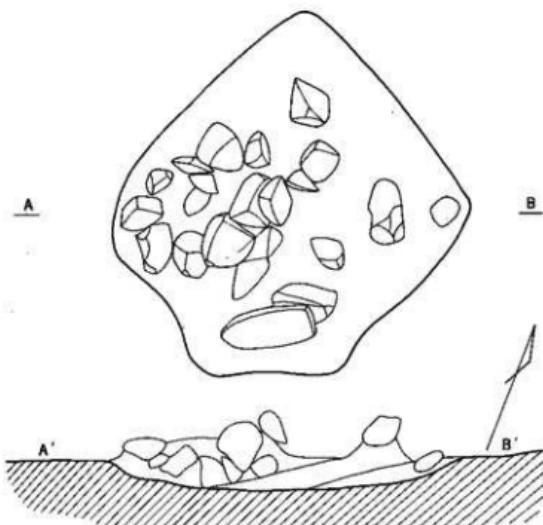
第8図 建造物址実測図

3. 集石

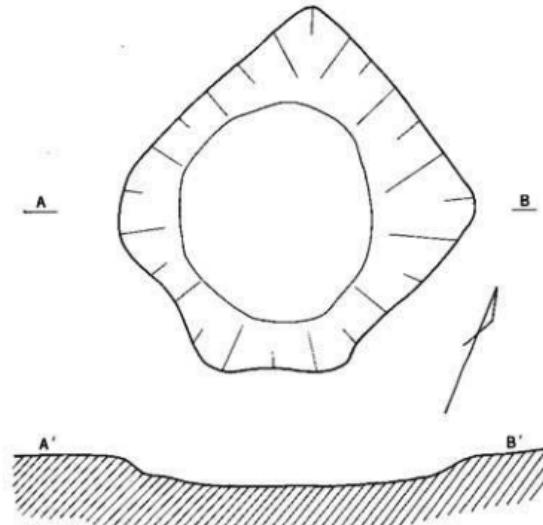
イ) 第1号集石(第9図)

本集石址はI-34グリット付近に位置している。1辺1.2mの方形の中に石が集中している状態である。石の大きさは頭大のものがほとんどで角のある石が多い。集石は1.2mの方形で深さ20cmの落込みの中に規則性もなく黒土と混じりながら入っている。石は集石ビット西側に円形に集中している。石質は安山岩、花崗岩、粘板岩等である。大原第二遺跡においてもこれに類似する集石が一ヶ所検出されているが、第二遺跡の集石の方が配石的な傾向が強く感じられる。この集石の北側には大集石群が広がっているわけであるが、これとの関係が直接あるかは不明である。単独の集石ないし積石と呼ぶものであろう。又、集石ビットからは土器類などの遺物は全く出土せず、この集石の造られた時期は不明である。本遺構が何の目的で造られたかが問題になるが、これが埋葬址か、祭祀址かなと考えたが、いずれも決定するだけの要素を見い出すことはできなかった。

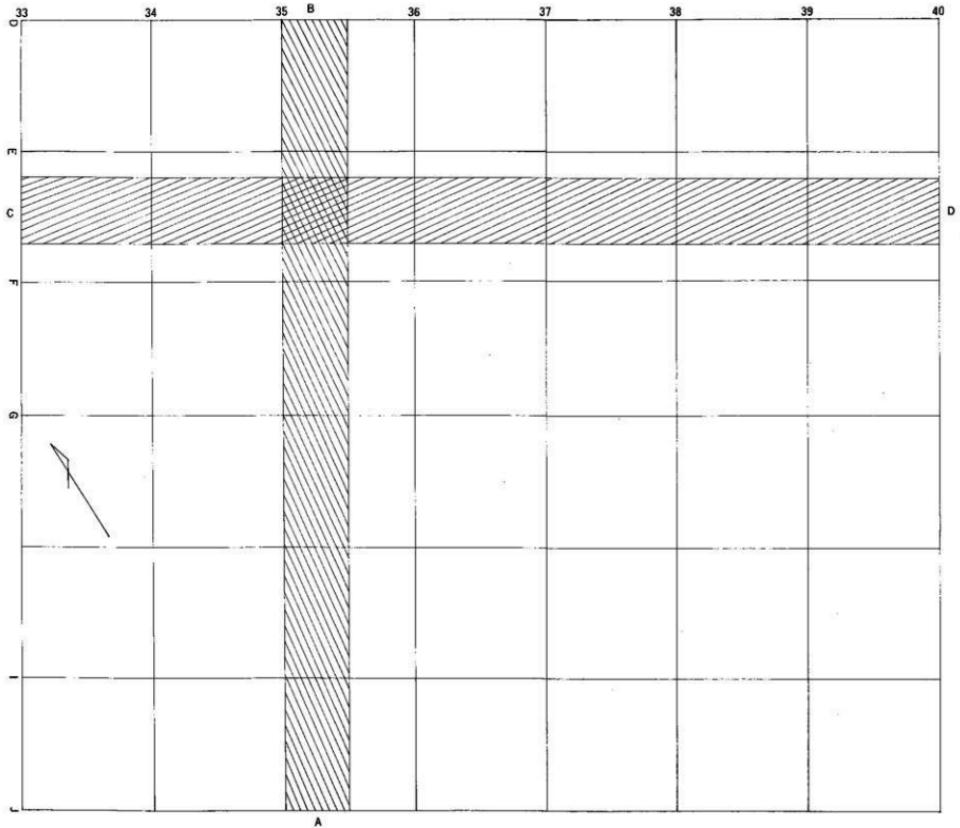
(柴 登巳夫)



第9図 第1号集石実測図



第10図 第1号集石実測図

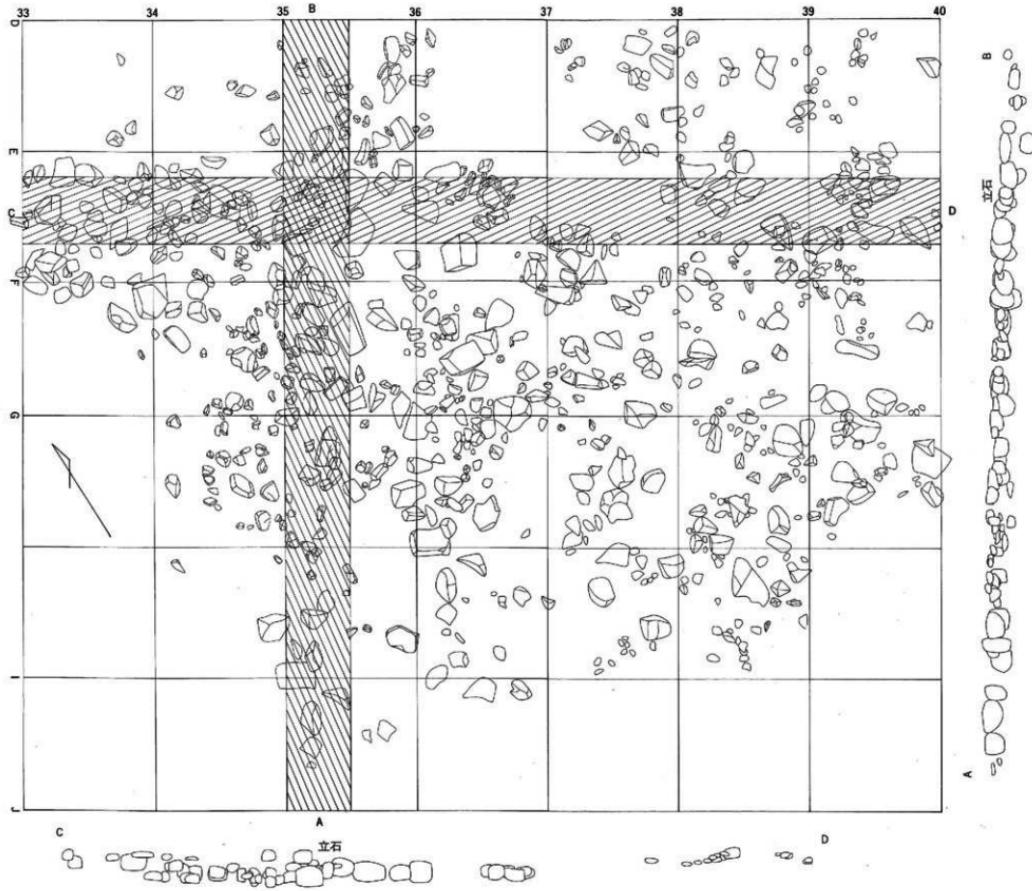


A

B

C

D



第11図 集石群実測図 S = 1/5



口) 集石群遺構

大原第三遺跡において最も広い面積を有し、その中心的なものが本集石群遺構である。集石の範囲は西が33列付近に始まり東は40列にまで達する約14mほどで南はI列から北へD列まで12m、D列より北は調査地区外で高い盛土のため調査ができなくて終っている。そのため北側へどのくらい集石が広がっているかは不明であるが、推定3~4mと思える。その推定長さを含めての広さは約200m²に及ぶ範囲である。この範囲の中に大きなものは長径70cmにもなる大小の自然石が集められている。この集石全体をながめるとこの中においても、石が集中する部分とあまり無い所、又、積石になっている部分等、変化に富んでいる。

全体的な観察は以上であるが、集石についての考察として必要なことは、当時の人々がどのような意味を持っていたかということだと思う。それはこの集石が何の目的で造られ、使われたのかということである。この集石遺構が前述の集石とある部分において共通する埋葬址的な考え方と祭祀址の二方面から考えてみたい。埋葬址であることが実証されるためには、直接人骨の出土すること、間接的には埋葬したと思われる遺構なり遺物の出土すること、或は埋葬に伴う行事の行われたことを証明するような状況がほしいのである。

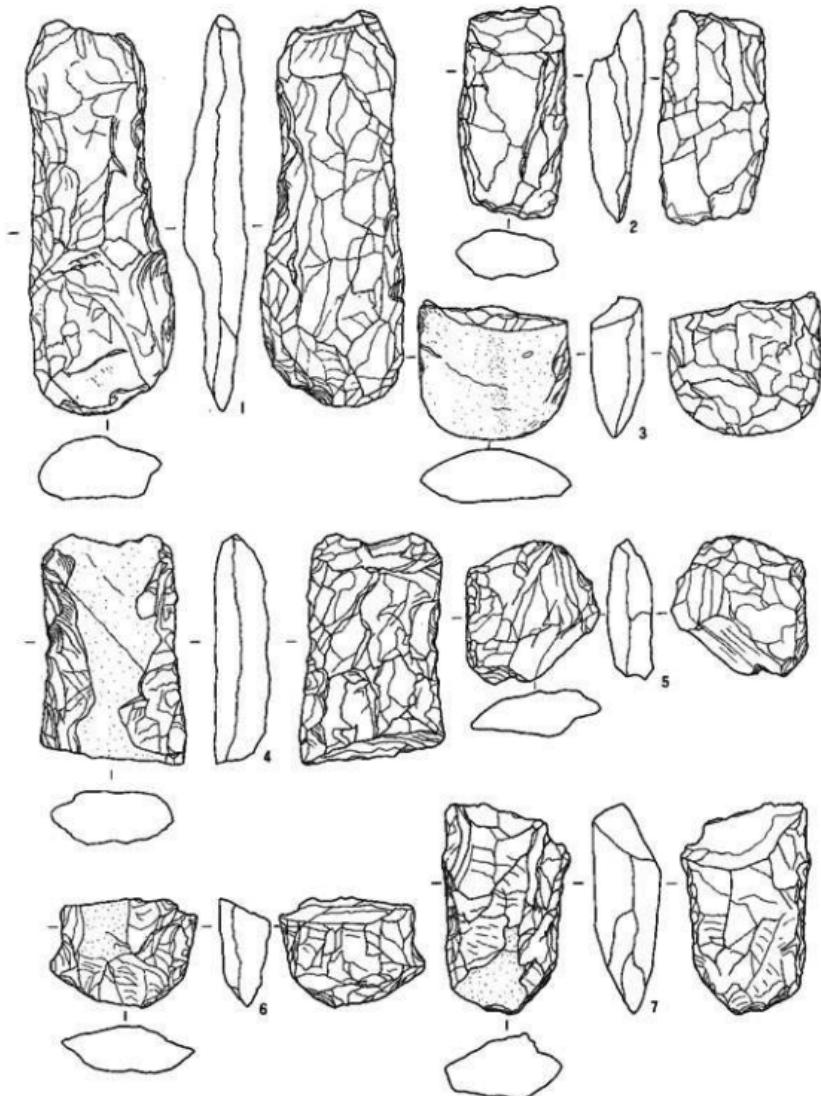
これ等のことを踏えて本集石群をみた時、残念ながらそれ等の遺構なり遺物を検出するまでは至らなかった。しかしこの集石の中にもいくつかの集中部分、また石のほとんど無い範囲、石が積まれたり、立っている状態等何かの意図を感じさせる所がある。それ等の期待をもち集石下の地下構造も調査の一部として行ってみたが、はっきりとした遺構の確認にまでは至らなかった。又、この集石を残した人々の生活した時代であるが、集石を取りまく時代としては、平安時代後半の集落が最も顕著である。その他前期と晩期の一時期、中期初頭においても遺物を確認できた。しかし集石中には出土遺物はほとんど無く、西角に早期押型文土器片と打製の石斧を少量出土したにすぎない。又、この集石は一時期に集められたものか、あるいはかなりの長い年月、何かあるたびに、その目的のために少しづつ加えられていったものか、これも考え



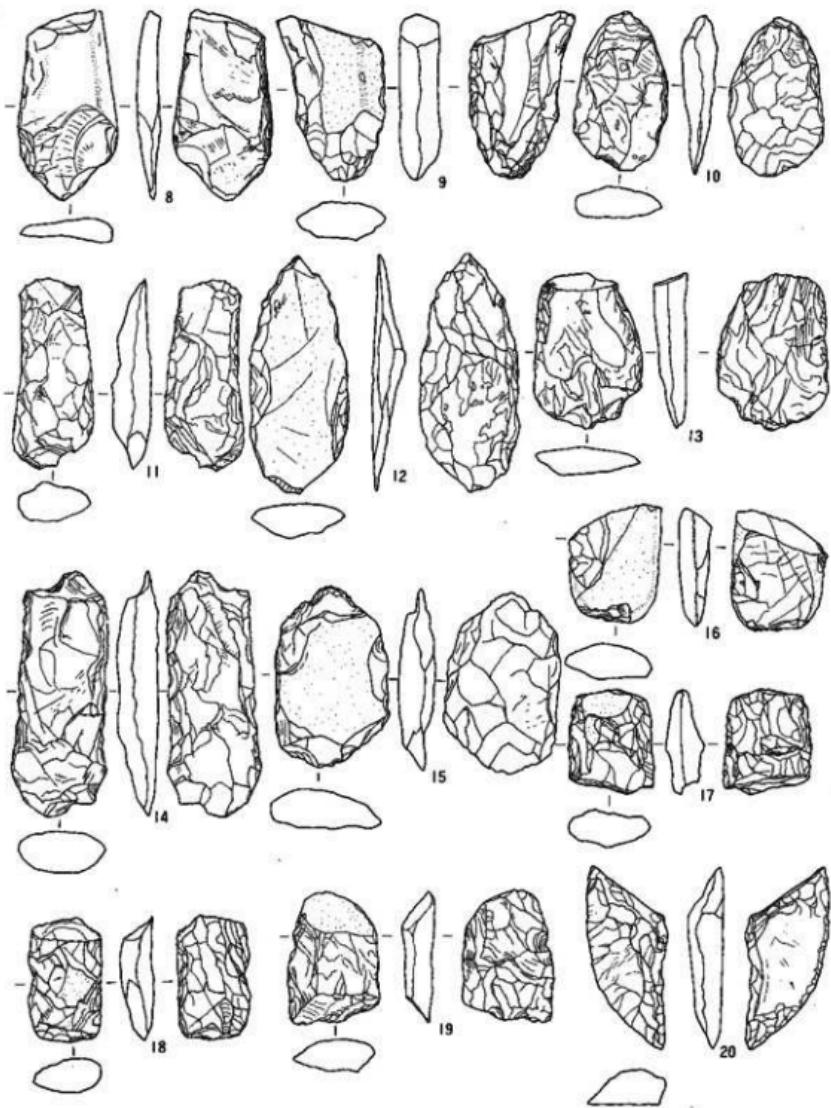
第12図 集石群調査状況

ねばならない問題である。又、祭祀址ならば、いかなる意味をもつ祭場であるのか、決定はしがたい。今後類似する遺構の出土を持ちながら研究したい。

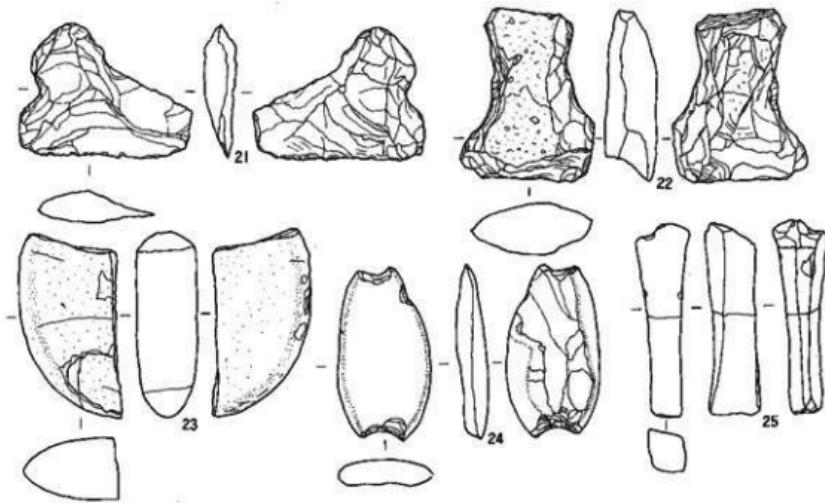
(柴 登巳夫)



第13図 石器実測図 (1) $S = \frac{1}{2}$



第14図 石器実測図 (2) $S = \frac{1}{2}$



第15図 石器実測図 (3) $S = \frac{1}{2}$

第3節 造 物

1. 石 器

打製石斧 総数21点の出土を確認したが、それ等を形態、大きさなどから4類に分けた。ほとんどが砂岩であり、そのうち7割までが欠損していた。使用時における欠損と思えるものが多く、脛部の中間で折れているのが多い。

第1類—a (第3図1~7)

厚手大型のもの7点をまとめてみた。そのうちの1・2・5・7は石の芯を使った石器で他は側刃を利用している。又、1・3・4・7は特に大型の石斧で重さを利用して作業をしたようを感じる。下部の刃部を薄くして鋭くしている。全体的には調整剝離は荒いが3は刃部を丸く細かな調整をしており整った石斧である。形態的には短骨型をしたものが多い。

第1類—b (第14図8~15)

全長8~13cmのもので最も多く見られる石斧の類である。全体的には短骨型をしたものが多いが、刃部が鋭く尖ったものが含まれており、作業により使い分けたと思われる。a類に比べ調整は細くなり、刃部も鋭くなっている。母石の側刃を使っているものが多く、砂岩がほとんどである。

第1類—c (第14図16~20)

全長4~10cmと短いものであるが、中間で折れているものが多いので、使用時には10~15cmあつたものと思う。形態的には短骨型が多く、調整もかなり細かな部分にまで行なわれている。石質は砂岩がほとんどである。

第1類-d (第15図22)

上下二ヶ所に刃部を設け、中間部の左右から抉りを入れて形を作っている。いわゆる分削型石斧と呼ばれる石斧である。一方がほとんど欠損しているが、明らかに分削形とわかるもので1点のみ出土した。母石の側片を利用して製作しており、調整は荒い。石質は砂岩である。

第2類 (第15図21) 石匙

刃部を下部に設けた打製の横型石匙である。1点のみ出土したが、両面より細かな調整を行ない、上部のつまみの部分に両側より抉りを入れて柄の際の紐がかりにしている。母石の芯を利用しており、最も一般的な打製石匙である。

第3類 (第15図23) 磨石

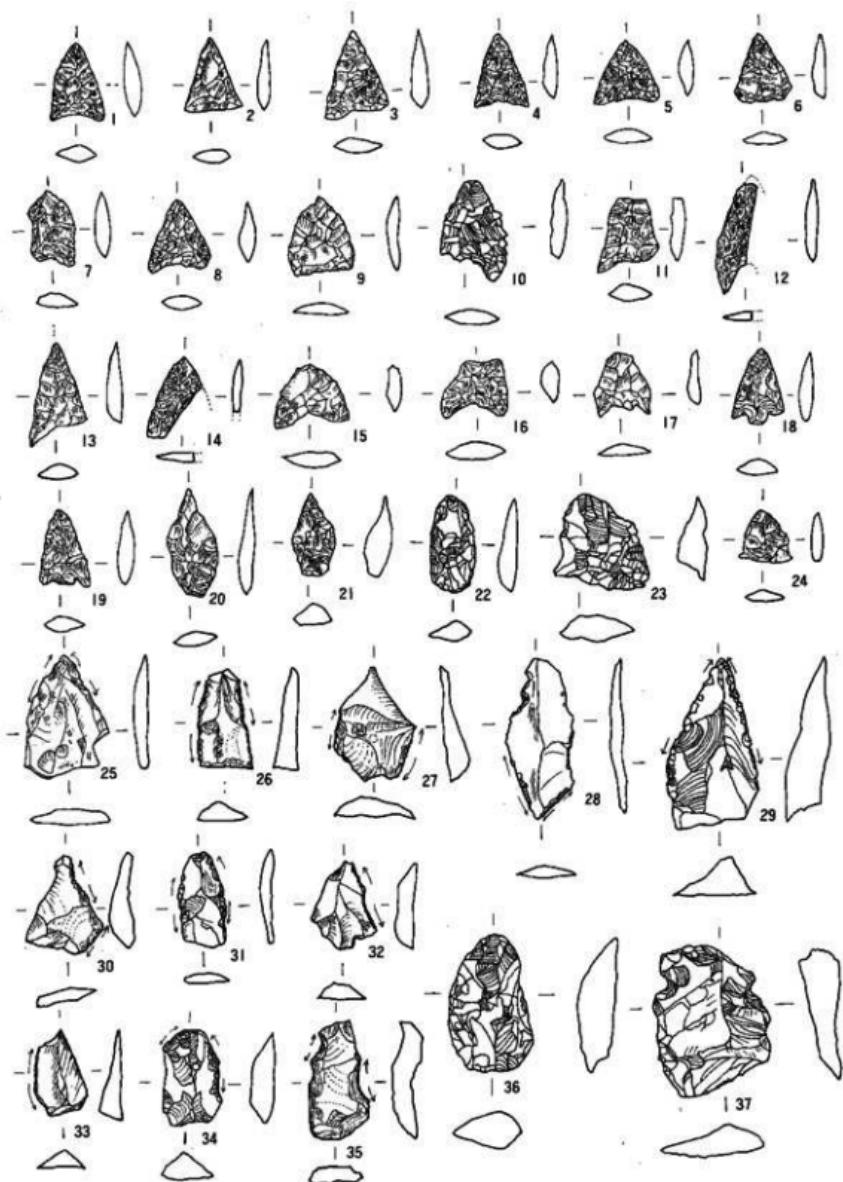
全体の少程度の残りだが両面をよく磨いて使用している。砂岩製の磨石である。側辺は軽いたたきに使用した痕跡を見ることができる。

第4類 (第15図24)

長楕円形の自然石を利用した石錘である。上下の二ヶ所に抉りをつけ紐がかりにしている。自然

第1表 石器要目一覧表(1)

| 番号 | 辨証 番号 | 分類 | 器種 | 法量 | | | 材質 | 現存状態 | | 出土位置 | 備考 |
|----|----------|-----|-------|--------|-------|------|-----|------|----|----------|----|
| | | | | 最大長さ | 最大巾 | 重量 | | 完形 | 欠損 | | |
| 1 | 13 | 1-a | 打製石斧 | 21.0mm | 7.6cm | 561g | 砂岩 | ○ | | I-34グリット | |
| 2 | " | " | " | 11.4 | 5.8 | 241 | " | | ○ | F-32 " | |
| 3 | " | " | " | 7.1 | 8.1 | 219 | " | | ○ | I-32 " | |
| 4 | " | " | " | 12.2 | 17.7 | 495 | " | | ○ | D-39 " | |
| 5 | " | " | " | 7.5 | 7.2 | 155 | " | | ○ | C-32 " | |
| 6 | " | " | " | 5.8 | 7.7 | 145 | " | | ○ | I-36 " | |
| 7 | " | " | " | 11.2 | 6.9 | 310 | " | | ○ | I-37 " | |
| 8 | 14 | 1-b | " | 10.0 | 5.3 | 92 | 粘板岩 | ○ | | 集石群 | |
| 9 | " | " | " | 8.8 | 5.7 | 73 | " | | ○ | " | |
| 10 | " | " | " | 8.5 | 5.0 | 90 | 砂岩 | ○ | | M-32グリット | |
| 11 | " | " | " | 10.1 | 4.3 | 108 | " | ○ | | G-30 " | |
| 12 | " | " | " | 12.6 | 5.3 | 120 | " | ○ | | M-30 " | |
| 13 | " | " | " | 8.3 | 5.9 | 99 | 粘板岩 | ○ | | I-33 " | |
| 14 | " | " | " | 13.0 | 5.0 | 180 | " | | ○ | D-38 " | |
| 15 | " | " | " | 9.7 | 6.2 | 145 | 砂岩 | ○ | | F-31 " | |
| 16 | " | 1-c | " | 6.3 | 5.8 | 80 | " | | ○ | K-34 " | |
| 17 | " | " | " | 4.6 | 4.7 | 60 | " | | ○ | 集石群 | |
| 18 | " | " | " | 6.7 | 3.9 | 69 | " | | ○ | H-39グリット | |
| 19 | " | " | " | 7.0 | 4.3 | 76 | " | | ○ | M-32 " | |
| 20 | " | " | " | 9.7 | 4.2 | 70 | 粘板岩 | | ○ | 集石群 | |
| 21 | 15 | 2 | 石匙 | 7.1 | 6.2 | 84 | 砂岩 | ○ | | D-29 " | |
| 22 | " | 1-d | 分削型石斧 | 9.1 | 6.5 | 201 | " | | ○ | H-32 " | |
| 23 | " | 3 | 磨石 | 9.9 | 5.0 | 270 | " | | ○ | E-35 " | |
| 24 | " | 4 | 石錘 | 9.4 | 5.0 | 100 | 粘板岩 | ○ | | D-34 " | |
| 25 | " | 5 | 手持ち砥石 | 10.3 | 2.9 | 88 | " | | ○ | H-32 " | |
| | | | | | | | | | | C-32 " | |



第16図 石器実測図 (4) $S = \frac{1}{16}$

第2表 石器要目一覧表(2)

| 番号 | 捕獲番号 | 分類 | 器種 | 法量 | | | 材質 | 現存状態 | | 出土位置 | 備考 |
|----|------|----|--------|-------|-------|-------|------|------|----|----------|----|
| | | | | 最大長さ | 最大巾 | 重量 | | 完形 | 欠損 | | |
| 1 | 16 | A | 石 繖 | 1.8cm | 1.4cm | 0.85g | 黒曜石 | ○ | | E-32グリット | |
| 2 | " | A | " | 1.8 | 1.4 | 0.55 | " | ○ | | E-38 " | |
| 3 | " | A | " | 2.3 | 1.6 | 1.00 | " | | ○ | F-36 " | |
| 4 | " | A | " | 1.8 | 1.4 | 0.65 | " | ○ | | F-32 " | |
| 5 | " | A | " | 1.5 | 1.7 | 0.75 | " | ○ | | E-38 " | |
| 6 | " | A | " | 1.8 | 1.5 | 0.55 | " | | ○ | H-32 " | |
| 7 | " | A | " | 2.0 | 1.1 | 0.80 | " | | ○ | K-32 " | |
| 8 | " | A | " | 1.8 | 1.6 | 0.90 | " | | ○ | H-32 " | |
| 9 | " | A | " | 2.0 | 1.5 | 0.80 | " | ○ | | G-31 " | |
| 10 | " | B | " | 2.6 | 1.7 | 1.25 | " | | ○ | L-31 " | |
| 11 | " | B | " | 1.4 | 1.6 | 1.00 | " | | ○ | E-39 " | |
| 12 | " | B | " | 2.9 | 0.8 | 0.75 | " | | ○ | G-31 " | |
| 13 | " | B | " | 2.6 | 1.4 | 0.95 | " | | ○ | I-27 " | |
| 14 | " | B | " | 2.0 | 1.0 | 0.65 | " | | ○ | F-33 " | |
| 15 | " | B | " | 1.6 | 1.9 | 0.85 | " | ○ | | G-36 " | |
| 16 | " | B | " | 1.5 | 1.7 | 1.05 | " | | ○ | F-38 " | |
| 17 | " | C | " | 1.6 | 1.5 | 0.70 | チャート | | ○ | G-30 " | |
| 18 | " | C | " | 1.9 | 1.3 | 0.70 | 黒曜石 | | ○ | F-36 " | |
| 19 | " | C | " | 2.0 | 1.3 | 0.70 | " | | ○ | P-29 " | |
| 20 | " | D | " | 2.8 | 1.3 | 1.15 | " | | ○ | I-36 " | |
| 21 | " | D | " | 2.2 | 1.1 | 1.05 | " | | ○ | H-35 " | |
| 22 | " | E | " | 2.5 | 1.2 | 1.45 | " | ○ | | F-41 " | |
| 23 | " | E | " | 2.6 | 2.4 | 3.60 | " | | ○ | H-39 " | |
| 24 | " | E | " | 1.3 | 1.4 | 0.50 | " | | ○ | E-35 " | |
| 25 | " | F | スクレイバー | 3.1 | 2.1 | 2.65 | チャート | | | I-32 " | |
| 26 | " | F | " | 2.6 | 1.4 | 1.95 | 黒曜石 | | | G-35 " | |
| 27 | " | F | " | 2.9 | 2.1 | 2.35 | " | | | F-37 " | |
| 28 | " | F | " | 4.2 | 1.8 | 1.60 | " | | | D-34 " | |
| 29 | " | F | " | 4.3 | 2.3 | 8.45 | " | | | I-32 " | |
| 30 | " | F | " | 2.6 | 2.0 | 2.15 | " | | | F-37 " | |
| 31 | " | F | " | 2.4 | 1.2 | 0.90 | " | | | K-30 " | |
| 32 | " | F | " | 2.2 | 1.7 | 1.25 | " | | | K-34 " | |
| 33 | " | F | " | 2.2 | 1.3 | 1.00 | " | | | D-32 " | |
| 34 | " | F | " | 2.5 | 1.5 | 2.15 | " | | | G-40 " | |
| 35 | " | G | " | 3.0 | 1.6 | 2.85 | " | | | D-34 " | |
| 36 | " | H | " | 3.5 | 2.1 | 7.45 | " | | | F-37 " | |
| 37 | " | I | 石匙 | 3.9 | 2.9 | 8.95 | " | | ○ | E-37 " | |

石を使った石鎌としては大型である。

A類 (第15図25)

四面を使用した小型の手持ち砥石である。中間より二つに折れて別々に出土した。使用度が高かったことが、残った形から想像できる。

B類 (第16図10~16)

総数24個出土した石鎌を5類に分けたが、最も多いのがこの類である。脚部の抉り込みが少なく、ほぼ二等辺三角形に近い形をしている。両面から細かな調整を行ない形を整えている。完形のものが5点ある。大きさもほぼそろっており、長さは2cm前後、巾は1.6cmほどである。

C類 (第16図17~19)

石鎌の脚部が長く、抉り込みの深いものをこの類とした。脚が長いため石鎌の全長も自然と長くなり2.6cmくらいのものが多い。石鎌が長くなっているので脚部や先端部の欠損が目立つ。調整は前のものよりやや荒い、素材は全部黒曜石である。

D類 (第16図20・21)

着柄のために両脚の中間に舌状に柄を作り出しているもので、有柄鎌と呼ばれるものがこの類になる。3点共に柄の部分は折れ欠損している。両面からの細かな剥離によって美しく形を整えている。

E類 (第16図22~24)

全体的に丸味をしている石鎌で先端もゆるやかな曲線で作り出され鋭どさは感じられない。調整は比較的細かな部分まで行なわれ形を整えている。

F類 (第16図25~34)

フレイクの側邊に刃をつけてスクレイバー的な用具に使っている。両側邊に刃をついているものがほとんどで、単なるフレイクとの差を見つけるのに十分注意しなければならない。

G類 (第16図35)

フレイクの両側邊に1ヶ所のノッチをつけたもので、ノッチドスクレイバーと呼ばれる石器である。二つのノッチは大きさを変えて作られ、使用する部分を分けたと考える。

H類 (第16図36)

大型の石鎌でも作ろうとして完成せずに中途のままになってしまったものであろうか。先端の両側は細かな剥離を重ねて形を作っているのが下部になるにつれて調整は荒く不整形である。

I類 (第16図37)

擬形の石匙で1点のみ発見された。上部両側邊に半径4mmくらいの抉り込みがついており、これは着柄の際の紐がかりにしたと思われる。上部がわずかに欠損しているが、両面より細かな剥離が行なわれ、左側と下部に刃部を設けている。

(柴 登巳夫)

2. 土器

イ) 縄文時代の土器（第17図）

第17図1はD-29グリットからローム層をわずかに掘り込んで単独に埋まって出土した。口縁部の直径30.3cmを測り上部12cmほどが残っている。口縁に1.3cm巾の粘土紐が一周している。これは整形する時に口唇部を折り返して作った時にできたものである。胎土中に少量の雲母と石英の小石粒を含み焼成はよくない。巾4cm位の縄文原体を横に回転して全面に縄文を施している。前期の土器である。

2はD-29グリットよりの出土で、口縁の直径27.2cmを測る深針型土器である。口縁から胴にかけ、半割竹管による平行線文を三段にはどこし頭部にも半割竹管による条線の格子目文をついている。口唇部には連続瓜形文を有しており、施文に半割竹管を使用したことうかがうことができる。焼成は良好で、胎土中に石

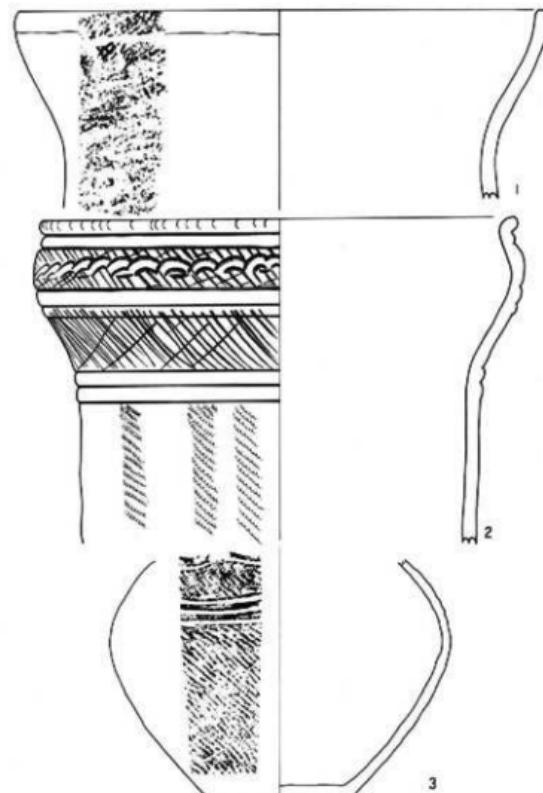
英粒を含み、土器内側は赤褐色を呈している。時期は中期初頭である。

3はG-31グリット中に単独でローム層を少し掘って伏さった状態で出土した。胴部最大径19.5cmで胴部下は完全に残っている。器面全体に縄文を施し、胴部から頭部にかけ3本の平行線文がある。平行線で区画された間には縄文ではなく磨かれている。器面の外側には全体にわたり「朱」を塗ってある。土器は5mmほどで薄いが焼成は良くしっかりした土器である。時期は晩期である。

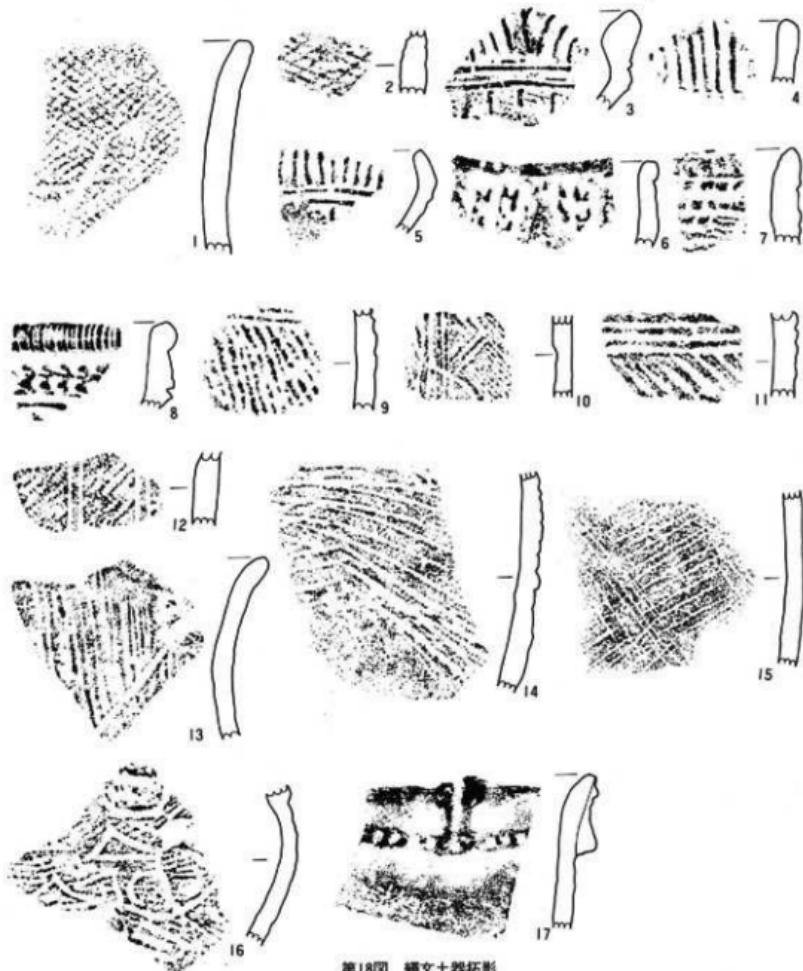
（柴 登巳夫）

ロ) 拓影土器（第18図）

第1類（18図1・2）縄文時代早期の押型文土器である。1・2共に格子目文で焼成は良くしっかりした土器である。



第17図 縄文土器実測図



第18図 縄文土器拓影

第II類A（18図3・4・5）前期諸繩式土器で細い粘土紐をはり付けた文様を施した土器である。

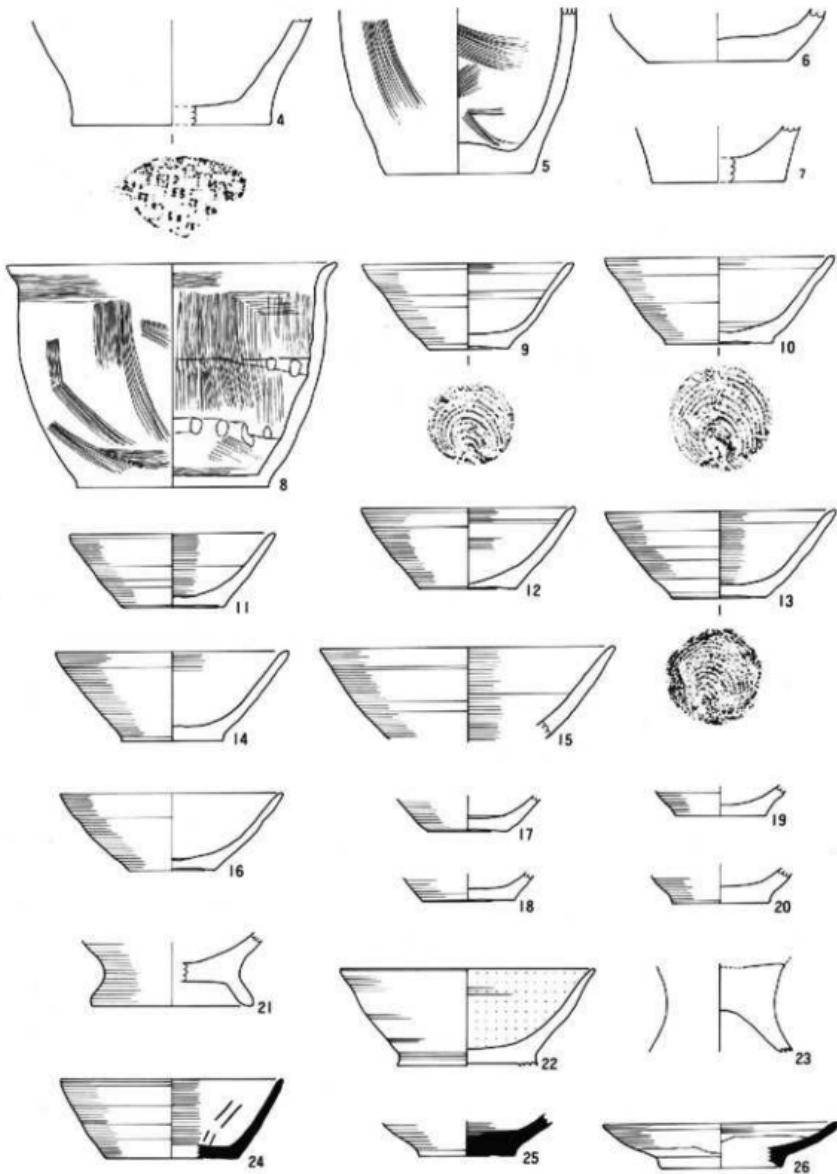
第II類B（18図7・8・9・10・11）中期初頭土器で半剖竹管を多く使って文様をつけている。

第II類C（第18図15）中期初頭土器で細い沈線を縦横につけて文様としている。焼成は良くかたい。平出III Aといわれる土器である。

第III類（第18図16・17）晩期土器で17は佐野式の粗成土器ではないかと思われる。

第IV類（第18図14）土器面に条痕文を施したもので、胎土中に石英粒を多く含み焼成はあまりよくない。晩期土器である。

（柴 登巳夫）



第19図 土器実測図

口) 平安時代の土器、陶器

1. 土器器

イ) 錐形土器 (第19図4・5・6・7・8)

(8)は口縁部まであり、完全に器形を観察することができる。それによると口径16.8cm、現高11.5cmをかぞえ、胎土中に多量の雲母を含んでいる。口縁はわずかに外傾しているが、頭部のくびれはきわめてよわい。器面外側は、ハケで調整してあり、なめらかな面を呈している。内面はハケ、ヘラ、指による調整で口縁部付近は横にハケを引いている。胴部は縱方向にヘラを動しているが荒い仕上げである。胴下部から底部にかけて是指先で押えつけで整形したもので爪の痕を残し凹凸が著しい。底部は平らな板の上に何度もかたつきつけて平らにしたと思われる。内面は明るい淡褐色をしている。

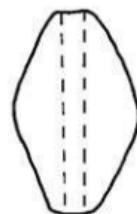
4・5・6・7も同類に考えられるが底部しかないため器形は不明である。4は網代底になっている。共通して胎土中に小石を含み焼成はあまりよくない。

ロ) 坯形土器 (第19図9~20)

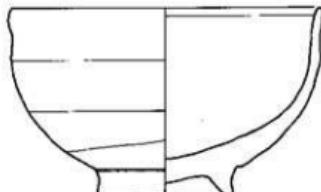
すべての底部に糸切痕をのこすもので、埴輪の使われたことを物語る。ほとんどが第1号住居址内の出土である。この壺において第19図の10・11・13・14・19に共通点を見ることができる。胎土中に多量の雲母と石英を含んでいる。器面の内外共にハケによる調整痕を残し、淡黄褐色をしている。14は内外面にススが付着している。12は底孔の壺で底部中央に10×15mmの格円の孔があいている。器面は灰褐色を呈し内外面共にハケの調整痕を残し、胎土内にいくつかの石粒が入っている。16は赤褐色の壺で内面にススが多く付着している。内面の調整は大変良い。9・17・18・19に共通点が見られる壺で、胎土が精選された器面は非常になめらかに調整されている。21は高台付で高台部分の整形時には埴輪に器をふせて回転させ底部を調整している。高台は個体と同一で付け高台ではない。壺であろう。22は内黒の高台付の土器である。内面は研磨によって仕上げられ底部は、埴輪から切り放し、ついで埴輪に伏せて、高台を貼りつけて、その部分をなでて仕上げたものと思う。



第20図 土器実測図



第21図 土器実測図



第22図 その他の遺物

第3表 出土土器・陶器一覧表

| 標印番号 | 出土位置 | 器形 | 時期 | 法量 | | | 焼成 | 胎土含有物 | 調査 | 備考 |
|--------|--------|----------|--------|--------|--------|---------|----------------------------|----------------------------|-------------|-------------------------|
| | | | | 高さcm | 最大巾cm | 厚さcm | | | | |
| 17回-1 | D - 29 | 縦耳 縦文 | (10.6) | 口徑29.8 | 0.8 | あまり良くない | 小石まじり | | | |
| 17回-2 | # | # | (18.7) | 口徑27.0 | 0.8 | 比較的良い | 比較的良く精選されている | | | |
| 17回-3 | | 壺 | (13.5) | 19.6 | 0.6 | # | # | | | |
| 19回-4 | N - 31 | 土野 | (5.4) | | 0.9 | あまり良くない | 小石まじり | | | 織代底 |
| 19回-5 | 1 住 | # | (8.5) | | 0.8 | # | 外側にテテ方向のハケ目 内側にヨコ方向のハケ目 | | | |
| 19回-6 | # | # | (2.5) | | 1.0 | 比較的良い | 多數の小石 | | | |
| 19回-7 | # | # | (2.8) | | 1.1 | あまり良くない | 小石まじり | 外側にテテ方向のハケ目 内側にテテ方向のハケ目 | | |
| 19回-8 | # | 壺 | # | 11.5 | 口徑16.8 | 0.7 | | | | |
| 19回-9 | # | 环 | # | 4.4 | 10.8 | 0.3 | 比較的良い | 比較的緻密 雲母少しまじる | 内側一部横ナデ ロクロ | |
| 19回-10 | # | # | # | 4.5 | 11.7 | 0.5 | # | 少し小石まじり | # | 外側に一部火を受けて いる |
| 19回-11 | # | # | # | 3.8 | 10.5 | 0.5 | あまり良くない | 小石まじり | 粗、雜 | # |
| 19回-12 | # | # | # | 4.2 | 10.9 | 0.5 | 比較的良い | 比較的緻密 | 横ナデ | 内側一部焼けている |
| 19回-13 | # | # | # | 44.5 | 11.8 | 0.5 | # | 小石、砂、雲母まじる | # | |
| 19回-14 | # | # | # | 4.6 | 11.8 | 0.5 | あまり良くない | 粗、雜 | 内側横ナデ | 外側に火を受けている |
| 19回-15 | # | # | # | (4.8) | 15.1 | 0.6 | 良好 | 精選されている | # | 内側薄擦 |
| 19回-16 | C - 32 | # | # | 4.0 | 11.4 | 0.4 | 比較的良い | | # | 内側一部スグが付着し ている |
| 19回-17 | 1 住 | # | (1.8) | | 0.5 | # | 精選されている | | # | |
| 19回-18 | # | # | (1.4) | | 0.5 | # | # | | # | |
| 19回-19 | 裏 瓢 | # | # | (1.6) | | 0.5 | | # | # | |
| 19回-20 | # | # | # | (1.8) | | 0.7 | | | # | |
| 19回-21 | 1 住 壺 | # | (3.4) | | 0.7 | 比較的良い | 砂、雲母含む | | # | 高台付 |
| 19回-22 | B - 31 | # | # | (5.0) | 13.6 | 0.6 | # | 精選されている | # | 内黒、高台付 |
| 19回-23 | F - 39 | 高環 | # | (4.5) | | | | 小石まじり、粗雑 | 未留り底 | # |
| 19回-24 | 集 石 | 环 | 彌惠 | 4.1 | 11.4 | 0.4 | 比較的良い | 鐵、密 | # | |
| 19回-25 | F - 37 | # | # | (1.7) | | | 0.6 | 良好 | # | |
| 19回-26 | 1 住 豆 | 豆 | 灰釉 | 2.3 | 12.0 | 0.4 | # | # | # | 鉄の発色が良い 高台付 |
| 20回-27 | # | 壺 | # | 4.3 | 口徑13.6 | 0.5 | # | # | # | 高台付 |
| 20回-28 | # | # | # | 6.1 | 口徑16.8 | 0.4 | # | # | # | 重ねて焼いたためか内 側に一部落合が付着 |
| 20回-29 | G - 24 | 小瓶 | # | (6.7) | 9.2 | 0.4 | # | # | # | 鉄の発色良好 |

2. 須恵器

杯(第19回24・25) 須恵器の杯で2点共に灰青色を呈し、糸切り底である。焼成は良い方である。

3. 灰釉陶器(第19回26・第20回27・28・29)

26は高台付の皿である。現高2.3cm口径12cmほどである。施釉で白色に近く焼成は良好である。

灰釉陶器高台付壺（第20図27・28）

2点共に付高台になっている。外面は輪轂整形における同心円の細線が残り、白色の施釉をしている。中津川窯の所産で10世紀ころのものと思う。

灰釉陶器小瓶（第20図29）

高台を少し付け輪轂による整形をしている。胴下半分しか残っていないのが残念である。表面の調製はあまり良くないが焼成は良好である。

4. 土 鍋（第21図）

第1号住居址から出土したもので、中央に直径4mmの穴が貫通している。両端が磨滅し使用の多かったことをうかがう。

ハ) その他の遺物

天目茶壺（第22図）

F-36グリット第III層と比較的浅いところからの出土である。角張った高台をつけ、胎土は灰白色になり高温で焼かれたことを物語っている。江戸中期ころの所産であろう。（柴 登巳夫）

第IV章 ま と め

大原第三遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町福与大原地籍に所在する。遺跡地は伊那山脈の西山麓のゆるやかな扇状地に占地している遺跡である。

本報告書は、緊急発掘調査によるものであるため、昭和53年度中に絶ての業務を終了する義務を負わされているため、図及び図版を中心として編集した。資料の検討は後日にゆることとし得るを得なかった。

遺構について、今回の調査においては、平安時代の住居址1軒、建物址1基、集石址1基、集石群1ヶ所の調査を行なった。

1. 住居址 本住居址は東西3.6m、南北4.2mの隅丸長方形の堅穴式住居址である。カマドは北壁に設けられ石芯の粘土ガマである。

柱穴は、P₄のみが確実なものであるが他のピットは柱穴として問題のあるものである。

カマドに向って左側には柱穴は発見されなかった。このことは、この時期の住居址には往々認められることがある。こうした例は、この時期あたりから壁外に柱穴が設けられることが多くなるようである。

2. 建造物址 本址の柱間間隔は西側のP₁・P₂が2mを測るが、他の柱間間隔は2.3mとや、広く梯形をなしている。掘立建物址にはこうした例は多いことが知られている。柱穴の深さが一定しているところより建造物址と考えてよからう。

3. 集石 本址は直径が平均1.2mの不整円形の集石址である。近年こうした事例が多く発見されてきているのであるが、いずれもその性格について的確な答をだすに至っていない状況である。今後の研究に期待した。

4. 集石遺構 本址は一部直線で区画された200m²の範囲に広がる集石遺構である。本遺構については柴登巳夫氏が本文中に述べられているように埋葬か祭祀址かいろいろな面が考えられるが、決定的資料に欠けているところから今後の研究をまつこととした。

本調査報告を経るにあたり、この調査について種々の御指導と御配慮を賜った、県教育委員会担当各位、町当局、学生の皆さん並びに地元の方々の御協力に対して厚く御礼を申し上げる次第である。

調査団長 友 野 良 一

図 版



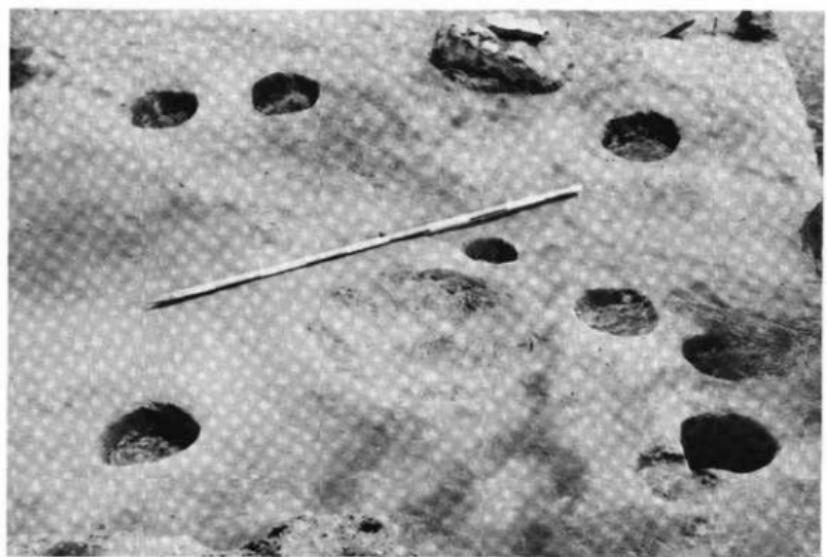
遺跡近景



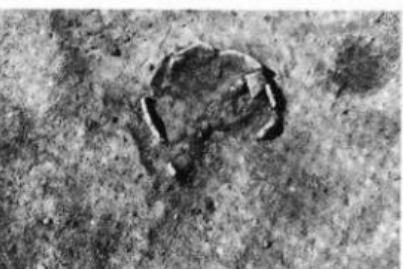
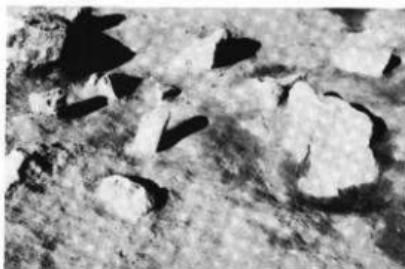
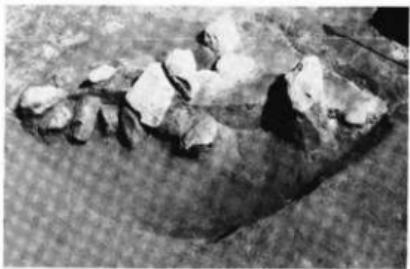
第1図版 遺構全景



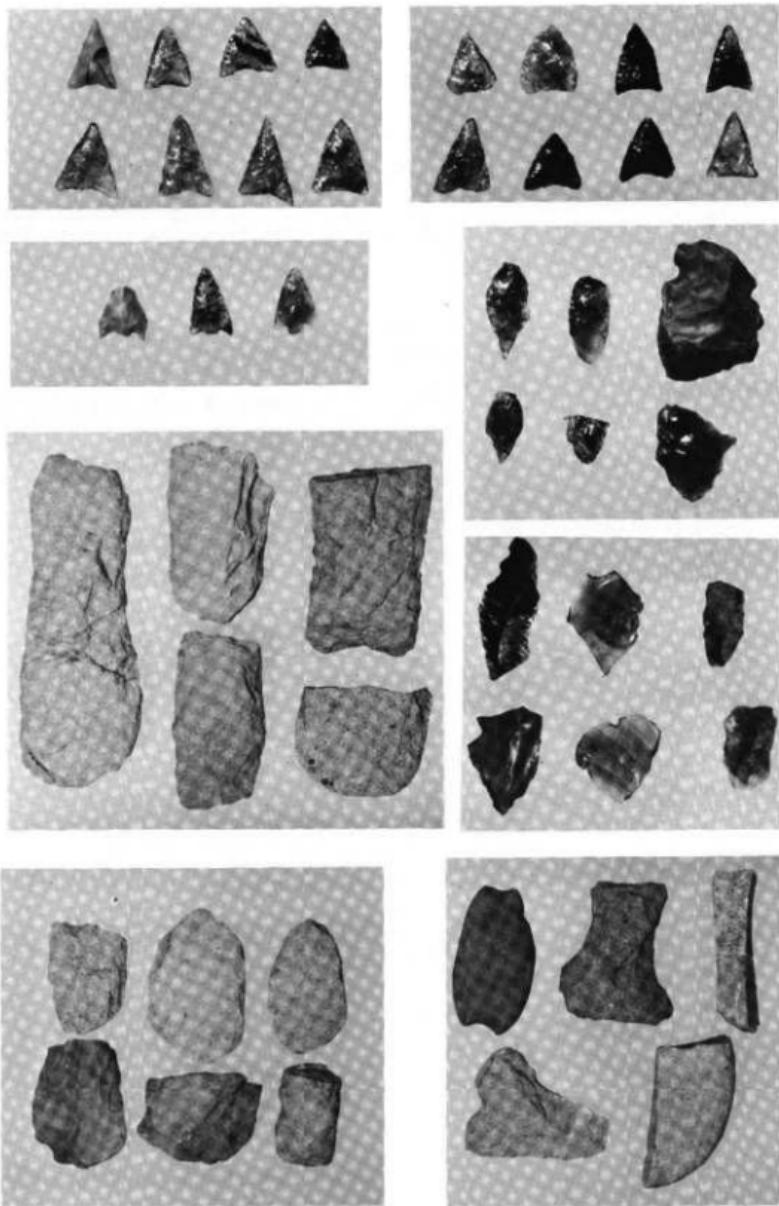
第1号住居址全景



第2回版 建造物址



第3図版 調査状況と遺物出土状態



第4図版 出土石器